

昭和歌謡 1945～1989
歌謡曲黄金期のラブソングと日本人

平尾昌晃

廣濟堂新書

はじめに

先日、テレビのクイズ番組を見ていたら、とてもおもしろいことがあった。

解答者のなかに若手のお笑い芸人たちにまじって、いま大人気の歌って踊る女性アイドルグループの一員がいた。

なにがおもしろかったのかというと、出された問題とその解答だった。

出題されたのは、次のような、私たちなら誰も答えられる、実に簡単な問題だった。

「次の□のなかにあてはまる漢字一字を答えなさい。ただし、□のなかは同じ漢字です」という説明があつて、画面に現れたのは、こんな文章だった。

□は世につれ、世は□につれ

「なんだ、馬鹿にやさしい問題だなあ。こんなの誰だってわかるだろう」と、僕はあまりにも愚問だったので、テレビ番組を変えようとリモコンを握った。だが、驚いた。なぜなら、解答者たちが全員、首を傾げているからである。

思わずリモコンを置いた。やがて、彼らはフリップに何やら書きはじめた。

「はい、じゃあ、〇〇さんの答えをしてみましょう」と先の女性アイドルの答えが画面に映った。彼女の答えは、「金」だった。思わず、笑った。たしかに、この世は万事、金の世の中だ。

他の解答者も「男」だったり、「服」だったり、「親」だったり……。正解者はひとりもいなかった。

「〇〇さん、あなた、本当に歌手ですか？」と、司会者がからかっている。

（ああ、そうなんだ。やっぱりな）と、僕は合点がいった。

いや、僕は、彼ら若い解答者を蔑あはんでいるのではない。

もはや、歌の持つ意味が大きく変わり、「歌は世につれ、世は歌につれ」という時代ではなくなったのである。

その証拠に、正解が発表されても、解答者たちは一様に「へえ」と驚き、誰も「ああ、

そうだった。間違えた」とは思っていなかった。

平成もいつの間にか、25年も経った。

その間にたくさんヒット曲も生まれた。もちろん、毎年レコード大賞も選ばれている。だが、ここ10年の大賞受賞者を見て驚く。浜崎あゆみが3年連続受賞したあと、ミスター・チルドレン、倅田來未、氷川きよし、コブクロ、そしてEXILEが3年、続いて、AKB48が2年連続受賞である。

しかも、受賞曲に至っては、ここに掲げたところで、若い人を除けば、きっと知らない人が多いだろうし、リズム感に溢れたこれらの曲を、歌詞を見ないで完全に最後まで歌える人はかなり絞られるにちがいない。

もちろん、僕もこれらの歌は聴いていて、心地よいし、ビジュアル的にも見ていて、おしゃれだし、カッコいいと思う。

だが、僕は、そもそも「歌」というものは歌手やアーティストのものではない、と思っている。もちろん、作曲者や作詞家の所有物でもない。「歌」は、多くの人が声を出して歌ってこそ、「歌」だと思うのだ。

その意味では、時代とともに、いつの間にか、「歌」はみんなのものではなくなり、より個人的なものになった。それに伴って、ミリオンセラーなどという大ヒット曲も少なくなった。まさに、「歌」の持つ意味が変わってきたのである。

そんなことを特別に意識したのではないけれど、最近、僕は「うた先案内人」と称して、多くの人と、「歌」を歌って楽しむコンサートをはじめた。

会場に歌詞が映り、歌いたいお客さんが客席からステージに上がって歌う。または、僕が見本を示し、ワンポイント・アドバイスをしたあと、客席の全員といっしょに歌う。もちろん、その日に歌う歌も、自分でどの曲がいいか、そのための選曲をした。

僕は当日、コンサートに来てくれるであろう年齢層を考え、歌の難易度も、やさしい曲からちよつと歌いこなすには難しい曲まで幅広く揃えることにした。歌の種類も、フオークから演歌まで、もちろん、外国のカバー曲まで用意した。

すると、どうだろう。

それぞれの「歌」が生き返り、僕の脳裏に思い出がよみがえり、（ああ、この歌を歌いたい人もたくさんいるだろうな）とか、（こんな歌もいいな）とか、どの曲を選んで

いいか、本当に困惑してしまった。しかたがない。(これは次回に譲ろう)と、どれだけの名曲があとまわしにされたか、はかりしれない。ここで、特筆すべきは、それらはすべて、「昭和の戦後の歌」だったのである。

昭和の「歌」のうち、「戦後」から昭和64年まで、約45年間。その間のヒット曲は、いまでも多くの人が口ずさむことができる。

「歌」がまだ「流行歌」、あるいは「歌謡曲」と呼ばれた時代の「歌」は、いまのように、決してその歌を歌った歌手だけのものではなく、まさに、たくさんの人が、声を出して歌ったみんなの「歌」だったことが、改めてよくわかったのである。

会場の人たちといっしょに歌うコンサートは大盛況。

美空ひばりさんの「東京キッド」、「お祭りマンボ」、大津美子さんの「ここに幸あり」、高峰秀子さんの「銀座カンカン娘」という古い「歌」からはじまり、「いつでも夢を」、「君といつまでも」、「瀬戸の花嫁」、「川の流れるように」……。

僕の進行に合わせて、当日、会場に集まった人たちが次々と歌ってくれる。

その楽しそうに歌う姿を見て、僕は「ああ、これが歌なんだ」と心から思った。そし

て、これからもこうした、歌手が歌うのではない、「みんなで歌うコンサート」をずっと続けていこうと思った。

この本は、「うた先案内人」を自称する僕が、あなたが「歌う」ための「昭和歌謡」を時代順に選んだものである。

このなかの一曲でも多く歌っているうちに、あなたの胸に、若かった頃のあなたの思い出がよみがえってくれたら、そして、声を出して歌ってくれたら、こんなにうれしいことはない。

ここに集めた「歌」は、すべて、あなたのための「歌」なのだから。

平成二十五年盛夏

平尾昌晃

昭和歌謡 1945～1989

歌謡曲黄金期のラブソングと日本人

目次

第一章

はじめに 3

昭和20年代 1945～1954

リンゴの唄

(並木路子・霧島昇)

16

東京ブギウギ

(笠置シヅ子)

22

銀座カンカン娘

(高峰秀子)

26

悲しき口笛

(美空ひばり)

29

テネシー・ワルツ

(江利チエミ)

33

第二章

昭和30年代 1955～1964

ここに幸あり

(大津美子)

36

有楽町で逢いましょう

(フランク永井)

39

嵐を呼ぶ男

(石原裕次郎)

43

ダイアナ

(山下敬二郎)

51

星はなんでも知っている

(平尾昌章)

57

黒い花びら

(水原弘)

63

第三章

昭和40年代前半 1965～1969

- 黄色いさくらんぼ (スリー・キャッツ) 65
 ミヨチャン (平尾昌章) 68
 コーヒー・ルンバ (西田佐知子) 76
 いつでも夢を (橋幸夫・吉永小百合) 79
 恋のバカンス (ザ・ピーナッツ) 82
 高校三年生 (舟木一夫) 85
 サン・トワ・マミー (越路吹雪) 87
- 涙の連絡線 (都はるみ) 92
 君といつまでも (加山雄三) 94
 おもいで (布施明) 96
 夕陽が泣いている (ザ・スパイダーズ) 103
 想い出の渚 (ザ・ワイルドワンス) 105
 霧の摩周湖 (布施明) 108
 この広い野原いっぱい (森山良子) 112
 夜霧よ今夜も有難う (石原裕次郎) 114
 ブルー・シャトウ (ジャッキー吉川とブルー・コメッツ) 117

第四章

昭和40年代後半 1970～1974

- 真赤な太陽 (美空ひばり) 120
 恋のしずく (伊東ゆかり) 122
 銀河のロマンス (ザ・タイガース) 127
 エメラルドの伝説 (ザ・テンプターズ) 130
 長崎は今日も雨だった (内山田洋とクール・ファイブ) 133
 夜明けのスキヤット (由紀さおり) 136
 圭子の夢は夜ひらく (藤圭子) 140
 誰もいない海 (トワ・エ・モア) 143
 よこはま・たそがれ (五木ひろし) 145
 また逢う日まで (尾崎紀世彦) 152
 17歳 (南沙織) 156
 瀬戸の花嫁 (小柳ルミ子) 159
 どうにもとまらない (山本リンダ) 165
 せんせい (森昌子) 167
 喝采(ちあきなおみ) 169
 ひなげしの花 (アグネス・チャン) 172

第五章

情熱の嵐 (西城秀樹) 175
 神田川 (かぐや姫) 178
 うそ (中条きよし) 180
 二人でお酒を (梓みちよ) 184
 昭和50～60年代 1975～1989

年下の男の子 (キャンディーズ) 190
 シクラメンのかほり (布施明) 192
 なごり雪 (イルカ) 194
 木綿のハンカチーフ (太田裕美) 196
 北の宿から (都はるみ) 198
 ペッパー警部 (ピンク・レディー) 201
 津軽海峡・冬景色 (石川さゆり) 204
 硝子坂 (高田みづえ) 207
 勝手にしやがれ (沢田研二) 210
 秋桜(コスモス) (山口百恵) 214
 カナダからの手紙 (平尾昌晃・畑中葉子) 216
 与作 (北島三郎) 218

ブレイバックPART2	(山口百恵)	220
いい日旅立ち	(山口百恵)	223
いとしのエリー	(サザンオールスターズ)	225
舟唄	(八代三紀)	228
贈る言葉	(海援隊)	232
昂	(谷村新司)	234
青い珊瑚礁	(松田聖子)	236
恋人よ	(五輪真弓)	240
ルビーの指輪	(寺尾聰)	243
ワインレッドの心	(安全地帯)	247
クリスマス・イブ	(山下達郎)	249
北ウイング	(中森明菜)	251
桃色吐息	(高橋真梨子)	254
時の流れに身をまかせ	(テレサ・テン)	258
天城越え	(石川さゆり)	261
乾杯	(長淵剛)	263
川の流れのように	(美空ひばり)	266

第一章

昭和20年代

— 1945 ~ 1954 —

リンゴの唄

昭和21

サトウハチロー作詞 万城目正作曲 仁木他喜雄編曲

並木路子・霧島昇歌 (日本コロムビア)

食べたかった「赤いリンゴ」

戦後の「昭和歌謡」を語る上で、僕にかぎらず、誰でもまず最初
 にあげる「流行歌」は、並木路子さんの「リンゴの唄」だろう。

廃墟となった当時の東京で、そこに必死で生きる人々のモノクロ

のニュースの映像が流れ、「戦争が終わり、人々によりやく笑顔が戻った」というナレ
 ーションがはじまると、決まってバックに、この「リンゴの唄」が流れたものだった。

たしかに、曲調は明快で、並木路子さんの透き通った歌声も気持ちがいい。

僕も、まだ8歳の時に、実際に、この歌を耳にした。

だが、その時のこの歌の感想は、決して「日本に平和が戻り、人々は明るく笑顔を取
 り戻し、それぞれ希望に燃えて新たな一歩を踏み出した」などというニュースのナレー



昭和21年1月

シヨンとはほど遠いものだった。

僕は、東京大空襲で家を焼かれ、終戦の時には、家族とともに、父の別荘のあった湘南に住んでいたのだが、とにかく空腹でやりきれなかった。いつも、腹をすかせ、いまではすっかり死語になってしまった「ひもじい」思いで、毎日を過ごしていた。

これは決して、僕だけではないだろう。この歌が巷に流れていた時に、少年少女だった誰もが、「何でもいい、腹いっぱい食べてみたい」と思っていたと確信する。僕は、まだよかった。東京の家は焼けたけれど、住む家はあったし、両親も家族もいた。だが、当時の上野などには、「浮浪児」と呼ばれる子供たちがたくさんいた。

戦争で住む家どころか、家族をすべて失い、必死の思いで生きている少年少女たちだ。戦後の調べで、敗戦時には約3万5千人の「浮浪児」がいたという。少年や少女たちは、食べるものを求めて、人が集まる駅に行った。だが、誰ひとりとして、食べ物を与える人はいなかった。誰もが飢えていたからだった。彼ら少年少女たちは、そのうち、仲間ができて、行動を共にした。ゴミ箱を漁り、口に入るものなら何でも食べた。腐ったものを食べて死んだ子が何人もいた。だが、誰も驚かなかった。

僕たち、当時の子供たちから見た戦争直後は、そうだったのである。

そんな時代にラジオから流れてきたのが「リンゴの唄」だった。その意味では、当時、おなかをすかせていた、たくさんの子供たちにとっては、この歌は、かなり残酷な歌だったにちがいない。

いや、腹をすかせていたのは、子供たちばかりではなかった。いまでは想像もできないが、当時の日本人全員がすきつ腹を抱えていたのだ。一面の焼け野原の東京に、たくさんさんの貧しい人たち……。

そこに、流れた「リンゴの唄」。

実際、NHKの公開録音番組で並木さんがステージから客席に降りて、この歌を歌いながらリンゴを配ろうとしたら、会場はリンゴの奪い合いで騒然となったというエピソードを聞いたことがある。それほど、人々は飢えていたのだ。

この歌が大人だけでなく、子供だった僕たちにまで強烈な記憶として残ったのは、サトウハチローさんの詞のうまさによるところ大である。

特に、歌い出しの「赤」という色だろう。そして、黙って見ている空の「青」。この色彩のコントラストが当時、モノクロの世界に住んでいた敗戦直後の人々に、明るさと希望をもたらしたのだろうと思う。

当時八歳だった僕は、正直言つて、この歌を「おいしそうな唄」だと思った。なぜなら、1番の歌詞だけで、リンゴが5回も出てくる。しかも、「赤い」リンゴである。いまだは何でもないかもしれないが、僕のリンゴのイメージは決して赤くない。緑色だった。

この歌が流れた時代に、「赤いリンゴ」をいっただこの誰が食べられたのだろうか、といまさらながら思う。

たつた五行で、すべてを表現する「歌」の素晴らしさ

音楽的に見ると、この「リンゴの唄」は、ワン・コーラス5行で構成されている。したがって、4番まで合計20行である。

いまのJポップを聞けばよくわかるが、1番だけで20行あったりする。そうすると、よほどのことがないかぎり、歌詞をなかなか覚え切れない。三度目のレコード大賞を獲得したEXILEの「I Wish For You」という歌は、全部で57行で構成されている。

その点だけ考えても、この「リンゴの唄」の完成度はかなり高いといえる。なにしろ、最初の5行のワン・コーラスだけで、もう歌が完結しているのだから。

「歌」は、メロディだけでも「歌」ではないし、詞だけでも「歌」にならない。歌詞と曲とリズムがいつしよになつてはじめて「歌」が生まれる。そして、ひとりの歌手ではなく、いかに巷の多くの人々によつて歌われるかどうかで、その「歌」の生命力が生まれると僕は思っている。

その点から見ても、この「リンゴの唄」が今日まで歌い継がれている生命力の源は、最初のわずから行のワン・コーラスにあると思う。

ちなみに、この「リンゴの唄」は敗戦後の日本ではじめて作られた映画「そよかぜ」の主題歌だ。

映画は、レビュー劇場の照明係の少女（並木路子）が楽団員たち（佐野周二や上原謙）に助けられながら歌手になっていくという単純なスター誕生物語。

主人公の並木さんが、多くの女性たちがもんぺ姿で働くリンゴ園の場面で、この歌をはちきれんばかりの笑顔で、楽しそうに歌う。

もちろん、「そよかぜ」はモノクロ映画なのだが、なぜかリンゴが赤く感じられるのも、この歌の歌詞とメロディのせいだろう。

並木さんは、戦前からの松竹歌劇団の娘役のスター。

だが、戦争で父親と次兄を失い、東京大空襲で母親を亡くしている。当時、まだ24歳だった並木さんがそうした悲しみを胸に秘めながら、この「リンゴの唄」の明るい歌声を通して、多くの人たちを励ましてくれたのだと思うと、この歌の持つ素晴らしさが、さらにわかると思う。

その並木さんも、平成13年4月、急性心筋梗塞でお亡くなりになった。享年79歳。だが、並木さんが逝ってもなお、「リンゴの唄」は、きつと永遠に生き続けることだろう。

なお、並木さんの歌声だけを記憶されている方が多いと思うが、最初のレコーディングでは、「そよかぜ」に出演し、戦前から「旅の夜風」「目ン無い千鳥」などのヒット曲で知られた人気歌手・霧島昇さんの希望で並木さんとのデュエット曲となっている（並木さんがソロで歌う音源はのちの録音）。

東京ブギウギ

昭和23

鈴木勝作詞 服部良一作曲・編曲

笠置シヅ子歌 (日本コロムビア)

僕の洋楽事始

進駐軍がまだ日本の各地をジープで走り回り、日本のホテルや劇場が米軍の占領下にあった時代、「リンゴの唄」に続いて、ヒットしたのが、この「東京ブギウギ」である。

だが、僕は「リンゴの唄」は、戦争直後、実際に耳にした記憶があるが、この「東京ブギウギ」を直接聞いた覚えはない。いや、戦後の大ヒット曲のひとつだから、きっとラジオから流れていたのだと思うが、「リンゴの唄」ほどの確かな記憶がない。

不思議なことに、笠置シヅ子さんの代表曲であるこの「東京ブギウギ」を知ったのは、僕がロカビリー歌手として売れてからだから、かなり後になる。

でも、なぜ、この歌を少年時代に聞いた記憶がないのだろうとふと考えてみたら、ひ



昭和23年1月

とつ、大きな原因があった。それは、僕の音楽的な目覚めという衝撃的な出来事と関係している。

この歌がヒットしていた頃、僕が住んでいた湘南の家で年に2回ほど、ダンスパーティーが開かれていた。というのも、僕の家族は、僕を除いてみんな音楽が好きで、兄弟たちは、みんなクラシックに目が向いていた。長男はフルート、次兄はバイオリン、姉はピアノ。また祖父の平尾重四郎という人は、クラシック音楽家として有名だった。そんな関係で、毎年お正月には音楽会、そして、ダンスパーティーがわが家で行われていたのだ。

ダンスパーティーが開かれると、末っ子の僕は、お客さまの靴磨きと蓄音機でLPレコードをかける担当を兄から命じられていた。

そんなあるパーティーの折、厚木のベースキャンプからわが家にやってきた米軍の特校さんが、靴磨きのお返しに、「ほら、坊や、お土産だよ」と一枚のLPをくれた。

早速、蓄音機にかけたところ、そのなかの一曲「キッス・オブ・ファイアー」に僕は完全にしびれてしまった。

「なんと素晴らしいんだ！」

ほかにも、ピング・クロスビー、パティ・ペイジなどの歌に酔いしれていた。

体で歌う人たちがいた！

こうして洋楽の魅力を知った僕は、次第に音楽をやってみたいと思うようになり、「平尾昌章とオールスターズ・ワゴン」を結成して、バンド活動をするようになった。これがロカビリー歌手へとつながっていく。

当時僕らがやっていたのはエルビス・プレスリーをはじめとするアメリカのカバー曲が中心だったが、それだけでは何かもの足りない。子供の頃から自然と体に染み付いた邦楽の魅力、そして衝撃を受けた洋楽の魅力、これをミックスした日本人ならではの音楽をやってみたいと自然に思うようになっていった。

日本の歌を洋楽調にアレンジした「ロックタ焼け小焼け」とか「五木の子守唄ロック」など、童謡や民謡をロカビリー調に直して演奏したりしたのも、こうした流れがあったからだと思う。

しかし考えてみれば、和洋合体の音楽をやったのは、何も僕らが最初ではない。この「東京ブギウギ」を作曲した服部良一さんは、僕らのはるか以前から外国の音楽の理論

や技法を、日本の歌謡曲に取り入れた第一人者だった。

たとえば、二葉あき子さんが歌った「夜のブラットホーム」はアルゼンチンタンゴを取り入れた名曲だし、淡谷のり子さんの「別れのブルース」はその名の通りジャズのブルースだし、「東京の屋根の下」はシャンソン、「蘇州夜曲」は中国音楽をアレンジしたものだ。

戦後を代表するヒット曲「東京ブギウギ」は、服部さんが戦前、敵性音楽として禁止されていたアメリカポピュラー音楽の独特なリズム、ブギウギ (Boogie-woogie) を融合させて、戦後まもなく、新しい歌謡曲を作り出したものだったのである。

さらに、歌い方もショックだった。

(あれ、なんだよ。日本にもこんな歌手がいたんじゃないか！)

もちろん、大ヒット曲であるこの歌を知らなかったわけではないが、自分が音楽の世に身を投じてからあらためて「東京ブギウギ」や「買物ブギー」の映像を見て驚いた。それまでの日本人は、正しい姿勢で美しい声を響かせて歌っていた。ところが、笠置シズ子さんの歌い方は、喉で歌うのではなく、ブギのリズムに乗って、全身で歌う。僕たち口カビリー歌手よりも前に体で歌った先輩がいたわけである。

あとからわかったことは、笠置シズ子さんに限らず、体で歌った日本人は、決して珍しいということ。ディック・ミネさんは戦前からジャズを歌っていたし、古くはエノケンさんが外国のカバー曲を小さな体を揺らしながら歌っていたことがわかった。この「東京ブギウギ」は、いま、かなり若い人たちがカバー曲として歌われている。その意味でも、現代に見事によみがえった「昭和歌謡」だと言えるだろう。

銀座カンカン娘

昭和
24

佐伯孝夫作詞 服部良一作曲・編曲

高峰秀子歌（ビクター）

ユニークな「ウオッチング・ソング」の登場

先の「東京ブギウギ」と並んで、これまでにない洋楽的な「歌謡曲」のひとつに、この「銀座カンカン娘」が挙げられるだろう。この作曲もまた、ジャズと歌謡曲の融合を目指した服部良一さんだということに興味深い。



昭和24年4月

しかし、僕はそのリズムもさることながら、この歌のヒットの大きな要因に佐伯孝夫さんのユニークな歌詞があげられると思う。

何がこれまでに見られなかった特徴かと言えば、それまでの歌謡曲は、基本的に一人称で、ドラマの主人公の気持ちを通して、多くの人たちの共感と呼ぶ歌が主流だったのだが、それを無視して、いわゆる「ウォッチング・ソング」にしたからだった。

「サンダル」を履いて、「時計を眺めてニヤニヤ」したり、なかなか待ち合わせの相手が来ないので「ソワソワしてみたり」、雨が降ってきても「傘もささずに」裸足で道路を歩いたり……。

あげくには、「銀座は私のジャングルだから」、「男なんか怖くない」なんて豪語したりする、戦後の新しい女性の姿を明るく描いた歌だ。

もちろん、いつの時代にも自由奔放な女性はいた。彼女たちをある時は「モダンガール」を略して「モガ」と呼んだり（モダンボーイは「モボ」と呼んだ）、フランス語の「戦後派」を意味する言葉から、従来の道徳に束縛されない若い人たちを「アプレゲール」と呼んだりした。

その意味では、戦後まもなく登場した、この自由闊達な、そして、あっけらかんとし

た若い女性たちを「銀座カンカン娘」と名づけたにちがいない。

この歌ができた昭和24年は、まだ小学生の児童のシラミ退治のためにDDTを使っていたし、舞鶴港にはじめてソ連からの引揚げ船が着いた。そんな時代の「銀座カンカン娘」、いかに華やかで、明るかったか。同時期のヒット曲、こんな女に誰がしたという菊池章子さんの「星の流れに」と対照的だ。

それにしても、「カンカン」とはどんな意味だろう、と調べてみたら、フレンチ・カンカンともカンカン帽とも関係なく、当時の娼婦の蔑称「パンパン」と間違えられた若い女性が「カンカン」になって怒っているイメージで、映画「銀座カンカン娘」を撮った山本嘉次郎監督がつくった造語だということがわかった。

この歌もまた、いまの若い人が新しいアレンジで作直せば、生まれ変わる名曲だ。そうそう、先日、久しぶりに銀座の歩行者天国を散策したら、三越と和光の間をへソ出しルックで闊歩かつぽしている現代の「銀座カンカン娘」たちをたくさん見つけ、思わず小聲でこの歌を口ずさんでしまった。

時代は、また一回りしたのかもしれない。

悲しき口笛

昭和24

藤浦亮作詞 万城目正作曲 浅井肇編曲

美空ひばり歌（日本コロムビア）

日本で一番歌がうまいのは、誰だ！

ある週刊誌で、それぞれの専門家が集まって、なんでもかんでも「日本一」を決めるというシリーズがはじまり、その第1回が「日本で一番歌がうまいのはこの人だ」という特集だった。

僕も16人いる審査員というか、選者のひとりとして参加したが、いろいろな意見が聞けておもしろかった。もちろん、「歌がうまい歌手」第1位は、断トツで美空ひばりさんだった。

「歌の立ち上がり、音楽用語で『アタック』と呼ぶのですが、その精密さが段ちがい。聴く人の耳にバツと飛び込んてくる」（音楽プロデューサー 佐久間正英）

「お嬢は別格でした。紅白でもリハーサルなし。ぶっつけ本番でも一発で音を合わせる。



昭和24年9月

天才でしたー(元NHKアナウンサー 山川静夫)

「英語の歌でも外国人を納得させるぐらいの発音で歌う。間違いなく昭和最高の歌手ですー(作詞家 来生えつこ)」

僕の番が来たので、僕はこう言った:

「多様な楽曲を、ある時は少女のように、ある時は妖艶に、まさに七変化のように歌いこなす。まるで、名コックのように、どんな素材でも見事に調理してみせるのです。もちろん、声、センス、リズム感に優れ、欠点はひとつも見当たりません」

僕が言うまでもなく、まさに、美空ひばりさんは、「天才」だったと思う。ちなみに、「日本一歌のうまい歌手」第2位は桑田佳祐君、そして第3位が、ちあきなおみさん、以下、中島みゆき、沢田研二、山口百恵、尾崎紀世彦、都はるみ、布施明、久保田利伸、石川さゆり、の順だった。

この順位には疑問を持つ人がいるかもしれないが、美空ひばりさんの1位には、誰も異存はないにちがいない。ちなみに、僕が挙げた「うまい歌手」は、順位は別にして、美空ひばり、江利チエミ、ちあきなおみ、越路吹雪、山口百恵、五木ひろし、吉幾三さん、まだまださしの皆さんである。

曲調が長くなったが、誰もが「日本で一番歌がうまい歌手」の筆頭に挙げるこの美空さんの最初のヒット曲が、この「悲しき口笛」であった。

天才を誕生させた「名曲」

この「悲しき口笛」は、ひばりさんがまだ小学校の6年生の時に歌った曲である。

この歌は映画「悲しき口笛」の主題歌で、映画のラストシーン近く、ひばりさんがキヤバレーで山高帽に燕尾服姿で歌ったことで大ヒット曲になった。

しかし、「丘のホテルの…」ではじまる歌詞をよく見てみると、これは完全に大人の歌である。それをいとも簡単に歌いこなしたのだから、当時、「子供らしくない」と物議をかもしたというのも当然かもしれない。「子供らしくない」ということは、小学生のひばりさんが、この歌の意味を完全に理解して歌っていたということである。

街の灯りも消え、小雨の降りしきる港でのわけありの男と女の別れ、そこに節も悲しい口笛が響く…。

こんな状況を小学生が理解して歌ったのだから、いまで言えば、あまりにもうますぎて、「かわいくない」というわけだ。

もうご存知かもしれないが、若い人たちのために、ひばりさんの生い立ちを書いておくと、ひばりさんは僕と同じ昭和12年生まれ。横浜で魚屋を営む両親が歌が好きで、家にはつねにレコードがかかっていた、ひばりさんも子供の頃から口ずさむようになっていたそうだ。

戦後、ひばりさんの歌の才能を見抜いた母親は、青空楽団を結成し、銭湯や公民館でまだ子供だったひばりさんに歌わせた。それが、川田義雄（のちの晴久）さんに認められ、12歳のとき、川田さんといっしょに映画に出たのがこの「悲しき口笛」であり、その映画の主題歌として、当時のコロムビアレコードの名コンビ、藤浦洸さん、万城目正さんの手によって作られたのが、この曲だったというわけである。

ちなみに、川田晴久さんは、昭和期を代表するコメディアンで、自らギターを弾いて、楽しい歌を披露した。なかでも、僕には「地球の上にく朝が来る」という歌声はまさに耳に残っている。

資料によれば、この「悲しき口笛」は、当時の最高記録である45万枚の大ヒットになったそうだ。天才歌手、美空ひばりさんを誕生させた曲として、「昭和歌謡」の代表曲のひとつとして、ここに挙げておかなければならないだろう。

テネシー・ワルツ

昭和
27

和田寿三訳詞 ビー・ウィー・キング作曲 村山芳男編曲

江利チエミ歌（キング）

ひばりさんが脱帽したリズム感

戦後、いろいろなポピュラー音楽が日本に入ってきたけれど、そのほとんどがカントリー・ソングであつたり、ジャズ系の歌だつたり、時々、シャンソンのようなメロディがあつたりしたが、僕の知っているかぎりでは、ワルツらしいワルツは、この「テネシー・ワルツ」が最初だつたような気がする。歌つたのは、江利チエミさん。

先の「悲しき口笛」の項で「日本で一番歌がうまい歌手」に選ばれた美空ひばりさんが「歌のうまさ」を絶賛したのが、実は、この江利チエミさんだということを知っている人は少ないかもしれない。その時のひばりさんは、こう語っている。

「チエミちゃんのあのリズムの乗り方、私がひっくり返ってもあそこまではできない。」



昭和27年1月

ああいう風に私も歌いたいのよ、あれを覚えたいのよ。チエミちゃんも私の目標なの」
何でも歌えて、二度と出てこない天までといわれていた美空ひばりさんがそう言うの
だから、江利チエミさんがいかに歌が上手だったかわかるというものだ。

江利チエミさんは、昭和12年の1月生まれ。お父さんがバンドマンだったが、一家の
生活は進駐軍のキャンプで歌う彼女の歌声にかかっていたそうだから、チエミさんは子
供の頃から、かなり苦労されたようだ。

この「サネシー・ワルツ」は昭和25年に、パティ・ペイジが歌った盤が輸入され、日
本では、昭和27年に当時15歳だった江利チエミさんが歌ってヒットした曲。

本来の歌詞は、「恋人とサネシー・ワルツを踊っていたら、昔の友だちが来たので紹
介したら、彼女をその友だちに取られてしまった」という歌なのだが、チエミさんは女
性の立場から「彼を女友だちに奪われた」歌詞になっている。

チエミさんの「サネシー・ワルツ」には、日本語の歌詞も多くあるのだが、ほとんど
覚えていない。それだけ、メロディラインが素晴らしいのかもしれない。

ちなみに「江利」という名前は、チエミさんが進駐軍のキャンプで歌っていた時代、
彼女たちにもつけられたニックネーム「エリー」から来ている。

第二章

昭和30年代

— 1955～1964 —

ここに幸あり

昭和31

高橋掬太郎作詞 飯田三郎作曲・編曲

大津美子歌 (キング)

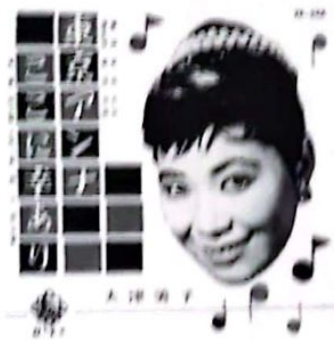
戦後、最初に外国でもヒットした名曲

「ここに幸あり」——。僕は、この歌は「昭和歌謡」を飛び越えて、日本を代表する「スタンダード」だと思う。言い換えれば、日本の歌を代表する正統派の名曲だ。

どうして、この歌が「スタンダード」かと言うと、歌詞の真面目さ、日本語の美しさもさることながら、曲のスケールの大きさが世界的感覚なのだ。

世界的にヒットした日本の歌と言えば、「上を向いて歩こう」をあげる人が多い。もちろん、名曲と言えは言えるのだが、あれは僕にしてみれば、「スキヤキ」というタイトルが、外国人にインパクトを与えた面もある。

事実、「スキヤキ」は、それぞれの国でカバーされ、それぞれの歌詞で歌われている。



昭和31年3月

だが、この「ここに幸あり」は、タイトルもそのまま、発売まもなく、ハワイやフイリピンで大ヒットし、しかも、「スキヤキ」との大きなちがいは、いまでも外国の地、特にアジアで日本の代表的な「スタンダード」として、その歌詞ごと残っていることがある。

これは、「スキヤキ」に比べてはるかに素晴らしい。「スキヤキ」よりも以前に、こうした日本の名曲が海を越えていたという歴史があったことを知っておいてほしい。

音楽的に言えば、この歌はあくまでメジャーであって、決してマイナーではない。メジャーでありながら、メロディラインや歌詞の一部に、悲しみが宿っている。そうした悲しみを感じさせながらも、前向きなひたむきさを感じるのが、この曲が「スタンダード」と言われる所以^{ゆえん}かもしれない。

その意味でも、大津美子さんのスケールの大きい、正統的な歌唱が多くの人の心を打ったのにちがいない。

大津美子さんは、昭和13年の1月生まれ。15歳でキングレコード専属の渡久地政信さんに師事し、毎週土曜日に愛知県豊橋から夜行で上京し、昼にレッスンを受けて帰るという生活を送って、17歳でデビューしてまもなく渡久地さんがビクターに移籍。落胆し

ていた時に、飯田三郎さんを紹介され、このヒットにつながったというから、チャンスはどこに転がっているかわからない。

飯田三郎さんは、昭和22年に同じ高橋掬太郎さんとのコンビで、岡晴夫の大ヒット曲「啼くな小鳩よ」を作曲している。

でも、こうしてみると、この「ここに幸あり」は大津美子さんが18歳の時の歌だったというのだから、その歌唱力にいまさらながら驚く。

ちなみに、この歌がヒットした昭和31年に、石原裕次郎さんが日活「太陽の季節」でデビューしている。ようやく「嵐も吹き、風も吹いた」日本が敗戦から自力で立ち上がり、若者を中心に、「太陽」の下で、戦後の新しい日本文化が花開きはじめた時代がやってきたのである。

有楽町で逢いましょう

昭和32

佐伯孝夫作詞 吉田正作曲 佐野勲編曲

フランク永井歌 (ビクター)

きつかけは、関西の百貨店「そごう」の東京進出

東京を代表する繁華街、銀座は「昭和歌謡」には欠かせない町だ。

古くは、佐藤千夜子さんが歌った「東京行進曲」、藤山一郎さんの「東京ラブソディ」、灰田勝彦さんの「東京の屋根の下」、それに

先的高峰秀子さんの「銀座カンカン娘」、そして、昭和30年代に入ってから、石原裕次郎さんと牧村旬子さんの「銀座の恋の物語」、神戸一郎さんの「銀座九丁目水の上」、山内賢さん・和泉雅子さんの「二人の銀座」とか、ロス・プリモスの「たそがれの銀座」など、歌詞のなかに一部登場するものまで入れれば、かなり銀座の町は、歌になっている。

ところが、銀座近くの有楽町は、この歌が登場する前は、ほとんど歌にされていなか



昭和32年7月

った。いや、有楽町がさびれていたわけではない。僕たちロカビリーのメッカだった日劇も、有楽町駅から歩いてすぐだったし、大手新聞社も近くにあったし、帝国劇場や宝塚劇場などの劇場街、映画街、さらには、若いカップルたちが集まるデートコースの日比谷公園にも皇居前広場にも近かった。

それなのに、なぜか、有楽町は当時の流行歌の歌詞になりにくかったのである。

そんな時、関西に地盤を持つところ百貨店が、神武景気、岩戸景気などという折からの好景気に乗って、東京は、有楽町に進出してくることになった。東京駅前で成功した大丸百貨店の影響もあるかもしれない。

そこは、有楽町に土地を取得し、いよいよ東京進出という時に、前宣伝に力を入れた。その時のところ百貨店のキャッチフレーズが「あなたと私の合言葉。有楽町で逢いましよう」だった。これは、出張先の東京で、若いカップルが駅で別れる時、「また、有楽町で逢いましょう」と言ったのを宣伝関係者が耳にし、それをアレンジして、コピーにしたそうだが。

このところのコピーに敏感に反応したのが、作詞家の佐伯孝夫さんだった。そして、ビクターの岡田重一プロデューサーをそこへ行かせ、宣伝部長と打ち合わせをし、佐

伯孝夫作詞、吉田正作曲で生まれたのが「有楽町で逢いましょう」だ。

ここまでは、すんなりだったが、実は、この曲を歌う歌手でそごう側とビクターでもめたらしい。そごう側は、それまで「東京の人」や「踊子」で正統派の流行歌を歌っていた三浦洸一さんを推したが、ビクターは吉田さん推薦のフランク永井さんを前面に押し出し、結局、歌を聞いてみてから、ということになって、ようやくフランクさんで行くことになったそうだ。

ちなみに、1番の歌詞は、最初は雨の日の話ではなかったようで、何回かの打ち合わせの後に「しっとり」行こうということで、「あなたを待てば雨が降る。濡れて来ぬかと気にかかる」と佐伯さんが詞を書き直したという話を聞いたことがある。逆に考えれば、それだけ、そごうも東京進出には一生懸命だったのだろう。

イントロから口ずさめる曲は、ヒットする

この曲の大ヒットした大きな理由のひとつに、フランク永井さんの甘い低音の歌声が挙げられるが、僕に言わせれば、もちろん、それだけではない。

僕は、この曲のイントロに注目したい。この歌を聞いたことのない人は、ぜひ聴いて

ほしい。当時としては、都会派の雰囲気を持った歌であり、特にイントロは最高におしゃれである。

もし、この歌をカラオケで歌う人がいたら、このイントロが流れている間に、自分が渋谷でも新宿でも、銀座でもなく、心は、有楽町にすでにいなければいけない。しかも、ただ有楽町にいただけでなく、小雨が降っている有楽町の駅の近くのおしゃれな「ティールーム」で、恋人を待っている。その気持ちになってほしいのだ。すなわち、この歌の舞台に、ぜひ、自らが入り込んで歌ってほしいということだ。

その気持ちで、イントロを聞く余裕があれば、必ずや「あなたを待てば……」と素直に歌い出せるだろう。歌は、まさに「歌い出し」で七割が決まるのだから。

待ち合わせをしたティールームのガラス越しに東京の雨が見える。気のせいかな、少し強くなったようだ。まだ、約束の時間には15分もある。有楽町の駅から来るのだろうか。駅からちよつと距離もある。雨に濡れなければいいが…。

そんな状況を浮かべながら、イントロを聞いていけば、必ずいい歌い出しができる。歌い出しがスムーズならば、もう大丈夫だ。

この歌を書いたフランク永井さんは、昭和7年宮城県生まれ。はじめ、兄を頼って上

京し、芝罘にあった米軍の施設に就職。アメリカ本土から来た食料をトレーラーで基地に輸送する仕事をしていたが、翌年、車を横転させ、大損害を与えたのを機に、食べるために朝霞の下士官倶楽部でジャズを歌いはじめたのが、この世界に入るきっかけとなった。

吉田正さんに認められた彼は、このあと、佐伯さんと吉田さん、それにフランクさんのトリオで、「東京午前三時」、「西銀座駅前」、そして「東京ナイトクラブ」と都会派流行歌のヒットを次々と飛ばしたのである。

嵐を呼ぶ男

昭和
32

井上梅次作詞

大森盛太郎作曲

河辺公一編曲

石原裕次郎歌 (テイチク)

なつかしきジャズ喫茶「銀座テネシー」

大津美子さんの「ここに幸あり」がラジオから流れていた頃、僕は、まだ10代の青二才ながら、新しくできた「平尾昌章とオールス



昭和32年12月

ターズ・ワゴン」のヘッドになった。

目標は、当時、大人気だったエルビス・プレスリー。ビートのある歌唱、ステージでのセクシーな動き、アメリカや日本だけでなく、世界中のティーンエイジャーがプレスリーに熱狂した。まさに、ミスター・ロックンロールだった。

それに伴い、和製プレスリーを目指す若者たちのひとつ、「平尾昌章とオールスターワゴン」も売れてきた。全身を揺すり、プレスリーの「ハート・ブレイク・ホテル」、「監獄ロック」などを演奏すると、若い女性たちの嬌声で歌が聞こえないほどだった。

一方、同じ頃、わが国の流行歌は、どんなものがはやっていったのか。

僕の覚えている歌を挙げると、曽根史郎さんの「若いお巡りさん」、三橋美智也さんの「リンゴ村から」、美空ひばりさんの「波止場だよおとつつあん」、三波春夫さんの「チヤンチキおけさ」、そうそう、島倉千代子さんの「東京だよお母さん」なんていうヒット曲もあった。

これらの曲を知らない人でも、そのタイトルを見ただけでも、僕たちの目指したアメリカン・ロックとの落差が激しかったことはわかるだろう。その意味では、いまのEXILEやAKB48の歌が理解できない世代がいるように、戦後、最初の「年齢」による

歌の好みがはっきりした時代だったかもしれない。

若い調査が広場のカッパルに「もしもし、ベンチでささやくお二人さん」、早くお帰りと声をかける「若いお巡りさん」という当時のヒット曲をいま聞くと、なんとこのどかな時代だったのだろうと、ふと思う。

そんな歌が流行した一方で、プレスリーを目標とする僕のバンド、「平尾昌章とオールスターズ・ワゴン」が、銀座のジャズ喫茶テネシーに出演が決まった。

ジャズ喫茶と言えば、なつかしいと思う人がいる反面、意外にわからない人が多いかもしれない。いまのライブハウスのちよつと華やかなイメージを思い浮かべてくればいいかもしれない。戦後、ウエスタンやロックンロールなどが流行しはじめると、東京など大都会に、次々とジャズ喫茶が生まれ、若いファンでいっぱいになった。

その一方で、学校など教育の世界では、ジャズ喫茶は未成年者だけで入ってはいけないうなどという規則ができたりしたのも、いま思えばなつかしい。

ともあれ、そうしたジャズ喫茶のなかで、銀座のテネシーは別格だった。そこからまだ20歳そこそこの僕のバンド（僕だけが未成年だった）に出演依頼がきたのだ。それまでテネシーを本拠地にして歌っていた小坂一也さんが大売れに売れて、ジャズ喫茶にあ

まり出演しなくなったために、後任に僕たちのバンドが選ばれたというわけだ。

テネシーはバンドマンの憧れの的、限られた一流バンドしか出演できない。当時、銀座のテネシーに出演していたのは、渡辺晋とシックス・ジョーズ、バックキー白片とアロハハワイアンズなど一流ばかり。その仲間入りができたのだから、僕は飛び上がって喜び、メンバーと握手をしまくったことを覚えている。

あの頃、僕たちは「耳」がよかった！

ジャズ喫茶で歌って、演奏をしていた僕らが、いまでも自慢できることは、「耳」がものすごくよかったことだった。

譜面も読めず、もちろん書けもしないのに、ヘッドアレンジで、「ここはこうしよう」などとアルバムのほとんどをアレンジしたり、補作したりしていた。特に、童謡や民謡をロックンロールにアレンジするのも、全部、自分たちでやったのだから、すごい。

「ロック会津磐梯山」とか、「ロック夕焼け小焼け」とか、まさに耳だけでアレンジして、演奏した。

もちろん、「耳」でコードを探し、演奏するだけでなく、カバー曲のメロディライン

も一度聞いただけで、それぞれのパートを覚え、みんながいきなり演奏できたものだった。ステイール・ギターなど、誰に教わることもなく、ハワイアンの海の音を勝手に作り出していたほどだ。

そんな才能の持ち主が集まったバンドだったから、銀座のテネシーという晴舞台でも「平尾昌章とオールスターズ・ワゴン」は、すごい人気バンドになった。

昭和32年のクリスマス・イブのことは忘れられない。イブの夜を僕らのバンド演奏で楽しもうと、店の前には長蛇の列。その夜の入場者数は2千人から3千人。押すな押すなで、正面の10メートルはあろうというウインドウが割れる騒ぎになったほどだった。

当時の若者たちは、何かに熱狂したかった。ありあまるエネルギーを何かにぶつけたかった。銀座のテネシーも、ACBも若者たちで溢れかえった。当時、一杯60円だったコーヒーが百円で飲め、僕たちの歌が聞けるのだから、ジャズ喫茶に人が集まるのも当然のことだった。

なぜ、僕が石原裕次郎さんの大ヒット曲「嵐を呼ぶ男」の話の前に、こんな話をするか――。それは、追って説明する。

この僕が、石原裕次郎さんの映画『嵐を呼ぶ男』に出演

そのクリスマス・イブ騒ぎの少し前、テネシーでの僕のステージを見るために、実質的に渡辺プロを仕切っていた渡邊美佐さんと女優の月丘夢路さんが現れた。そして、同行している男性が日活の井上梅次監督だということは、あとから知った。

そして、ステージでの僕の歌が終わると、監督はこう切り出した。

「いま、裕次郎の正月映画で『嵐を呼ぶ男』っていうシャシンを撮っている。ドラマーの役で、ジャズ喫茶も出て来るんだが、そのステージに出る歌手を探しているんだ。どうだろう、平尾さん、あなた、出てくれませんか」

当時の映画関係者は、映画のことを「シャシン」と言った。実は、彼らはテネシーに来るまでに、池袋、新宿、渋谷、銀座とジャズ喫茶をまわり、ミッキー・カーチスや山下敬二郎、敬ちゃんのステージも見てきて、最終的に僕に白羽の矢が立つたらしい。僕が選ばれたのは、どうもステージで『消防自動車』と言われたほど、当時としては珍しい真の赤なジャケットを着ていたかららしい。

もちろん、僕のほうに異存があるわけではない。

石原裕次郎さんは、言うまでもなく「太陽の季節」で脇役でデビューしたが、次回作「狂った果実」から主役。それまでの二枚目のイメージを変えてしまふ、明るさと不良っぽさで、人気はうなぎのぼりの頃だった。もちろん、僕も裕次郎さんの映画を見ていた。「狂った果実」で、最後に津川雅彦さんにヨットを沈められるシーンなどいまでもよく覚えていくくらいだ。

それだけではない。僕にとっては慶応高校の先輩であり、家も同じ湘南だったから親しみも感じていた。その裕次郎さんの正月映画だ。胸が高鳴るのも当然だろう。

そして、調布の撮影所に行き、裕次郎さん、北原三枝さんに会った。ふたりともエラぶったところもなく、礼儀正しく接してくださったのには驚いた。

撮影がはじまった。

セットがテネシーそっくりに作られていたのには驚いた。ただ、残念なことに、僕が歌う曲、たとえば「監獄ロック」とか、「ハート・ブレイク・ホテル」とかは、著作権が高くて歌えないので、急遽作られた「銀座でロック」という歌を歌わされたのには驚いたが……。いま思えば、大橋巨泉さんが作詞、映画の音楽を担当し、「嵐を呼ぶ男」を作曲した大森盛太郎さんが作曲した歌だった。

もちろん、僕も一生懸命、歌手役をつとめた。歌手が歌手を演じるのだから、むずかしいことはないと思うだろうが、とにかく裕次郎さんたちの邪魔にならないようにと、かなり緊張した覚えがある。これが僕のデビュー映画になった。

映画「嵐を呼ぶ男」は、昭和32年暮れに公開。

浅草日活一館だけで、6日間に3万8千人がこの映画を見たというのだから、いかにすごかったか。それと同時に、その主題歌であるこの「嵐を呼ぶ男」は2週間で8万5千枚を売り上げる大記録。1万枚売ればヒットという時代の数字だから、いかにすごかったかわかるというものだ。

それにしても、映画の中でドラム合戦の前夜、悪い一味に襲われて指を骨折させられた裕次郎さん扮する国分正一が、当日のステージで、包帯を巻いた手でマイクを掴み、荒々しく「おいらはドラマー」と歌い出すシーンは映画史上に残る名場面だ。

かつて、この映画を見た人がいたら、ご自分の若き日を重ね合わせて、裕次郎さんになりきって、ぜひ、口ずさんでほしい一曲である。

ダイアナ

昭和33

ポール・アンカ作詞・作曲 渡舟人訳詞 ドン・コスタ編曲

山下敬二郎歌 (東芝音工)

誰もが命がけの「日劇ウエスタン・カーニバル」

昭和33年は、僕にとって忘れられないイベントが開催された年である。

フランクさんの「有楽町で逢いましょう」で一躍、全国区になっ

た有楽町の日劇で、第1回の「ウエスタン・カーニバル」が行われたのだ。プロデューサーは、渡辺プロ副社長の渡邊美佐さん。美佐さんは、マナセプロ社長の長女で、人気バンド、シックス・ジョーズのリーダー、渡邊晋さんと3年前に結婚。のちに一大勢力となる「渡辺プロ」を作ったばかりだった。

だから、当時の美佐さんは、プロダクションの副社長という肩書はあったが、まだタレントも多くなく、わずかにクレージー・キャッツがようやく売れはじめた頃だった。



昭和33年4月

そこで、美佐さんは、ジャズ喫茶を回り、そこで歌っているバンドや歌手たちを大集結させる企画を考え、浅草の国際劇場などに持っていったが、どこも「そんなもの、人が入るわけがない」と断られた。

たしかに、銀座や新宿、池袋のジャズ喫茶で人気があつて超満員でも、大劇場をいっばいにはできないだろうというのが、おおかたの読みだった。

だが、美佐さんは諦めない。当時、人気ナンバーワンだった「スイング・ウエスト」の堀威夫さん（現・ホリプロファウンダー最高顧問）や、熱狂的ロカビリーファンだった曲名瀬信子さん（美佐さんの妹）も味方につけ、命がけで、劇場と交渉した。

こうした努力が実を結び、半信半疑ながら、日劇がこの話に乗った。日劇のプロデューサーであり、演出家の山本紫朗さんは美佐さんに案内されて、各ジャズ喫茶を回ったそうだった。

そして、昭和33年2月9日から13日まで5日間の公演が決まったのだ。

いま、思えば、渡辺美佐さんの作った「渡辺プロ」がすでに大きく発展していれば、「日劇ウエスタン・カーニバル」は行われなかった。そして、それに伴い、僕たちも全国区にならなかつたかもしれない。その意味では、美佐さんの命がけの交渉があつたからこそ

そ、ロカビリーというひとつの文化が生まれたのだ。

おもしろいことに、そのリハーサルの日、僕は、山下敬二郎、ミッキー・カーチス、のちの「ロカビリー三人男」と呼ばれる3人が顔を合わせた。実は、3人が会ったのは、この日がはじめてだったのである。

新宿のスター、山下敬ちゃん

「日劇ウエスタン・カーニバル」のリハーサルではじめて会った山下敬二郎さん、敬ちゃんには僕より1歳半年下。

僕が銀座のジャズ喫茶のスターなら、敬ちゃんは新宿のジャズ喫茶のチャンピオンだ。一時期、大変な人気だった落語家であり、コメディアンだった柳家金語楼さんの息子。子供の頃から落語が好きだった僕は、大スターの息子ということで、年下だけど、敬ちゃんに対して一目置いていた。

だが、それも仲よくなるにつれて、そうした重石おもしもとれて、単なる神楽坂の不良少年としてつきあうようになった。

性格は、いたって素直でやさしい。しかし、いったん歌い出すと、小さな体から溢れ

るファイトが素晴らしかった。一本のマイクで、劇場の隅々にまで響き渡る素晴らしいパワーを持っていた。

と、ここまでは、いい。

さて、「ダイアナ」である。

この曲に関しては、僕と敬ちゃんとの間に、いわく因縁がある。

僕は、この曲が出る前に2曲、レコードを出している。デビュー曲はダイヤモンドの「リトル・ダーリン」、2曲目はエルビス・プレスリーの「監獄ロック」だ。そして、第3曲目は、当時、すでに日本で大ヒットしていたポール・アンカの「ダイアナ」だった。この曲の翻訳盤を出そうということになり、発売日まで昭和33年5月と決まっていた。

間違いなく大ヒットする、と誰もが思った。

ところが、思わぬ横やりが入った。

新しくできた東芝音工というレコード会社の第1号歌手、山下敬二郎が「ダイアナ」を僕の発売の1カ月前に臨時発売したのだ。まさに、寝首をかかれた。しかも、敬ちゃんも僕が断ったマナセブロに入った。

直ぐに、マナセの作戦は見事に当たった。そりゃそーだろう。ファンは「ダイアナ」の

邦訳盤が喉から手が出るほど望んでいたのだから。

もちろん、僕の「ダイアナ」も巻き返しを図ったが、ひと月の遅れは取り戻すことができず、敬ちゃんの圧倒的な勝利に終わったのは、昭和歌謡史がこうして証明している。新宿の敬ちゃんが全国区になったのも、この「ダイアナ」のおかげである。

ポール・アンカは天才だった

こうして、僕は親友でもあり、ライバルでもあった山下敬ちゃんの「ダイアナ」を図らずも、先に聴く羽目に陥った。

それにしても、驚いた。敬ちゃんの「ダイアナ」は、何と言う訳詞だ。訳詞と言うより、かなり意識に近い。

とにかく、ポール・アンカの歌詞とはちがい、英語みたいな日本語の歌詞を、ポール・アンカの歯切れのいいメロディに乗せたのだから、それはファンの女心に火をつけたのも当然だ。

「あなたを待てば、雨が降る。濡れて来ぬかと気にかかる」という先の「有楽町で逢いましよう」とのちがいはいったい何だったのだろうかというと思う。ちなみに、音羽たかし

さんが訳詞してくれた僕の「ダイアナ」はもう少し、おっとりした歌詞だ。

ポール・アンカは「1941年カナダのオタワ生まれ。1957年にこのダイアナを作詞作曲し、自ら歌ってビルボードの第1位になった」と何気なく資料に書かれているけれど、よくよく見れば、なんと16歳の時の作品ではないか。

「ダイアナ」とは、自分の弟のベビーシッターへの思いを歌にしたといわれているが、16歳であの曲を作詞作曲し、さらに歌ったのだから、天才としか思えない。

しかも、天才の気まぐれではない証拠に、翌1958年には名曲「You Are My Destiny (君こそわが運命)」を発表。さらには、20歳で「電話でキッス」、21歳でミッチ・ミラー楽団の演奏でヒットした「史上最大の作戦」のマーチも作曲している。特に、引退するフランク・シナトラのために「マイウェイ」を作詞して、プレゼントしている。この時、ポール・アンカはまだ31歳だったのだから、いかに彼が天才だったかわかるだろう。

そのポールが来日した際、僕の「ダイアナ」を聞いてくれた。

気さくな彼と楽屋で歓談するうち、「君は、ジャパニーズ・ポールだ。よし、いっしょに曲を作ろう」となったのが、「アイ・ラブ・ユー」という曲だった。「好きなんだ」

というタイトルでキングレコードから発売されたが、国内では小ヒット。だが、ハワイでは思わぬヒットとなり、多くの人に愛された思い出がある。
 いまでも、「ダイアナ」はカラオケでも歌われる。僕の「ダイアナ」ではなく、敬ちゃんのダイアナが。

ただ、あの時のことはいい思い出である。

星はなんでも知っている

昭和
33

水島哲作詞 津々美洋作曲・編曲

平尾昌章歌（キング）

僕のはじめてのオリジナル曲、誕生！

昭和33年、あの長嶋茂雄さんが僕が大好きな巨人軍に入団。新人なのに、ガンガン打って、大活躍をしていたその一方で、僕は「ダイアナ」で敬ちゃんの後塵を拝したショックは、かなり続いていた。

敬ちゃんの歌声が耳について離れない。訳詞争いも負けたから、敬ちゃんの「ダイア



昭和33年7月

ナ」が、まるでオリジナルのようになってしまっていた。

これは、さすがに僕も悔しかった。

そんなある時、僕は「ロカビリー旋風の立役者」というテーマで、読売新聞のインタビューを受けることになった。記者は安倍亮一さんという音楽記者だが、その文章のうまさには芸能界で有名だった。しかも、業界では強面こわもてで、機嫌を損ねるとひどい記事を書かれるという噂があった。

だが、安倍さんは噂とはちがいで、紳士で、記事もとりとめもない僕の話を実にうまくまとめてくれた。やがて、親しくなり、安倍さんの酒の席に誘われるようになったが、僕は酒を受け付けないので、カンパリソーダでお付き合いをした。

そうした席で、僕は例の「ダイアナ」の話をした。自分のレコードが発売されるひと月前に突然、敬ちゃんにレコードを出され、悔しい思いをしたことを僕は正直に安倍さんに話した。

すると、安倍さんは「これからは、カバー曲を歌っている時代じゃないよ。オリジナルの時代だよ。よし、僕が君の歌を書いてあげよう」と言い出したのだ。安倍さんは、

「よし、カバー曲を歌っている時代じゃないよ。オリジナルの時代だよ。よし、僕が君の歌を書いてあげよう」と言い出したのだ。安倍さんは、

作曲は、僕のバンドのギター奏者、津々美洋さんをお願いして、僕は早速、レコード会社の人たちと曲作りに入った。まず、最初に決まったのは、「セリフ入り」にすること。これは、僕のデビュー曲「リトル・ダーリン」以来、セリフを入れているので、このオリジナル曲にも入れようということになったのだ。

「こんなのどうだい」と、水島さんがセリフ入りで書いてくれたのが「星はなんでも知っている」だった。

タイトルも気に入ったし、歌詞もいい。セリフはちよつと恥ずかしかったけれど、当時、「キッス」という刺激的な言葉を歌詞やセリフに取り入れた画期的なものだった。さすが、水島さんだ。あとは、この歌詞にどう曲をつけるかだった。

僕はもともとカントリーが好きだったから、カントリーロックみたいなリズムの曲ができないかと意見を述べた。そのなかでも、特に、インディアン風の歌のリズムに、この「星はなんでも知っている」の歌詞を乗せられないかと言った。

ウエスタンに詳しい人がいればよくわかりだが、ハンク・ウィリアムスのヒット曲に「カウライジャ（木彫りのインディアン人形）」という名曲がある。土産物屋の店先に売られていたかわいい人形に恋をした男の話だが、これが哀調にあふれたウエスタ

ン・ソングになっている。

「星はなんでも知っている」も、そんな雰囲気 ウェスタンになればいいと思っていた。要するに、ダカダカダン、ダカダカダンという、何となくインディアン の太鼓のリズムに似たテンポが、僕としてはほしかったのだ。

すると、津々美さんが「こんな感じ？」と、ギターでトウクトウクトウン、トウクトウクトウンというリズムを取りはじめた。「うん、それだ」ということになつて、それからすぐにメロディラインが生まれて、あの「星はなんでも知っている」が誕生したのだ。

この歌で、僕は「歌手」として生き残れた

「星はなんでも知っている」は、あつと言う間に50万枚を超える大ヒットを記録した。

僕の思った通り、カントリーのなかでも、インディアン の音楽に近いリズムが受けたのだ。いつの時代もそうだが、人はいままでに聴いたことのないような旋律に出会ふと、フレンドリーで身近に聴こえるという。特に、当時の音楽は、ラジオが大きな役割を占めていたから、多くの人の耳を刺激しなければとットしなかつたのだ。

大事なことは、当時の音楽を聴く人は、耳に入ってくる言葉やリズムだけで評価する。言い方を換えれば、歌い手の顔がいいか悪いかとか、背が高いか低いかなど関係ない。

声が好きか、嫌いか、歌が上手か下手かという歌手の最低限の条件もあるが、一番は、その曲と詞がいいか、悪いかであった。

その意味でも、「星はなんでも知っている」は、刺激的な歌詞とセリフ、それに、トウクトウクドウンダウン、トウクトウクドウンダウンというベースのリズムが、聞く人にとって、とても新鮮で効果的だったのである。

実際、多くの仲間たちから「いい歌を手にしたな」と言われた。

それにしても、いま思うと、読売新聞の音楽記者の安倍さんが言った「これからはオリジナルの時代だよ」というひと言は、実を射ていた。

なぜなら、この「星はなんでも知っている」が発売されて数年後、あれだけすごい人気だったロカビリー・ブームもあつと言う間に去っていき、やがて、ビートルズが登場してくると、ロカビリーをやっていた連中は完全に隅に追いやられてしまった。

そうした芸能界の激流のなかで、初期のウエスタン・カーニバルに出演した僕たちの仲間で、その後生き残れたのは、「僕は泣いちっち」の守屋浩君や「黒い花びら」の水

原弘君のようなオリジナル曲を持っていた歌手だけだった。

それまで外国のヒット曲のカバー曲ばかり歌っていた人たちは、いつの間にか時代に流されて、ほとんど表舞台から消えてしまったのである。「リトル・ダーリン」や「監獄ロク」 というレコードをいくら出しても、あくまで外国のカバー曲を歌ったというだけで、忘れられていったのである。

その意味で、僕はこの時に「星はなんでも知っている」というオリジナル曲を持っていたということが、のちの人生を大きく左右したといえよう。この曲のおかげで、カバー曲を歌っていたロカビリー歌手たちが出られない「ロッセ歌のアルバム」などの歌謡番組に出演できたのだから。

黒い花びら

34

永六輔作詞 中村八大作曲・編曲

水原弘歌 (東芝音工)

「なんだ、このタイトルは！」

「星はなんでも知っている」の1年後、この歌が発売された時、僕は驚いた。

「黒い花びら？ そんな花があるのか」。それが僕の第一声だった。

その一方で、「これはやられたかもしれない」と思った。僕が「なんだ、このタイトルは！」と思うのだから、耳から入る言葉やメロディで判断する多くの「昭和歌謡」ファンは、まず、タイトルと歌い出しで度肝を抜かれるだろう。

それに、この曲は、昭和歌謡には珍しい8分の6拍子のロックバラードだ。さらに言えば、水原弘さん独特の声質だ。歌詞がユニークで、メロディが独特で、歌手の声が魅力的だったら、耳で判断する音楽ファンは、この歌をいい歌だと思うにちがいないと思



昭和34年11月

ったのだ。

案の定、この「黒い花びら」は大ヒットし、古賀政男先生が中心になって創設した第1回のレコード大賞を受賞している。

しかし、この歌がどうやって生まれたかを聞くと、がっかりする。なぜなら、かなり、いい加減に作られたからである。

作曲家の中村八大さんは、東宝映画「青春を賭けろ」の音楽を担当することになった。が、気がついた時は、作曲の締め切りの前日。「いけない、すぐに映画の挿入歌を作らなければ」と思ったが、曲はできても、作詞はできない。偶然、出会った永六輔さんに頼んだが、彼も作詞はしたことがないという。

しかし、もはや、彼に頼むしかない。八大さんは彼を自宅に連れて行き、次々と作詞をさせ、できた詞に曲をつけ、なんとか間に合った。それが「黒い花びら」だったという。あの時の永さんが素人だったからこそ、あんな歌詞が生まれたとも言われている。

この曲を歌った水原弘さんは、昭和10年、東京都江東区に生まれ、バーテンをやりながら、独学で歌を学び、文化放送主催の「素人ジャズのど自慢」で優勝。昭和32年、ダニー・飯田とバラダイス・キングダに加入後、自分のバンド「水原弘とブルー・ソックス」

を結成し、僕らといっしょに「日劇ウエスタン・カーニバル」に出演し、花形歌手のひとりになった。

のちにこのバンド「水原弘とブルー・ソックス」のボーカルから、森山加代子ちゃんやジェリー藤尾さんらが出ている。

水原弘さんがこの「黒い花びら」で第1回レコード大賞を受賞したことを聞いた時、「なんだい、それは？」と言ったのは有名な話である。

まさに、僕がこの曲のタイトルを聞いた時、「なんだ、このタイトルは」と叫んだのと同じだった。

黄色いさくらんぼ

昭和
34

星野哲郎作詞 浜口庫之助作曲・編曲

スリー・キャッツ歌 (日本コロムビア)

はじめて世に出た「ハマクラ節」

これは意外に知られていないことだが、水原弘さんの「黒い花び



昭和34年8月

ら」が第1回のレコード大賞を受賞した時、最終候補まで残った曲が3曲あった。

「黒い花びら」とフランク永井さんの「夜霧に消えたチャコ」、そして、スリー・キャッツの「黄色いさくらんぼ」だった。

「夜霧に消えたチャコ」はわかるが、「黄色いさくらんぼ」がなぜ残ったのか、その理由は定かではないが、最終候補にまで残るのだから、話題になったことは確かである。その意味でも、この「黄色いさくらんぼ」は、「昭和歌謡」を代表するユニークな曲かもしれない。

この曲は、松竹映画「体当たりすれすれ娘」の主題歌で、25万枚売り上げた。この歌もまた、翌日までにという急な発注を受け、星野哲郎さんとひと晩で作り上げ、ハマクラさんの弟子だった女性歌手3人で急遽、グループを結成し、スリー・キャッツと命名された3人に歌わせたそうだった。

その3人とは、元クラブ歌手だった小沢桂子さん、元バンドガールの佐伯みち子さん、そしてコロムビア歌謡コンクールで入賞経験のある堀田直江さんだった。それにしても、このスリー・キャッツ、いわゆる歌う女性のグループとしては初めてではなかったかと

思う。その後、この三人娘の形態は、スリー・グレイセス、スリー・パプルスと続き、

はるか先のビジュアル時代のキャンディーズへとつながっていく。

作曲した浜口庫之助さんは、神戸の実業家の家に生まれ、小さい時から音楽に親しみ、一説によれば、5歳ですでに楽譜が読めたという。戦前に上京し、ギタリストとなり、戦後はバンドを組んで進駐軍まわりをしていたが、やがてジャズ歌手として認められ、三年連続で紅白歌合戦に出場している。

しかし、本当に音楽をやるのなら、日本人のための歌を自分で作らなければいけないと強く思い、最初に作ったのがこの「黄色いさくらんぼ」と「僕は泣いちっち」である。その意味では、のちにたくさん歌を作詞作曲したハマクラさんの最初のヒット曲が、この「黄色いさくらんぼ」だと言えるかもしれない。

ハマクラさんは、僕の叔父の平尾貴四男の教えを受けたことがあるらしく、僕と会うたびに「君の叔父さんにたくさん教えてもらったんだ」と恐縮していた。

でも、ハマクラさんは本当にすごい才能の持ち主だったと思う。自分で詞を書き、曲をつけ、楽器も弾き、歌も歌うという、日本最初のシンガーソングライターだったかもしれない。

現在では、多重録音も簡単にできるが、まだそんなにマルチ録音が普及していない時

代から、ハマクラさんは多重録音を駆使していた。自分で演奏した曲の上に、自分で歌って録音し、ハーモニーまで作り、それを歌手に聞かせるということを、このスリー・キャッツの時代からやっていたのだから、何もかも僕はかなわない。まさに、マルチ人間だ。

音楽的にも、独特のハマクラ・リズムを持っていて、あのリズム感は、ハマクラさんしか表現できない。

それにしても、この「黄色いさくらんぼ」のお色気と明るさは、いったいどこから生まれたのだろうか。

ミヨチヤン

昭和35

平尾昌章作詞・作曲・編曲

平尾昌章歌（キング）

まの子の名前の歌を作ったやつだ！

昌章さんは、まの子の母（現・元皇）が民間出身の正田美智子さん



昭和35年4月

と結婚され、巻ではミフチーブームに沸き立った。また、児島明子さんがミス・ユニバースに選ばれるなど、日本女性がクローズアップされた時代でもあった。

その頃、僕は少し焦りを感じていた。なぜなら、「星はなんでも知っている」で、オリジナル曲を持っている歌手として、この世界でからも生き残ることができた僕だったが、芸能界の流れはかなり早く、気づけば、「黒い花びら」の水原弘、「僕は泣いちっち」の守屋浩、「雨に咲く花」の井上ひろし、さらには「悲しき六十歳」、「ステキなタイミング」の坂本九、「月影のナポリ」、「メロンの気持ち」の森山加代子など、「日劇ウエスタン・カーニバル」の後輩たちが、テレビの普及とともに、スター街道を走りはじめていたからであった。

そこで、このまま忘れ去られたくないと思った僕は、どうしても自分で作詞作曲し、歌う曲を作りたいかった。いつまでも「星はなんでも知っている」だけで食えるわけがない。今度は、自分で作詞作曲した歌を持ちたかったのだ。

どんな歌がいいか、僕には以前からある考えがあった。それは、女性の名前をタイトルにする歌だった。なぜなら、外国の曲には、女性の名前をそのままタイトルにした、カッコいい歌が多いからだ。

「ミミちゃん」に秘められた、ほろ苦い初恋

実は、この歌には僕の仄かな思い出が隠されている。

僕は中学2年生の時、初めて恋をした。相手は、A子という陸上競技部の選手。百メートルはつねに1位。すらりとした当時としては足の長いボーイッシュな女の子だった。僕はといえば、これでもスポーツ万能だったし、歌だって毎夏開かれる素人のど自慢では鐘を3つ鳴らす、結構、学校では人気者の少年だった。

だが、結構、硬派な部分もあって、女の子とのつきあいは苦手だったので、まして、好きなA子にはそんな素振りさえ見せなかった。

しかし、そこは青春。つる思いは次第にふくらみ、もう彼女のことと勉強も手につきなくなり、いよいよおかしくなりそうになった僕は、ついにラブレターを書き、彼女に渡すことにしたのだった。

「ちよっと相談があるんだけど…」

「あら、私も…」

意外にも、彼女がデートに応じてくれた。これは、うまくいきそうだと思った。

呼び出したのは、夜の片瀬の海岸。聞こえるのは、寄せては返す波の音だけ。青春映画の一場面のようだ。

「で、平尾君、相談ってなに？」

彼女のつぶらな瞳が僕をのぞきこむ。僕としては、できれば彼女のほうから告白してもらいたかった。男なんだから、本当は堂々と自分から言うべきだが、やはりためらいがあった。

「君のほうから言えよ」

彼女は、下を向いて「うん」とうなずき、意を決したように、まっすぐ僕の目を見て言った。

「実は、私、好きな人がいるの」

やったー！僕はドキドキしながら、次の言葉を待った。

「相手はね、K君なの。ねえ、平尾君、彼に私の切ない気持ち、伝えて！」

ガクッ。それはないぜ、と思った。Kはクラスの秀才。思わず、「そんなこと、自分で言えよ」と思ったが、真面目な僕は、後日、その約束を守った。その後、どうなったか知らない。

「あー、ありがとう。すつきりしたわ。で、平尾君の相談ってなに？」

「いや、進学のこととかさ、まあ、いや、それはまた…」

そんなことがあっても、その後も学校の廊下でA子の顔を見ると、胸がキュンとなった。純情だった。

「僕のかわいいミヨチャンは、色が白くてちいちゃくて…」の部分には、そうした彼女との思い出が込められている。

もともと、A子は、中肉中背、いまなら160センチはあったと思う。

「ミヨチャン」の歌の芯は、「いまに見ている」にあり

そうした恥ずかしい過去を思い出しながら、「ミヨチャン」の歌詞を考えたのだが、この歌で訴えたかったのは、「いまに見ている、僕だって」という歌詞の部分だった。

もちろん、この曲を作った当時は、モテまくりの人生を送っていた僕だが、やはり、このフレーズを使って、多くの人に、「何があっても負けるなよ」、「いまにみている」の気持ちを持ってがんばって、というメッセージを送ったつもりだった。

「これからの人生、いろんなことがあるかもしれないけれど、いつも前向きな気持ちを

持っていると、きつといいことがあるよ。失恋したって、必ず、次にもっといい人が現れるんだから」

僕にしてみれば、はじめての作詞作曲を通して、そんなことを伝えたかったのだが、「先生、うちの奥さん、ミヨコって言うんですよ。それに、昔から色が白くて小さくてね、前髪垂らしていたんですよ」などと言われ、そのたびに「すみません、モデルはあなたの奥さんじゃないですから」などと言ったものである。

話が長くなった。最後に、この歌の音楽的特徴を述べておこう。

僕は、この歌を、みんなで歌える「単純なメロディ」にしたかった。そのためには、まず、音域を狭く、できれば1オクターブ内で歌えるように考えたし、サビもあえて作らなかった。リズムをエイト・ビートにしたのも、誰でも簡単に口ずさめる歌にしたかったからである。

もちろん、最初に1番の歌詞ができた。それをギターに乗せてみた。マイナーから入って、「ぼーくのかわいいミヨチャンは……」、「あつ、できた。これでいい」という感じで、「いちが白くて、ちいちゃくて……」って、ボロンボロン、コードを弾きながら、メロディを完成させていく。そして、最後の「ミヨチャン、それまでさようなら」はメジャ

ーにしたりして、いま思えば、作曲法も学んでいない僕の特徴のやり方だった。

正式な作曲法では、そんないいかげんなやり方は認められない。でも、自分の歌を自分で作るのだから、まず自分が納得しなければどうしようもない。

「よし、これならいける！」

「ミヨチャン」ができた時、そう確信した。

僕の狙いは、成功した。「ミヨチャン」は思いのほか、ヒットしたのである。

「星はなんでも知っている」、「ミヨチャン」と立て続けにオリジナルのヒット曲を持てたことで、「よし、これで生きていけるぞ」という自信が、次の人生の、作曲という道に僕を導いてくれたのだった。

「ミヨチャン」で作曲の楽しさを知った僕は、それから、暇さえあれば、ギターを鳴らしながら、「ラーラララ、ラーラララ、ラーララララー…」とメロディを口ずさんでいた。

この時のメロディが、「おもいで」という曲になり、北海道でヒットし、やがて、この曲を布施明君が歌ったことで、僕は正式な作曲家として芸能界から迎えられることになるなど、この時の僕には知る由もなかった。

コーヒー・ルンバ

昭和
36

ホセ・マンソ・ペローニ作詞・作曲 中沢清二訳詞 川上義彦編曲

西田佐知子歌 (ポリドール)

西田佐知子さんの代表曲に僕がこの曲を選んだ理由

美貌のシンガーと言われた西田佐知子さん。関口宏さんと結婚されてから、まったく姿を見せないけれど、若い頃は僕といっしょに東洋企画というプロダクションに所属していた。

西田さんは、昭和29年、大阪朝日放送のど自慢番組で優勝して、この世界に入ったもののしばらくは売れず、ヒットした曲がこの「コーヒー・ルンバ」と「アカシアの雨がやむとき」だったと思う。

西田さんのファンのなかには、なぜ昭和35年の『アカシアの雨がやむとき』ではないのか？ という人がいるかもしれない。

「アカシアの雨がやむとき」は「コーヒー・ルンバ」より1年早く、これは学生運動に



昭和36年8月

影響を受け、挫折した若者たちに支持され、あとからジワジワ売れて大ヒットになったもので、たしかにいい歌にはちがいない。

事実、この昭和35年6月の安保反対のデモで、東大生樺美智子さんが亡くなっていた。そのことから、学生たちに支持されたのだと思う。

それでも、僕が「アカシアの雨がやむとき」を選ばなかったのは、歌というものは、やはり、誰でもが歌いたがるものであつてほしいからである。死を願い、死を美化した「アカシアの雨がやむとき」は、歌詞が暗い分だけ、そうは簡単に誰もが口ずさめないからだ。

むしろ、それなら、後年、出した「エリカの花散るとき」、「女の意地」、「東京ブルース」、「涙のかわくまで」のほうが彼女の代表曲だろうと思う。

さて、なぜ、「コーヒー・ルンバ」か。

それは、この歌の持っている明るく強烈なリズムと歌い出し、そして、何より「コーヒー」をテーマにした珍しい歌だということである。

戦後まもなく、ペレス・プラードという楽団が「マンボ」を日本に持ってきた。例の「ウー」という掛け声が特徴の激しいリズムである。その次に流行ったのが、やはり、

ラテンのリズムのひとつ、「ルンバ」であった。

これもかなり難しいリズムなのだが、西田さんは実に淡々としたボーカルで歌っている。コンゴとマラカスのリズムに乗って、アラブのお坊さんが若い男に琥珀色した飲み物を与えたら、あつという間に、若い女に恋をしたという歌詞が展開されるという、摩訶不思議な歌だったが、まさに西田さんでなければ、この歌はここまでツトしなかったのではないだろうか。

それに、なによりタイトルが僕は気に入っている。

日本人が大好きなコーヒをそのままつけているからである。戦前に「一杯のコーヒから」という歌が流行したが、「コーヒ・ルンバ」はそれよりはるかに直接的である。日常生活に欠かせない身近なコーヒを素材に、たとえ意識でも、みんなが楽しめるように作られたこの「コーヒ・ルンバ」、50年以上前の曲であるにもかかわらず、いまだ聞いていてほろりとした古きを感じない。それが、まさに、僕の言うところの「名曲」なのではないか。

「コーヒ・ルンバ」がこんなにいい曲ではないか。それ、聞いてみてほしいものだ。

いつでも夢を

昭和37

佐伯孝夫作詞 吉田正作曲・編曲

橋幸夫・吉永小百合歌（ビクター）

日本そのものの青春ソング

いま思うと、この「いつでも夢を」が流行した頃の日本は、あの敗戦から立ち上がった日本という国家そのものの「青春」だったような気がする。

日本経済が高度成長期を迎え、大人たちは好景気に沸き立ち、若者たちはアメリカ映画「ウエストサイド物語」の影響で、ツイストに浮かっていた。また、大鵬、柏戸が同時に横綱に昇進したのは昭和36年のことだし、ボクシングのファイティング原田が世界フライ級チャンピオンになったのは昭和37年、まさにこの「いつでも夢を」が歌われた年のことだった。

そうそう、男性化粧品の「バイタリス」が発売されたのも、この年で、ロカビリーブ



昭和37年9月

ームから4年、いよいよ、日本の若者たちが自立し、独特の若者文化を確立しはじめた頃でもあった。

この「いつでも夢を」は、当時の人気歌手橋幸夫君と人気女優吉永小百合さんがともに吉田正さんの門下生だったこともあり、デュエットするということで、発売直後から大変な人気となり、この年の第4回日本レコード大賞に輝いている。

この歌を口ずさめる人はおわかりだろうが、あのイントロから、まさに、時代にマッチした、あの当時の日本そのものの「青春」の明るさを表していると思うがどうだろう。ちなみに、当時、人気者だったこのふたりは大変に忙しいスケジュールだったので、レコーディングは別々に行われたそう。

デュエットする場合の三原則

この歌は爽やかなデュエットソングだが、いざ、カラオケでデュエットするとなると意外にむずかしい。

いい機会だから、ここで、デュエットする際の上手に歌える三つのコツを紹介しておこう。

一つ目のコツ。デュエットを聞いていて一番気持ちがいいのは、ふたりの声のボリュームがいつしよだということだ。男性が強すぎても、女性の声に張りがありすぎてもいけない。

では、男女が同じボリュームにするにはどうしたらよいか。それには、お互いが相手の声をよく聞くことだ。男女の立ち位置によってもちがうが、たとえば男性が、右の耳で自分の歌を聞き、左の耳で女性の歌を聞く。女性は逆だ。左の耳で自分の声を聞き、右で男性の声を聞きながら歌う。ふたりでお互いを注意しながら歌うと、強弱のバランスがとれる。要は耳をステレオにすることだ。

二つ目は、横揺れのテンポを意識する。つまり、デュエットする歌の速さを男女で同じにするために、イントロの部分で歌のテンポに合わせて、「イチ、ニー、イチ、ニー」と、いつしよに横に体を動かしてみるとリズムに乗れる。「イチ、ニー、サン、シー」ではなく、「イチ、ニー、イチ、ニー」だということを忘れずに。

そして、三つ目は、お互いにずっと客席を真正面に見て歌うのではなく、時々、相手を見て歌うこと。見つめ合わなくてもいいから、せめて向き合う感じをワンコーラスに一、二度出すと、いい雰囲気が出る。ただし、真横にならないこと。ひらがなの「く」

のような感じで、顔を見合わせるといいかもしれない。

これだけでも、初対面の人とのデュエットでも、楽しそうな雰囲気が出るので、見ている側も気持ちがいい。たったこれだけのことで、デュエットの雰囲気ががらりと変わる。ので、ぜひ、やってみてほしい。

その意味でも、この「いつでも夢を」は、いいデュエット曲かもしれない。ぜひ、同窓会で学生時代を思い出して、男性は女性を誘い、女性は男性を選んで歌ってみてほしい歌である。

恋のバカンス

昭和
38

岩谷時子作詞 宮川泰作曲・編曲

ザ・ピーナッツ歌 (キング)

素晴らしい和製ポピュラーソングの代表

先の「いつでも夢を」が日本という国そのものの青春時代だったと書いたが、昭和38年に入ると、世の中はもっと明るくなった。



昭和38年3月

テレビもかなり普及し、「鉄腕アトム」や「鉄人28号」、「エイトマン」などアニメが続々と放映されたのも、この年からである。さらに、日本初のハイウェイ名神高速道路が開通したのも、昭和38年のことだった。

そうしたなか、日本のポピュラー界に名曲が誕生した。それまでの日本のポピュラー界は、僕らがプレスリーやポール・アンカのカバー曲を歌ったのと同じように、ヒット曲の多くが、外国曲を日本語に訳したものであった。

飯田久彦君の「ルイジアナ・ママ」、藤木孝君の「24000回のキッス」、鈴木やすし君の「ジェニ・ジェニ」、森山加代子さんの「月影のナポリ」、中尾ミエちゃんの「可愛いベイビー」、伊東ゆかりちゃんの「ロコモーション」、田代みどりちゃんの「パインッブル・プリンセス」、弘田三枝子さんの「ヴァケーション」など、ここにあげたらきりがない。

たとえば、昭和34年にデビューしたザ・ピーナッツも、デビュー曲「可愛い花」、続いてヒットした「情熱の花」、さらには、「悲しき十六歳」など、それまでのヒット曲のほとんどがカバー曲だった。

そのザ・ピーナッツにオリジナル曲を提供したのが、宮川泰さんである。宮川さんの

ザ・ピーナッツへの最初のプレゼントは「ふりむかないで」。そして、次が名曲「恋のバカンス」だった。

そのためか、「ため息の出るような」で歌い出すこの歌を外国のカバー曲だと思っていた人もきつと多いことだろう。立派な和製ポップスなのだ。のちに、ザ・ピーナッツが歌った「ウナ・セラ・ディ東京」も宮川さんの作品である。

宮川さんが「和製ポップスの開拓者」と呼ばれた理由がこれでおわかりだろう。

ちなみに、ザ・ピーナッツの名曲のひとつとされる「恋のフーガ」も和製で、作詞がなかにし礼ちゃん、作曲がすぎやまこういちさんで、あのドドドンというテンパニーの激しいリズムではじまる編曲を手がけたのが、宮川さんである。

この「恋のバカンス」という歌は、カラオケで女性同士がよく歌う光景を見かけるが、この歌が上手に聞こえるか聞こえないかは、ハーモニーを担当する人ではなく、メロディを歌う人いかにかかっていると思っただけ。

つまり、基本のメロディライン、主旋律がしっかりといていないと、どんなにハモつても、きれいに聞こえないのだ。

もし自信がなかったら、歌う前に一度この歌をしっかりと聞き、体でリズムを覚えて

おけばいい。そして、ハモる側につられることなく、メロディラインをしつかりとしたリズムで、真面目にきちんと歌えば歌うほど、上手に聞こえるから心配しなくてもいい。上を歌う人は、ただの3度のハーモニーだから、きちんと音を取り合えば、すごくきれいにハモるから大丈夫。合唱部出身者とか、譜面の読める人なら、上は簡単だ。それだけに、メロディラインが大事だというわけだ。それに、ザ・ピーナッツが2人だから2人で歌わなければいけないということもない。3人でも楽しい。もし、何かの機会にこの曲を発表するなら、一度、カラオケで練習しておくことをお勧めする。

高校三年生

昭和
38

丘灯至夫作詞 遠藤実作曲 福田正編曲

舟木一夫歌 (日本コロムビア)

制服に憧れた高校時代

橋幸夫、舟木一夫、西郷輝彦の「御三家」が芸能界を席巻したのが、この時代だった。
せっけん



昭和38年6月

そして、先行するこの3人を追って、「美しい十代」の三田明、「霧の中の少女」の久保浩、「新聞少年」の山田太郎、「女学生」の安達明、「青春の城下町」の梶光夫といった、いわゆる青春歌謡を歌う人たちが出てきたのが、この時代だった。

そうしたなかでも、特に舟木一夫君の「高校三年生」、「修学旅行」、「学園広場」、「仲間たち」、「あゝ青春の胸の血は」、「君たちがいて僕がいた」といった「学園ソング」は、一時代を確実に切り取ったシリーズだったと言っているだろう。

その証拠に、いまでも「思い出の曲一〇〇」などというアンケートがあれば、「高校三年生」は圧倒的な支持を得ている。

いつの時代でも、多くの人が口ずさんでくれる歌こそ、僕は「名曲」だと思っているから、僕の「昭和歌謡」にもこの「高校三年生」は外せない。

それに、僕は音楽的なこととは関係なく、個人的にこの「高校三年生」に憧れていた。実は、僕は小学校から中学まで、私服の学校だったため、制服を着たことがなかった。そして、慶応高校に入ってはじめて制服を着ることができたのだが、その頃、僕はジャズ学校に行っていたり、進駐軍で歌っていたりしていた。

僕は加山雄三君、川口浩君は慶応高校の同級生だったのだが、高校三年生の終わりの

頃に、高校を中退してしまった。だからこそ、舟木君の「高校三年生」がヒットした時、「ああ、いい歌だなあ」と思ったのである。

学帽、制服、男女共学、ホームルーム、文化祭、運動会、フォークダンス……。

まあ、まともな学園生活を送ることができなかった僕の憧れを、舟木君が歌ってくれていたのだから。いまでも、この歌を聞くと、うらやましい気持ちになるのが不思議だ。

サン・トワ・マミー

昭和
39

岩谷時子作詞 サルバトーレ・アダモ作曲 高橋諭一編曲

越路吹雪歌 (東芝音工)

この歌を歌うには、歌唱力よりも演技力

一流歌手とは、「レコード(CD)に良し、ラジオ・テレビに良し、ステージに良し」であること——。

僕はこう思っているのだが、越路吹雪さんは、この3条件を高いレベルで満たした超一流の歌手である。



昭和39年6月

この「サン・トワ・マミー」にかぎらず、「ろくでなし」にしても、「ラストダンスは私に」にしても、越路さんの歌には物語があり、聴き手は、その世界にいつの間にか引き込まれていってしまう。

たしかに、シャンソンというのは何気ない小さな物語を歌にしたものだから、基本的には歌うより語るのだが、それにしても越路さんは歌いながら、実にさりげなく、聴くものをその世界に引き込んでいくのが上手なのだ。

ライブ盤を聴くと、よくわかるのだが、会話と歌をつなぐ「間」が絶妙で、いわば「越路マジック」と言ってもいいかもしれない。ある意味では、越路さんは歌手というよりも、女優的なのだろう。そういえば、越路さんは宝塚出身だし、その昔、「男嫌い」などというテレビドラマに出ていたことを思い出した。

歌の話に戻ろう。この歌は、もともとアダモのヒット曲を岩谷時子さんが訳詞して越路さんが歌っているのだから、カバー曲と言ってしまえばカバー曲なのだが、単なるカバーではなく、かぎりなくオリジナルに近いカバー曲だと僕は思う。

こうした原曲をはるかに超えたカバー曲は、この歌にかぎらない。なかにし礼さんが訳詞し、菅原洋一さんが歌った「知りたくないの」も、また、やはり、礼ちゃんが書いた

て、ペドロ&カプリシヤスが歌った「別れの朝」なんかも、この「サン・トワ・マミー」と同じケースで、原曲があったことをあとから知るというケースも多かったわけである。シャンソンの歌詞は、ごくありふれた出来事を淡々と語っていることが多い。逆に言えば、歌詞の内容は、ごく日常生活のある出来事だから、日本の歌のように、特にむずかしい言葉を使っているわけではない。それをまた、さりげなく歌う。

音楽的に言えば、日本の歌にはないメロディライン、構成の仕方が特徴だ。

だから、この「サン・トワ・マミー」をカラオケで上手に歌うには、かなり歌唱力というよりも、演技力がある。歌のなかの主人公を演じる気持ちがまず大事ではないだろうか。越路さんの歌い方は、「悲しい歌」なのに、決して悲しい顔をして歌っていない。しかし、それでいて、聴いていると、泣きたくなるほど悲しくなるから不思議だ。

それに、わりと大柄な女性なのだが、「サン・トワ・マミー」の主人公のような可憐な女を歌う時は、ほんとうにかわいらしく見えるから、さすがだ。そのあたりも、「歌」はどう伝えるかで決まるということを、越路さんはよくご存知なのではないだろうか。

そして、歌うときにもっと大切なことは、リズムにどう乗るかだ。「サン・トワ・マミー」は、半拍おいて、歌に入る箇所が多いからむずかしいが、そこはいきなり歌わな

いで、まず、メロディとリズムをハミングで覚えてから、詞を乗せて歌い出すといい。

メロディもむずかしくないし、音域も広くないから、一にも二にもリズムだ。リズムの乗り方を覚え、ぜひ、この「サン・トワ・マミー」を自分のものにしてほしいと思う。越路さんは昭和55年、56歳の若さで亡くなられたが、いま、いろいろな歌のジャンルで活躍している20代、30代の歌手のなかから、ぜひ、第二のコーちゃんが出てきてほしいものである。

第二章

昭和40年代前半

——1945～1955——

涙の連絡船

昭和
40

関沢新一作詞 市川昭介作曲・編曲

都はるみ歌 (日本コロムビア)

なんだ、この唸り声は

都はるみさんの歌をはじめ僕が聞いたのは、歌謡ショーが行われていた会館の楽屋にいる時だった。

何しろ、あまりの驚きにわざわざ舞台の袖まで聞きに行っただから、たぶん、彼女がまだ新人で、「アンコ椿は恋の花」を歌った時ではなかったかと思う。とにかく、唸りがすごかったのだ。やつぱり、大歌手になる人は、最初からインパクトがあるものだ、いまさらながら、つくづく思う。

都はるみ伝説によれば、京都の織物屋に生まれたはるみちゃんは、子供の頃から歌が上手だったが、浪曲と民謡が好きだったお母さんは、1回唸ると10円あげるという方法で、子供の頃からはるみちゃんを唸らせては楽しんでいたという。もちろん、はるみち



昭和40年10月

やんも喜んで唸った。

だから、唸りは自然に彼女の身についていったにちがいない。

その後、はるみちゃんは「歌う平凡」で優勝し、市川昭介さんの弟子となって、「**困るのことヨ**」でデビューし、「**アンコ樁は恋の花**」で一躍注目されるようになった。

では、はるみちゃんのこの昭和40年代の一曲を選ぶとしたら、どの曲がいいか。僕は「**好きになった人**」か、「**涙の連絡船**」のどちらかだと思う。

明るく軽快なテンポの「**好きになった人**」を推す人もきつと多いだろう。首を傾げ、ウインクして、客席を指差すはるみちゃんの姿を思い出す人もいるだろう。

だが、あえて僕は「唸らない」ことを意識した「**涙の連絡船**」をここでは挙げておこう。

汽笛がいつものように鳴っている夜に、連絡船が着く港に行く女。出会いはたったひとりの夜のこと。でも、忘れられない。連絡船は出て行ったら戻るけれど、決して来ない男をひとりぼっちで埠頭で待っている女を見事に「唸らない」で歌い切った、はるみちゃんの真の歌唱力を讃えたいからである。

まさに、歌の中の女の物語を見事に演じきった歌い方は感動的だった。

もちろん、その歌唱力で、「涙の連絡船」は発売されるやいなや、またたく間にミリオンセラーとなった。

あとで人から聞いた話では、市川昭介さんはこの歌を、はるみちゃんの楽屋でギターを爪弾きながら、わずか、2時間で書き上げたそう。

君といつまでも

昭和
40

岩谷時子作詞 弾厚作作曲 森岡賢一郎編曲

加山雄三歌 (東芝音工)

「幸せだなあ」はアドリブだった！

昭和40年、音楽界はどこもかしこもエレキブームで沸いていた。

そのきっかけは、ザ・ベンチャーズの来日だった。低音弦をスライドさせてビッキングを行う、いわゆるテケテケテケテケという奏法が爆発的に流行し、彼らの「ダイヤモンドヘッド」、「バイブライン」、「キャラバン」なれを演奏するフビーバンドが激増したのもこの頃だった。



昭和40年12月

読者のなかにも、仲間たちを集めてエレキバンドを作った人たちもきつっていることだろう。あの頃は、あちこちでバンド合戦が行われていたような気がする。

そんなエレキブームのタイミングで作られた東宝映画「エレキの若大将」のなかで、主役の加山雄三君が弾厚作の名前で作曲し、自ら歌ったのが「君といつまでも」だ。実際、彼はエレキギターはもちろん、ピアノも弾けるし、若い頃から叔父さんが経営しているホテル・パシフィックパークで歌も歌っていたから、作曲したり、映画のなかで歌うのも何の問題もなかっただろう。

ただ、これは聞いた話だが、「幸せだなあ」からはじまるセリフは、どうも最初はなかったらしい。

レコーディングがはじまり、1番と2番の間の間奏の時、彼が乗って思わず「幸せだなあ……」と勝手に言ったら、そばにいた岩谷時子さんが「そのセリフ、いいじゃない。入れましょう」ということになったそう。

加山君なら、ありそうな話だ。

僕が彼のことをいかにも親しそうに言うのは、僕と彼とは慶応高校の同期生だからである。僕は昭和29年4月から、慶応高校の日吉校舎に通ったのだが、同じ時に入学して

いたのが加山雄三君だ。

「あそこには座っているのが、池田とあって、上原謙の影だ」

「ふえ、親父は彼の細い二枚目はけれど、あいつはがっちりしているなあ」
 なんて、友だちと話した思い出がある。

ただ、彼は僕とちがって、学生生活は真面目で、同期でたまたまひざり無類組、無天隊、
 ずから中退を繰り返して学校に来ていたのを「下々入」といってニヒキネームがついていた
 ようだ。

加山君との付き合いがはじまったのは、ずいぶん後のことになった。

おもい

昭和41

大島寛作 作詞 半原昌幸 作曲 松田聖一 歌

市井明歌 (キムミ)

おもい

おもい



昭和41年3月

あれは、「ミヨチャン」がヒットした頃だったと思う。

「ミヨチャン」で作曲法は覚えたものの、作詞の才能はないことに気づいた僕は、ひまさえあれば、ギターをボロロンと鳴らしながら、好きなメロディを弾きはじめていた。それにしても、歌詞がないとなかなか曲のイメージが湧かない。

そこで、「星はなんでも知っている」でお世話になった水島哲さんをお願いして、詞を書いてもらった。

歌詞は素晴らしかった。男女の切ない恋の思い出が綴られていた。タイトルは「おもいで」。ひらがなが気に入った。

僕は、ギターを奏でながら、水島さんの素敵な詞にメロディをつけた。そして、「ミヨチャン」に続く、僕の作曲と歌という形でレコードを出した。だが、この「おもいで」は「ミヨチャン」の陰に隠れて、まったく売れなかった。

それから数年経った頃だった。

東京オリンピックが開催され、時代は大きく変わった。もう、かつてのロカビリー歌手平尾昌章は、完全に芸能界から忘れ去られてしまっていた。わずかに、映画俳優としての仕事があったが、ファンにキヤーキヤー言われた時代は、とうの昔の話であった。

「一週間のご無沙汰でした。司会の玉置宏です」ではじまる「ロッセ歌のアルバム」に華やかに登場するのは、橋幸夫、舟木一夫、西郷輝彦、三田明といういわゆる歌謡曲のスターたちだった。

時代は完全にロカビリー歌手、平尾昌章を置き去りにして過ぎていった。

そんな時、札幌から一枚の葉書が届いた。知らない女性の名前で、昔の僕のファンらしい。そこには、こう書かれていた。

「平尾さん、お元気ですか。いま、北海道では平尾さんの『おもいで』が大変な人気で、ラジオからじゃんじゃん流れていますよ。私もうれしいです。マーちゃん、おめでとう。ぜひ、近いうちに北海道に来てください」

僕は半信半疑で、北海道の友人に電話を入れた。すると、「そうなんだよ、あつと言う間にHBCラジオのリクエストで1位になってさ」と言う。当時は、加山雄三君の「君といつまでも」、倍賞千恵子さんの「さよならはダンスの後に」がヒットし、洋楽ではビートルズの全盛期だ。あの「イエスタデイ」を抜いて、僕の曲、それも東京でヒットもしなかった「おもいで」が1位になるなんて……。

いや、あの時は本当に驚いた。

ヒットはエレキバンドのおかげ

しかし、それにしても、どうして5年前の、それもヒットもしなかった曲が北海道でいまごろ、と思って聞いてみたら、エレキバンドのおかげだということがわかった。

当時は、大変なエレキブームで、北海道でも学生バンドやアマチュアバンドが雨後のたけのこのように登場してきたのだが、彼らにはテーマソングがない。

そのうち、どこかのバンドが「おもいで」をアレンジして演奏したら、これが受けて、「なんていう曲だ」と密かにブームになった。しかも、このバンドが札幌、小樽、函館、帯広、根室、釧路と行つては、「おもいで」を演奏するものだから、ますます人気になった。

それを聞いたHBCのラジオの音楽番組のディレクター三浦陽二さんが調べてみると、平尾昌章が過去に歌った曲だとわかったが、発売元のキングに問い合わせてもない。なぜなら、僕はその後、ビクターに移籍しているからだ。

ディレクターの三浦さんはかつての僕のファンたちの間を駆け巡り、ようやく3枚、レコードを探し出し、それをラジオでかけたから、一気に火がついたのだった。1枚

330円だったレコードに20倍のプレミアがついたそうだ。

葉書が舞い込んで2週間後、僕は北海道に飛んだ。キングは、百円の予約金をとったにもかかわらず、廃盤になったレコードをなんと3万枚プレスして、当時航空便で北海道のレコード店に送った。僕は、新人歌手のキャンペーンのように各レコード店を歌って回った。

いや、驚いた。

レコード店では店内に「おもいで」が流され、あたり一面に僕のロカビリー時代の写真が貼ってあったからだ。そこで、即席のサイン会が開催され、届いたばかりの「おもいで」はたちまち売れてしまった。

知り合いのダンスホールでも、レストランでも歌った。出演依頼があれば、滞在している間、どこにでも行った。

三浦ディレクターにもお会いし、お礼を言った。

(ああ、これでまた、僕は歌手としてステージに立てる！)

僕は、北海道キャンペーンを終え、茅ヶ崎に勇躍戻った。

この歌を布施君に歌わせてくれないか

茅ヶ崎で僕を待っていたのは、キングのディレクター本吉常浩さんだった。

僕は、北海道のこともあったので、もう一度「おもいで」を全国発売にしてくれるのではないかと思い、密かに喜んでいた。

彼は、いきなり、こう切り出した。

「マーちゃん、布施明って新人、知ってます？」

「はあ？」

「ホイホイ・ミュージックスクールの卒業生なんだけどね、デビューさせて、カンツォーネを歌わせてんだけど、伸び悩んでるんだ。彼の才能はこんなもんじゃないんで、布施に『おもいで』を歌わせてあげてくれないか」

僕は正直、一瞬、目の前が真っ暗になった。自分のカムバックの話でないばかりか、せつかくヒットしかかっている「おもいで」を譲れというのだから。これで、僕の歌手生活は終わりだ、ということだ。

しかし、一方では、歌手は終止符を打つが、作曲家としてはスタートだった。人間、

誰だって、曲がり角はある。曲がり角の先は見えない。でも、そこで曲がってみるか、立ち止まるかで、次の人生は変わる。

「僕はね、歌手布施明を平尾君に育ててほしいと思っているんだよ。つまり、布施を通して、作曲家・平尾昌章を売り出したいんだ」

本吉さんのこの言葉で、僕は曲がり道を曲がってみようと決心したのだった。

その時、僕は本吉さん、布施君のマネージャーにひとつだけ条件を出した。それは、布施君に僕の「おもいで」を聞かせて、僕の歌っている通りに歌わせてくれ、と。すると、一週間も経たないうちに、布施君が歌った「おもいで」のテープが届いた。

これがいい。素晴らしかった。

プレスの仕方まで僕を見習い、ていねいに歌ってくれていた。僕はそれを聞いて、歌手としてのマイクを一時的に置くことにした。

そして、布施君のために、僕は「銀の涙」を、続いて「霧の摩周湖」を作曲する。その意味で、この「おもいで」は僕にとって、人生の転機を作ってくれた大事な一曲になったのである。

夕陽が泣いている

昭和41

浜口庫之助作詞・作曲 ザ・スパイダース／チャーリー・鯉野編曲

ザ・スパイダース歌（フィリップス）

GSは和製英語

通称GSと呼ばれたグループ・サウンズ（和製英語、欧米ではヴォーカル・アンド・インストゥルメンタル・グループ）が大流行したのは、昭和42年から昭和44年頃ではなかったかと思う。

これはもちろん、昭和41年のビートルズの来日公演と無関係ではない。事実、この公演のあと、日本中でエレキギターを自ら演奏しながら歌うグループが日本で次々とデビューした。しかし、僕に言わせれば、そうした当時のすべてのバンドをGSと言うには無理があつたように思える。

たとえば、ビートルズ来日以前から活躍していたジャッキー吉川とブルー・コメッツやザ・スパイダースと、フォーク・グループだったザ・ワイルドワウンズとはその求める



昭和41年9月

音楽性がちがうので、いっしょにはできないはずだが、そのあとに次々と生まれたザ・タイガースやザ・テンプターズまでもひっくるめてのGSだったのだから。

ただ、そうしたことを抜きにしても、僕がGSを素晴らしいと思えるのは、当時の彼らの切磋琢磨ぶりである。

彼らは他のバンドに負けたくない一心で、「ここはこうしよう」とメンバー全員でアレンジを考えたり、演奏方法を工夫したりしていた。わかりやすく言えば、みんなでわいわい言いながら、自分たちに合った曲を完成していったのである。

ザ・スパイダースは昭和36年に田辺昭知さんが結成したバンドで、堺正章（マチャアキ）さん、井上順さん、かまやつひろしさん（ムッシュ）を主体に、ミリタリー・ルックで、しゃべって歌って演奏するといういまのコンサート形式を先取りしたバンドだったが、この「夕陽が泣いている」で一躍、スターバンドになった。

過日、マチャアキに会ったが、井上順さんは最初、あまりしゃべりがうまもなく、コーラス専門だったと聞いて、おかしかった。

「夕陽が泣いている」は、もともとはザ・スパイダースの主演映画「涙くんさよなら」の劇中歌で、それまでのザ・スパイダースのサウンドとは異なり、哀愁を帯びたフォー

クバラードが心を打った。

一世を風靡したそのザ・スパイダーズも昭和42年頃からのGSブームで、音楽的なセンスを含むその技量は別にして、年齢が高かった彼らの勢いは衰え、昭和45年に解散している。

だが、その後のメンバーの活躍は見事で、田辺さんは芸能界の重鎮として、マチャアキ、順ちゃん、ムツシュ、さらには大野克夫さんをはじめ、皆さん、解散したのちも、それぞれの才能を生かして、音楽の世界で見事に活躍しているというのも、このGS時代のスターたちの特徴である。

想い出の渚

昭和41

鳥塚繁樹作詞

加瀬邦彦作曲

森岡賢一郎編曲

ザ・ワイルドワンズ歌 (東芝音工)

名づけ親は、加山雄三君

加山雄三君から現在の桑田佳祐君につながる湘南サウンドで、G



昭和41年11月

S時代の決定盤といったら、間違いなくこの曲だろう。

ザ・ワイルドワンズのリーダー、加瀬邦彦君は茅ヶ崎の出身で、慶応高校の後輩だから、この若々しいサウンドはまさに彼らしいし、聞いていて気持ちがいい。

彼は、学生時代から音楽活動が続けており、プロになった最初はかまやつひろさんと「キャノンボール」を結成。かまやつさんが「ザ・スパイダーズ」に入ったので、彼もいっしょにメンバーになったが、3カ月で辞め、寺内タケシとブルー・ジーンズを経て、ザ・ワイルドワンズを結成し、リーダーになった。

やはり大学時代からバンドを組んで、自分なりのサウンドを作り上げようとしてきた彼にとっては、ザ・スパイダーズもブルー・ジーンズも音楽的に納得がいかなかったのだろうと思う。

その意味では、自分のサウンドを実現させるためには、自らがリーダーとなり、メンバーを集めなければいけなかったのだと思う。幸い、鳥塚繁樹君をはじめ、彼を慕う若いメンバーが集まり、結成されたのが、このバンドだった。

ザ・ワイルドワンズの名付け親は、加瀬君と公私ともに親しい加山雄三君で、「野生児」という意味だ。

この歌は、加瀬君のサウンドを生かすために作られたそのザ・ワイルドワインズのデビュー曲であり、最大のヒット曲でもある。この歌を聞けば、加瀬君がザ・スパイダーズやブルー・ジーンズを辞めた理由もわかるというものである。

GSブームが起こる少し前、学生フォークの匂いを残す名曲のひとつかもしれない。

この歌がやがて、パープル・シャドウズの「小さなスナック」や、ガロの「学生街の喫茶店」、さらにはビリー・バンバンの「白いブランコ」へとつながっていったのだ。

また、先に、GS時代にスターだった人たちが、グループ解散後も音楽業界で活躍しているということを述べたが、加瀬君もまた、いままも作曲家として、また音楽プロデューサーとしてその才能を発揮している。

霧の摩周湖

昭和
41

水島哲作詞 平尾昌晃作曲 森岡賢一郎編曲

布施明歌 (キング)

真夏の茅ヶ崎で、「霧の摩周湖」が誕生した

再び、僕の話になって恐縮だが、「おもいで」が30万枚、「銀の涙」が20万枚と順調に布施君の歌がヒットしはじめた昭和41年、次の布施君の歌について。スタッフ全員で話そうということになった。

「じゃあ、みんなで茅ヶ崎においでよ。昼間、海で遊んでさ、夜、僕の家でバーベキューでもやればいいよ」

もちろん、布施君もやってきた。作詞家の水島さんは、新聞記者だったから昼間は来られないので、夕方から合流することになって、打ち合わせもそこそこに楽しい夕餉になった。

「さあ、食べるものも食べたしさ、ところで本題だけど、布施君の次の歌はどんな感じ



昭和41年12月

の歌にする？」

「さつき泳いでいて気がついたんだけど、やっぱり、海の歌とか、渚の歌なんかいいと思うんだよな」

その意見に、真っ先に異論を唱えたのは、僕だった。

「ダメ、ダメ。布施君には海は似合わない。だってさつき海パン姿の布施君を見たけど、どう見ても海の男じゃないもの」

僕の歌作りは、結構、映像的なイメージが先にあるので、僕の絵の中には、渚で歌っている布施君の姿はなかった。渚とか、海というイメージは、やはり石原裕次郎さんとか加山雄三君のようなタイプで、華奢でナイーブな布施君には似合わなかったのだ。

「じゃあ、平尾さんは、布施のイメージは海じゃないとすると、どこ？」

僕は、とっさに「湖ならいいんじゃないの？」と答えていた。なぜなら、彼にはどことなく翳^{かげ}りが感じられたし、神秘的なイメージがある。だとしたら、湖が舞台の歌がいいと思ったのだ。それも、富士山をバックにした河口湖という明るいイメージでない湖がいい、と僕は言った。

いろいろ、意見が出た。「琵琶湖はでかすぎるか」とか、「榛名湖は、『湖畔の宿』で

使われているからダメか」とか。そのうちに「十和田の夕日」っていいじゃないかということになった。布施君も、「うん、いい、いい」とか言っていた。ほとんど、それで行こうと決まりかかった時、作詞家の水島さんがロックでウイスキーをぐいぐい飲みながら、こう言ったのだ。

「摩周湖だね。知らないかい？ あそこはね、神秘的なんだよ。いつも霧に閉ざされていて見えないんだ。でも見えるとね、透明度が世界一だ。透き通っていて、底まで見えるんだ」

「霧の摩周湖、いいじゃないの。それでいこう」

普通はその地を旅をして作詞をしたり、曲のイメージを抱くのだが、この曲はまさに夏の茅ヶ崎の僕の家でのバーベキューの後に生まれたのである。

汚れを拭き取るナブキンに

水島さんは、タイトルが「霧の摩周湖」に決まると、バーベキューの台の上に置かれていたナブキンに、なにやらさらさらと書き始め、一行書いては僕にくれる。

「霧に抱かれて静かに眠る。いいじゃない、これ」

もう、それだけで僕はギターを鳴らしはじめた。「霧に〜」、「抱かれて〜」。あつと言
う間に歌い出しが決まった。あとはもう流れに乗って、スラスラとメロディが出てくる。
「おい、布施君、歌ってみろよ。いいか、霧に〜」

布施君も歌い出す。「霧に〜抱かれて〜し〜ず〜かに眠る〜」

すると、水島さんから次のナプキンが。「星も見えない、湖にひとり」

僕がギターで「星〜も〜見えな〜い」

そんな調子で、どんどん歌が完成していったのだ。

僕の伴奏に合わせて、布施君がすべて歌い、みんなが満足したのは言うまでもない。

夕方からはじめて、終わったのは夜中の1時半だったか。

ただ、この曲、音楽的に言うと、1番とサビの部分しかない。これは、とても珍しい
曲だ。みんながよく知っている歌のなかでは、「想い出のサンフランシスコ」がそうだが、
ワンハーフという形式は、日本の曲ではあまりない。

なぜ、そうなったか。理由は簡単だ。一行一行、ナプキンに書いてくれていた作詞家
の水島さんが、ペロペロに酔って、眠ってしまったからである。

気がつけば、お酒の大好きな水島さん、まさに、酒に抱かれて静かに眠っていたので

あった。

この広い野原いっぱい

昭和
42

小薊江圭子作詞 森山良子作曲 前田憲男編曲

森山良子歌 (フィリップス)

君はジョーン・バエズを知っているか

日本にGSブームが起こるちよつと前、1960年代のアメリカに、「フォークの女神」と呼ばれる女性歌手がいたのを知っている人も多いだろう。

ジョーン・バエズ。彼女は1941年、ニューヨークの物理学者の家に生まれている。生まれつき音楽の才能に恵まれ、ボストン大学在学中も、ギターを弾きながら歌っていた。プロとしてデビュー後も最初は、「ドナドナ」や「風に吹かれて」などのいわゆるフォークソングを歌っていたが、アメリカがベトナム戦争に突入すると、「勝利への讃歌」など反戦歌を歌いはじめ、次第に政治的な歌を歌うようになっていった。



昭和42年1月

成城学園高校在学中にこのジョーン・バエズの影響を受けて、友だちとフォークグループを結成、バエズの歌を歌いはじめたのが、森山良子さんである。

彼女の父は、我々の大先輩のジャズトランペッター、森山久さんで、母はジャズ歌手だった浅田陽子さんだから、彼女が飛びぬけて歌が上手なのは当然である。

そのジョーン・バエズが来日、全国を公演してまわったのが昭和42年1月。まさに、森山良子さんのデビュー曲「この広い野原いっぱい」が発売されたのと同時期だった。このジョーン・バエズの宿泊先に、森山さんのマネージャーが押しかけ直談判。その熱意が通り、森山良子さんはジョーン・バエズといっしょのステージに立った。それが、テレビ中継され、一躍、彼女は有名になった。たしか、「和製ジョーン・バエズ」と彼女が呼ばれるようになった理由も、そこにあったのだと思う。

「この広い野原いっぱい」は、彼女がたまたま買ったスケッチブックに印刷されていた詞を気に入り、わずか30分で作曲してしまったとか。

その後、「今日の日はさようなら」とか、「恋はみずいろ」、「禁じられた恋」などとヒットを飛ばした彼女は、最近でも「さとうきび畑」というヒット曲を飛ばしている。

僕が歌っていた時代の日本の芸能界は、いわゆる流行歌と呼ばれたジャンルと、僕た

ち洋楽のカバー曲を歌うジャンルのふたつの分野しか存在しなかったが、昭和40年代に入って、先のザ・スパイダーズやザ・ワイルドワンズのようなGSも、この森山良子さんのようなフォークも、また一方では、城卓矢さんの「骨まで愛して」などという歌も同時代にヒットする、日本人独特の音楽に対する大らかさを感じさせてくれた一曲である。

夜霧よ今夜も有難う

昭和
42

浜口庫之助作詞・作曲 山倉たかし編曲

石原裕次郎歌 (テイチク)

裕次郎さんは、歌が上手か下手か

いまでこそ、忍ぶ恋はそれほど珍しいことではないが、この歌が流行った頃の日本人の、好きになっただけとはいけない人との恋愛は、まさに「忍びあう恋」であった。

その切なく、やるせないムードを石原裕次郎さんが歌っている「夜霧よ今夜も有難う」



昭和42年2月

は、昭和40年代を代表するムード歌謡の大傑作だ。

ところで、僕たち音楽業界の関係者の間で、いまだに話題になる問題がある。

それは、「石原裕次郎は、はたして、歌が上手だったのだろうか」という論議だ。たしかに、第一章で書いた「誰が歌が上手だったか」というアンケート調査には、裕次郎さんの名前は出てこない。だとしたら、裕次郎さんは、歌が上手ではないということか。もちろん、「俺は待ってるぜ」、「嵐を呼ぶ男」からはじまって、「銀座の恋の物語」、「赤いハンカチ」、「夕陽の丘」、「二人の世界」、「ブランデーグラス」、「北の旅人」などあれだけヒット曲を出しているのだから、間違っても歌が下手なわけではないのだが、そこはそれ、音楽ひと筋で来た人たちにとっては、人気とかヒット曲の数を度外視して、歌手としての評価を求めて専門的な問題提起をしたいのだ。

実際、僕がまだ若かった頃、よく先輩から「石原裕次郎って、歌が下手だよな」とか、「エコーも深くかけているし、俳優が歌っているからいいんで、歌は素人に毛が生えたようなもんだよ」などと言われたものだった。

僕はその度に、「何言ってるんですか、あんなに歌の上手な人はいませんよ」と口ごたえをしたことを覚えている。すると、彼らは一様に苦々しい、不快な表情を浮かべ、

沈黙した。きっと、「そうですよ、ほんと、下手ですねぇ」と僕に答えてほしかったにちがいない。

僕が、石原裕次郎さんが歌が上手だという根拠は、三つあった。

一つは、裕ちゃんの歌は一度聞くと、「誰もがみんな歌いたがる」ということだ。そして、二つ目が歌詞のひと言ひと言に表情があって、裕次郎さんでなければ歌えないこと。さらに、三つ目は、あの独特の中低音の声質である。

つまり、誰もが歌いたがる歌であるが、その人しか上手に歌えない歌。それが石原裕次郎さんの歌なのだ。誰でも歌える歌を上手に歌う。これが本来の歌手だとすれば、裕次郎さんがいかに歌手としての高い実力の持ち主だったかわかるだろう。

先日、小林旭さんがショーのステージ上でファンに向かって、こう言っていた。

「裕次郎さんはすごい。僕は、歌うとどうしても力が入ってしまうけど、裕ちゃんは、さりげなく囁くように歌ってましたからね。ほんと、歌の上手な人だと思いましたよ」

戦後、最大の映画スター石原裕次郎さんの昭和40年代を代表するラブソング「夜霧よ今夜も有難う」は、カップリング曲「粋な別れ」とともに大ヒットしたのも、やっぱり

ここで、ひとつ、裕次郎さんの歌をカラオケでカッコよく、うまく歌いたい人のためのワンポイント・アドバイスをしておこう。

もし、あなたがこの歌にかぎらず、裕次郎さんの歌を歌うなら、「絶対、語尾を伸ばさない」ことだ。語尾はぶつきらばうに切る。声を張り上げない。語るように歌う。そうすると、うまく聞こえる。これは、「赤いハンカチ」でも、「粋な別れ」でも同じだ。もし、語尾を伸ばし、気持ちよく歌う癖がある人がいたら、一度、伸ばさないで歌ってみてほしい。

ブルー・シヤトウ

昭和42

橋本淳作詞 井上忠夫作曲 森岡賢一郎編曲

ジャッキー吉川とブルー・コメッツ歌 (CBSコロムビア)

自分たちで自分たちのサウンドを作り出した

昭和40年代に入ると、それまでのいわゆる歌謡曲系とポップス系の二つのジャンルに分かれていた日本の音楽界が、多種多様な様相



昭和42年3月

を帯びてきた。

たとえば、楽器を弾きながら歌うグループや、自分で作詞作曲し、さらに自分で歌うフォーク系と呼ばれる歌手たち、また、カレッジ・フォークと言って、学生時代だけのグループがヒット曲を飛ばし、卒業と同時に解散したりしたし、さらには、いわゆる歌唱力と言うよりも、ビジュアルを売り物にした、とてもかわいいアイドルも登場しはじめたのも、この時代からである。

そうしたなかで、日本の音楽を象徴するマイナー・メロディを中心にした曲作りをして、GSの頂点に立ったバンドがこのジャッキー吉川とブルー・コメッツである。

ブルー・コメッツの誕生は古く、昭和32年ということになっているが、この「ブルー・シャトウ」を歌った時のメンバーが揃ったのは、昭和40年前後だという。彼らは一応、GSと言われていたのだが、ザ・タイガースやザ・ワイルドワンズと大きく違うことは、外見が短髪でスーツ姿であったことだけでなく、メンバーがプロの演奏家集団であったことだと僕は思う。

彼らの音楽的特徴は、僕に言わせれば、まず一曲一曲の品質が高いこと。

もう少し具体的に長所をあげれば、楽器演奏のテクニックの素晴らしさもさることな

がら、歌をハモる際の声の使い分け、さらにはジャンルの広さ、つまり、ロックであろうが歌謡曲であろうが、どんな種類の歌をやらせても完成度が高く、まさに、プロの音楽家が集まった理想的なバンドだったのである。

この時代の大きな特徴である「自分たちで自分たちのサウンドを作る」という、典型的なバンドが、ブルー・コメッツだったのである。

この「ブルー・シャトウ」は、「青い瞳」、「青い渚」とブルー・シリーズを作曲してきたメンバーの井上忠夫さんと作詞家の橋本淳さんがホテルに缶詰になっていた時、橋本さんの頭に、ヨーロッパの古城のイメージが浮かび、詞を書きはじめたら、それを見た井上さんが、すぐに五線譜にメロディを書き出したというのがすごい。

しかし、これもまた、日本人の好きなマイナー調で、完成すると、和製ポップスでありながら、日本人の心をつかむどころか、子供たちに替え歌を作らせるまでにヒットしたのだった。その意味でも、僕の名曲の定義、「誰でもすぐに歌える」、「いつまでも歌いたくなる」歌だったのである。

この曲は、昭和42年、日本レコード大賞を受賞。グループとしては、はじめての受賞だった。

真赤な太陽

昭和42

吉岡治作詞 原信夫作曲 井上忠夫編曲

美空ひばり歌 (日本コロムビア)

GSのトップ、ブルコメがバックバンド

「ブルー・シャトウ」でGSブームの頂点に立ったジャッキー吉川とブルー・コメッツは、この年に演歌の女王、美空ひばりさんが真赤なミニスカートで歌った「真赤な太陽」の演奏もしている。

これは、ひばりさんがいかに「時代」を大事にしていたかの象徴だと僕は思う。

ひばりさんは、昭和30年代までは、まさに日本歌謡界の女王として君臨していたが、あらゆるジャンルの音楽が現れた40年代のこの激しい流れを見た時、「このままの路線では、時代の流れについていけなくなる」と判断した。それが「真赤な太陽」となり、まさに「時代」の代表であり、日本レコード大賞を受賞したブルー・コメッツをバックバンドに能えることで、「時代」の急流に乗ったのではないだろうか。



昭和42年5月

この曲は、ご存知の方も多いだろうが、アレンジを含め、明らかに当時の流行だったGSの雰囲気強調している曲で、歌番組で、あのひばりさんがはじめてミニスカートを着用し、当時、はやったゴーゴードダンスを踊りながら歌ったのだから、ファンもかなり驚いただろうと思う。しかし、それも、僕に言わせてもらえれば、ひばりさんが、この「時代」に合わせて歌った歌なのだ。

改めて、そのひばりさんの才能と努力に敬意を表するために、この「真赤な太陽」を僕の「昭和歌謡」のこの時代の歌の代表にさせていただいた。

結果的には、この「真赤な太陽」は140万枚を超すミリオンセラーとなり、当時、ひばりさんのそれまでの歴代のヒット曲売り上げの第4位を占めたというのだから、さすが、ひばりさんだ。

しかも、その後、多くの歌手がこの曲をカバーして歌っている。僕たちだって、歌おうと思えば、すぐに口に歌詞が出てくる。まさに、この「真赤な太陽」も、「昭和歌謡」の名曲なのである。

恋のしずく

昭和43

安井かずみ作詞 平尾昌晃作曲 森岡賢一郎編曲

伊東ゆかり歌 (キング)

明日までに曲を作ってください!

「ブルー・シャトウ」が日本レコード大賞を受賞した昭和42年、僕は、梓みちよさんが歌った「渚のセニョリーナ」と先の「霧の摩周湖」で、第9回日本レコード大賞作曲賞をいただいた。

この時、正直言って、ようやく作曲家としてやっていく自信がついた。その頃、伊東ゆかりさんの新曲を依頼されたのだ。

伊東ゆかりさんは、実は、歌手としては僕の先輩だ。彼女は僕がレコードデビューする数カ月前の昭和32年の秋、キングレコードから「クワイ河マーチ」でデビューしているからだ。たしか、まだ小学生だったと思う。

それから、伊東ゆかりさんとナベプロ三人娘として売り出し、ヒット曲を



昭和43年1月

何曲も出している。

それでも、僕の前に現れた時は、20歳だった。ちょうど、有馬三恵子作詞、鈴木淳作曲の「小指の想い出」が大ヒットしたあとで、次に僕にお鉢が回ってきたから責任が重大だった。しかも、聞いた話だと、「小指の想い出」があれだけヒットしたにもかかわらず、ゆかりさんは「こんな歌、嫌いです」と言っただけだから、大変だ。

それでも、僕はいいい曲を書けるような気がしていた。なぜなら、あずかっていた歌詞がよかったからである。作詞したのは、ズズこと、安井かずみさん。彼女の詞は、実に乙女の気持ちをやさしく表現してくれている。

雨の夜、大好きな彼と相合傘で歩く若い女性。傘から転げ落ちる雨のしずくが肩にかかるけれど、そんなしずくでもうれしいという女心を見事に詞にしてあった。こういう詞は、女性でなければ書けない。

（よし、この詞に合うステキなメロディをゆつくり考えよう）と思っていた矢先、ゆかりさんのマネージャーと音楽出版の人が飛んできて、「明日までに曲を書いてください」と言う。そして、「書けますよ、書けますよ」と僕の家風呂に先に入ってしまうのだから、始末が悪い。できるまで、僕を寝かさないとつもりなのだろう。

マネージャーが風呂に入っている間に、僕は、歌詞を見ながら、ボロンボロンとギターを奏でていた。すると、どうだろう。それまで、何も浮かばなかったメロディがどんどん浮かんできたのだ。

安井さんの詞に合わせて、一行一行、メロディが次々と生まれてきた。こういう時は、いい歌ができるものだ。

僕は、風呂から上がったマネージャーに歌って聞かせた。

「いいね、これはイケる！」

勝手なものだ。喜んで、僕がギターを弾きながら歌ったテープを持って、うれしそうに引きあげていった。

メロディは翌日、編曲家の森岡賢一郎さんの手に渡り、見事なイントロとアレンジが出来上がった。そして、レコーディング。実に早い仕上がりだった。

ラブソングを歌いこなす20歳

こうして、伊東ゆかりさんが歌うレコーディングがはじまった。
イントロが流れ、ゆかりさんが歌い出した。その瞬間、僕は、ゆかりさんのあまりの

歌のうまさに舌を巻いた。20歳で、これほどラブソングが歌えるとは思っていなかった。正直、昔のイメージがあったので、もつと幼いかと思っていたのだ。

素晴らしい。第一、歌っている瞳が、すでに恋をしている。

やはり、歌は気持ちだ。いかに歌詞の内容を理解して歌えるか、そこにすべてがかかっている。

ゆかりさんの歌を聞いているだけで、ゆかりさんの隣りに彼女が大好きな男性がいるような気がしたし、その男性がうらやましく思えたりした。これが、歌唱力だ。歌を通して、聞く側に1番から3番までのわずか10数行の物語を見せてくれる。それがプロの歌手なのだ。

もちろん、そのためには、歌う側がその世界に入り込んでいなければ、聞く側には物語は見えてこない。

伊東ゆかりさんは、もう完全に歌の主人公になりきっていた。作詞した安井かずみさんや、作曲した僕の手を離れて、歌は確実に歌手伊東ゆかりさんの世界になっているし、それが、必ず、聞く人に伝わっていくと確信させられた。

そして、見事にこの歌は80万枚を超す大ヒット曲となった。

この歌をカラオケで歌う時は、ぜひ、イントロがはじまった瞬間から、決して照れることなく、恋をしていた頃の自分になりきってほしい。

まず、歌い出しの「肩をぬらす」という部分を考えてみよう。普通、「肩をぬらす」のは、雨か雪だ。それが、雨や雪でなく、「恋のしずく」だということに、意識をしてほしいのだ。恋をした女性が、うつとりとしている気持ち。ここをうまく表現できると、この歌は上手に歌える。なぜなら、「恋のしずく」だもの、「濡れたままでもいいの」ということになるし、「このまま歩きたい」のもわかるだろう。

「肩をぬらす」は静かに、そして「恋のしずく」の「恋」をたっぷりと愛情を込めて。

「恋」を濃い目に歌うこと。あとは、あわてないでメロディに乗って歌えば大丈夫。

好きだった人、いま好きな男性を思い出しながら歌い出すと、いつの間にか、この物語の主人公になる。そして、気持ちよく歌えるにちがいない。

最後の「忘れないようにしたいの」は、地声では無理だと思うので、裏声できれいに。

銀河のロマンス

昭和
43

橋本淳作詞　すぎやまこういち作曲・編曲

ザ・タイガース歌（ポリドール）

歌より容姿のGSブーム

一度、渡辺プロの人から、僕はこんな話を聞いたことがある。

京都に「サリーとプレイボーイズ」という若い人気バンドがあった。メンバーは、岸部修三（サリー）、加橋かつみ（トッポ）、森本太郎（タロー）、瞳みのる（ピー）で、彼らはビートルズやローリング・ストーンズを目標にがんばっていた。平均18歳で、みんなビジュアル的にも「カッコいい」若者たちだった。

そこに、沢田研二（ジュリー）が参加し、バンド名は「ファニーズ」になった。しかし、彼らはまさか、のちにGSブームを牽引するザ・タイガースになるとは思っていなかった。



昭和43年3月

そんなある日、内田裕也さんに会った。すると、意外なことに、内田さんは彼らに「僕の所属している渡辺プロに入らないか」と言った。スカウトされたのだ。

もちろん、5人に異存があるわけがない。

こうして、昭和41年11月、フジテレビの「ヒットパレード」に出演するために、上京した。その時、「ファニーズじゃ売れない。関西から来たのだから、タイガースだ」と作曲家のすぎやまこういちさんに名前を決められたという。真偽のほどはわからないが、とにかく、最初のテレビ出演から、ザ・タイガースになった。

これが、どうもザ・タイガースの誕生秘話らしい。

これでわかるのだが、GSブームと言うのは、自然発生的に生まれたものではないということだ。ビートルズが来日したのが、昭和41年6月。日本武道館を使つての初のコンサートだった。そして、ジャッキー吉川とブルー・コメッツが「ブルー・シャトウ」でレコード大賞を受賞したのが昭和42年だとすれば、自ずと「いずれ近いうちにGSブームがやってくる」と考えるのが普通だろう。

その時のために、各レコード会社、プロダクションは、音楽的にもさることながら、ビジュアル的に「若い女性」に受けるグルーヴ探しが全国で行われていた。そして、渡

辺プロが、まず京都から連れてきたのが、ザ・タイガースではなかったのかと思われる。したがって、それまで、自分たちが作詞作曲し、演奏するブルー・コメッツと対照的に、ザ・タイガースの歌は、そのほとんどが橋本淳、なかにし礼、山上路夫、すぎやまこういち、村井邦彦ら、売れっ子作詞家、作曲家によって作られた曲である。さらに、ステージ衣装、決めポーズなどでファンを魅了したとも言える。

渡辺プロのこの売り出し作戦は見事にあたり、ザ・タイガースは瞬く間に、GSブルーの先頭をひた走る人気グループになったのだ。そして、時代は、第二、第三のザ・タイガース探しに移るのである。

この「銀河のロマンス」は、ジュリーが中心に、そして「花の首飾り」はトップがメインの両A面で、オリコンチャートを7週にわたり1位を独占した。

音楽的には、ソロになった後の沢田研二君の項で詳述しよう。

エメラルドの伝説

昭和43

なかにし礼作詞 村井邦彦作曲 川口真編曲

ザ・テンプターズ歌（ライリッパス）

GS最高の伝説的バンド

ブルー・コメッツがレコード大賞を受賞した昭和42年から翌43年にかけて、空前絶後のGSブームが起きた。

その2年間に活躍した主なバンド名とその年のヒット曲を挙げると、いまさらながら驚く。

先のザ・タイガースのデビューは、昭和42年2月「僕のマリー」でデビューしている。そして、「シーサイド・パウンド」、「モナリザの微笑」、「君だけに愛を」とこの年だけで大ヒットを連発した。以下は、その他GSの昭和42年のヒット曲だ。

ブルー・コメッツ「ブルーシャトウ」、ザ・スパイダーズ「風が泣いている」、ザ・ワイルドワンズ「夕陽と共に」、バニーズ「愛のリメンバー」、シャープ・ホークス「海へ



昭和43年6月

帰ろう」、ヴィレッジ・シンガーズ「バラ色の雲」、カーナビーツ「好きさ好きさ好きさ」、ジャガーズ「君に会いたい」、ザ・ゴールドデン・カップス「いとしのジザベル」。

そこへ、各社が新人をリリースした。モップス「朝まで待てない」、ランチャーズ「真冬の帰り道」、そして、ザ・テンプターズ「忘れ得ぬ君」だ。

翌43年には、オックス「スワンの涙」、ダーツ「ケメ子の歌」、パープルシャドウズ「小さなスナック」……。

この当時、GSの熱狂的ファンだった人は、このバンド名だけでもなつかしいだろうと思う。

こうしたなかで、「昭和歌謡」にザ・タイガース以外のGSのなかの1曲だけ挙げる とすれば、僕はザ・テンプターズの「エメラルドの伝説」を選びたいと思う。

ザ・テンプターズ——。

このバンド、最初から作られた狙いが他のバンドとちがう。

昭和42年、デビュー以来、破竹の勢いで躍進する渡辺プロのザ・タイガースに対抗して、田辺昭知さん率いるスパイダクションが、ザ・タイガースへの刺客として送り出したのが、このザ・テンプターズだった。

メンバーは、松崎由治、萩原健一、高久昇、田中俊夫、大口広司。彼らは、いわゆる優等生にはない、独特の陰を持った雰囲気と、GSにしては抜群のテクニクで、デビュー以来、女性ファンのみならず、男性ファンまでわしづかみにしたほどだった。特に、松崎君のテクニクは、いまでも伝説となっている。

ザ・テンプターズは、セカンド・シングル「神様お願い」で、萩原君がリードボーカルとなった。彼は、たっぷりのアクションで、会場を熱狂させ、日本のミック・ジャガーと呼ばれるようになった。

僕が彼らを認めるのは、デビュー曲「忘れ得ぬ君」も、2曲目の「神様お願い」もすべて自作自演、アレンジまでも自分たちでやったということだ。当時、彼らはまだ10代だったことを考えると、いかに、すごい能力だったことがわかるだろう。

そして、勝負の3曲目。彼らは自作自演路線を捨て、ジャケットも少女趣味のかわいい衣装を着て、この「エメラルドの伝説」で、ザ・タイガースに襲いかかったのだ。

これが特大のホームランとなり、萩原健一君は沢田研二君と肩を並べるトップ・アイドルへと上りつめたのだった。

しかし、かつてのロカビリーがそうであったように、GSブームも次第に翳りを見せ

はじめ、ザ・テンプターズもこの「ユメヲカネドの伝説」から3年半後の昭和40年1月解散する。奇しくも同じ1月に、ザ・タイガースは「さよなら公演」を行っている。

こうして、あれだけ日本中を席巻したGSブームは、わずかに、4年で終焉を迎えた。いま思えば、僕が人気絶頂だったロカビリー時代と同じ年数だった。

長崎は今日も雨だった

昭和44

永田貴子作詞 彩木雅夫作曲

内山田洋とクール・ファイブ歌 (RCA/ビクター)

ムード歌謡の新しい歴史がはじまった

あれだけすごい人気だったGSブームに少し翳りが見えはじめた昭和40年代半ば、意外なブームが歌謡界に巻き起こった。

それがいわゆるグループによる「ムード歌謡」だった。グループによる「ムード歌謡」の代表は、昭和30年代のマヒナスターズだが、ここに来て、急に各地からそうした歌謡グループが芸能界に現れたのだ。



昭和44年2月

たとえば、その頃のグループ名とヒット曲を挙げると、思い出す人もいるのではないだろうか。

秋庭豊とアローナイツ「中の島ブルース」、黒沢明とロス・プリモス「ラブユー東京」、沢ひろしとTOKYO99「愛のふれあい」、中井昭・高橋勝とコロラティノー「思案橋ブルース」、鶴岡雅義と東京ロマンチカ「小樽のひとよ」、敏いとうとハッピー&ブルー「星降る街角」、平和勝次とダークホース「宗右衛門町ブルース」、ロス・インディオス「コモエスタ赤坂」……。細かく言えば、ヒットした年はちがうが、どれも、ムード歌謡の名曲で、カラオケで歌ったことがある人も多いことだろう。

こうしたなかで、僕は内山田洋とクール・ファイブの「長崎は今日も雨だった」をこの「昭和歌謡」のムード歌謡の代表に入れようと思う。その理由は、やはり、前川清さんの抜群の歌唱力と音域だろう。

のちにソロになってしまふのだが、やはり僕はクール・ファイブ時代の彼の低音から高音へ伸びる声がいまだに耳に残っている。

この歌は、当時、長崎のグランドキャバレー「銀馬車」の専属バンドだった内山田洋とクール・ファイブの面々が、競合店「十二番館」の専属のコロラティノーが1年前に

「思案橋ブルース」でヒットしたのに対抗して、出したデビュー曲だ。いわば、長崎ダービーだ。そう言われれば、ヒット曲に繁華街や地名が入っていることが多いのも、まず、地元でヒットした証かもしれない。

ということは、この時代まで、大きな都市や港町の繁華街には、グランドキャバレーがあり、そこにはラテンから歌謡曲まで歌うグループがたくさんいたということだ。彼らのコーラスを聞きながら、長い裾のドレスの女性たちとダンスに興じるお客さんたちがいた時代、その象徴がこの歌だったのかもしれない。

ちなみに「長崎」は四文字で、しかも、異国情緒が感じられるので歌にしやすい。青江三奈さんの「長崎ブルース」はこの曲の発売の1年前、瀬川瑛子さんの「長崎の夜はむらさき」は、この曲の翌年のことで、春日八郎さんの「長崎の女」やコロラティノの「思案橋ブルース」まで入れば、この数年は長崎ブームだったわけである。

夜明けのスキヤット

昭和
44

山上路夫作詞　いずみたく作曲　渋谷毅編曲

由紀さおり歌（エキスプレス／東芝音工）

歌詞のない歌を歌って売れるわけがない

最近、ピンク・マルティーニとのコラボレーションで話題になり、この「夜明けのスキヤット」が世界で高評価を受けているのは、とてもうれしい。

ちなみに、この僕にも、イギリスのエースレコードから声が掛かり、僕の若い頃のロカビリーの音源を集めてCDとLPを発売することになった。ジャケットも、20歳そこそこの僕だ。

「極東の国、日本に、いまから50年も前にこんな歌を歌っていた素晴らしいアーティストがいた」というのが、イギリス側の狙いらしいが、由紀さおりさんの場合も最初は、ちよつと信じられないような、こんな気持ちだっただろうと想像する。まあ、僕の話は



昭和44年3月

またいつかするとして、「夜明けのスキヤット」の話をしよう。

さて、僕がこの「夜明けのスキヤット」を「昭和歌謡」の大切な一曲に選んだのは、この曲が、昭和40年代に入って、日本の音楽界が、いわゆるそれまでの常識にとらわれない、「なんでもあり」の時代に入ったという証拠のひとつだからだ。

昭和30年代だったら、歌詞のほとんどない、ただ「ルー」とか「ラー」で歌っている歌をレコードで発売するなんて、まったく考えられなかっただろう。それが発売されるやいなや、150万枚を超すミリオンセラーになったばかりか、さらにその40年後に世界で注目されるのだから、やはり、歌は「時代」を生きていくのだ。

由紀さんは、子供の頃から安田章子という童謡歌手としてデビューしていたが、歌手としてはまったくヒット曲に恵まれず、わずかにコマーシャル・ソングを歌うことで、からくもプロの歌手としての面目を保っていたようだった。

そんな折、TBSのラジオ番組のオープニング曲として、この曲を歌うことになった。歌うといっても、スキヤットだから、何の歌かもわからない。ただ、由紀さんの澄んだ美しい声に魅せられたリスナーから問い合わせが殺到したため、レコード化が進んだと言われている。

ちなみに、由紀さおりという芸名は、この「夜明けのスキヤット」で再デビューする際に、つけられた芸名で、着物の好きなお母さんが、結城紬ゆうきつむぎと紗を織るという意味で、結城紗織から、由紀さおりになったそうだ。

由紀さんの「夜明けのスキヤット」が流れていたこの年の10月、TBSテレビではお化け番組、ドリフターズの「全員集合」の第一回の放送が始まった。
そうか、それももう40年以上も前の話か。

第四章

昭和40年代後半

— 1970～1974

圭子の夢は夜ひらく

昭和
45

石坂まさを作詞 曾根幸明作曲 原田良一編曲

藤圭子歌 (RCA/ビクター)

命を捨てるより、みんなを励ましてほしかった

平成25年8月23日の藤圭子さんの死は、ショックだった。

なぜなら、彼女とは会えば必ず会話を交わしたし、僕には彼女も
 気を許して、娘の宇多田ヒカルさんの自慢話をしてくれていたから
 だ。

もちろん、この「圭子の夢は夜ひらく」にも思い出がある。

実は、この歌は僕に歌手の道を断念させ、作曲家の道を歩ませた歌でもあった。実際、
 僕はこの藤圭子さんのこの歌を聞いた時、「ああ、こんなすごい歌手が出てきた」と思
 ったのである。

僕が彼女に一目置いたのは、彼女の哀愁漂う歌声だった。自分の人生丸ごと、歌に託



昭和45年4月

すその生き様に（ああ、この子にはかなわない）と思ったのだ。

昔、番組でいっしょになった時も、出演者が控室でワイワイやっているのに、ひとりでボツンとしていた。また、スタッフがキャンペーンに走り回ると、彼女は「駄、そんなにまでして、レコードを売りたいくない」と言った。

その性格、生き様が彼女の持ち味になり、彼女向きの歌が作られては、また、ヒットした。

そんな暗い印象の彼女が、うれしそうに笑った顔を見たことがあった。

それは彼女が僕のラジオ番組に出演してくれた時のことだった。その時、スタジオで彼女は満面の笑みで、「うちの娘の歌を聴いてみて。すごく才能があるの」と言った。

そのことを覚えていた僕は、7、8年前に何かのパーティーで彼女と会った時、「宇多田ヒカルちゃん、すごいね」と言ったら、「ハイ」とうれしそうに言って、そのまま会場から去っていつてしまった。「ねえ、先生、私の言った通りでしょ」と言わないのが、藤圭子さんなのだ。

いま思えば、彼女が、もっと上手に自分の感情をコントロールできていたら、僕は彼女が歌謡界にカムバックもあり得たし、僕も及ばずながら応援しただろう。

最近は、中高年が昔の歌謡曲をカラオケで歌うなど、「昭和歌謡」が戻ってきた。こんな時に、藤さんがカムバックしたら、新たなヒット曲も生まれそうな気がする。

そして、藤さんと同じような境遇の人、あるいはもっと不幸な人を、藤さんの新曲で励ましてほしかったと思っている。

なお、曾根幸明さんが作ったこの曲が、「夢は夜ひらく」のタイトルで世に出たのは昭和41年、園まりさんが歌ったバージョンで、歌詞も甘くムーディーなもの。五木寛之さんに「怨歌」とまで言わしめたこの歌とはだいぶちがう。

この「圭子の夢は夜ひらく」は、「新宿の女」でデビューした藤圭子さんの3枚目のシングルで、第1回日本歌謡大賞を受賞した。その後も多くの歌手によって歌詞を変えてカバーされ、カバー数は日本記録とも言われている。

誰もいない海

昭和45

山口洋子作詞 内藤法美作曲 森岡賢一郎編曲

トワ・エ・モワ歌 (東芝音工)

なつかしい思い出の二人

この「誰もいない海」を好きな女性が多い。

この歌は、あれだけ賑わった夏が終わり、いまはなんと淋しい秋の海だという失恋の歌だと思って歌っている人も多いだろうと思うが、それはちがう。

この曲が発売される前年、その時、学生たちによる東大安田講堂占拠事件があった。いまでは考えられないが、当時の学生たちは、本当に「革命が起こること」を信じ、警察に対し、命を懸けて戦った。東京新宿で機動隊と衝突したこともあった。

しかし、結局、国家権力によってすべてが制圧され、学生たちは激しい無力感と、嫌というほどの挫折感を味わった。



昭和45年11月

詩人の山口洋子（「よこはま・たそがれ」の作詞家とは同姓同名の別人）は、学生たちの立場に立って、「これからどう生きていたいんだ。もう、死にたい」という彼らのその時の気持ちを理解し、「どんなに傷ついても、何度も挫折しても、死なないで生きていきなさい」という強いメッセージをこの歌に託したと言われている。

いつの間にか、「学生運動」という言葉はなくなった。多くの学生によるデモ行進があったことなど、もはや、いまの学生には信じられないだろう。時代は、こうして移っていく。ただ、歌だけを残して。

そんな時代があったということと、自分たちの国の将来を真剣に考え、結局は妥協しなければ生きていけないことを知ってしまった学生たちの思いを抱きながら、今度、この歌を聞いたり、歌ったりしてみると、彼女の祈りにも似た歌詞が理解できるかもしれない。

歌っているトワ・エ・モアは、この前年「或る日突然」でデビュー。その後、「空よ」、「初恋の人に似てる」などヒットを飛ばした山室英美子さんと芥川澄夫君のコンビ。

実は、僕は彼らをよく知っている。

あれは、僕が「霧の摩周湖」を書いた頃だったから、昭和42年頃だったと思う。

東京の銀座に渡辺プロが若い歌手を養成するための音楽レストラン「メイツ」を開店させた。そして、僕は渡辺プロの社長に誘われ、僕はそこで新人を育てる仕事をしたことがあったのである。マスコミ関係者を招いてオーディションをしたり、ステージの司会をしたり。

実は、山室英美子さんも芥川澄夫君も、その「メイツ」から別々にデビューし、やがて、二人が組んで「トワ・エ・モワ」が生まれたと聞いた。

この歌を聞くと、まだ30代、作曲家に成り立てだったその時の僕の若い頃が思い出されて、胸が熱くなる。

よこはま・たそがれ

昭和46

山口洋子作詞 平澤昌男作曲・編曲

五木ひろし歌 (徳間音楽工業)

歌がうまいだけの歌家の人だったかもしれない

昭和45年は、いまだ昭和30年代の音楽界の出来事があった年だった。



昭和45年2月

大阪では、大阪万博が開かれ、全国から多くの人が集まった。かと思うと、万博開幕1週間後に、「よど号」ハイジャック事件が起こっている。その一方で、女性誌「アンアン」が創刊されたり、三島由紀夫さんが市ヶ谷の自衛隊を占拠したりしていた。

そんな混沌とした時代に、ユニークなテレビ番組が生まれた。日本テレビ系で放送された「全日本歌謡選手権」という番組であった。

これはプロもアマも参加できる歌手のオーディション番組だったが、実質は、ヒット曲に恵まれないプロ歌手の再起を賭ける登竜門だった。

毎週、厳しい予選を勝ち抜いてきた5、6人の挑戦者が出場、5人の審査員ひとり20点の持ち点で百点満点中70点以上とればその週を勝ち抜け、10週勝ち抜けばグラントチヤンピオンとして、芸能界で再デビューができるという番組だった。

僕は、淡谷のり子さん、船村徹さん、山口洋子さんらといっしょにその番組の審査員として出演していた。

ある日、僕がスタジオに行くと、ひとりの出場者がリハーサルを兼ねたカメラテストを受けていた。

(ほう、かなり上手だな)

そう思って、別の打ち合わせを終え、食事でもしようとしてレストランに行くつもりで、一組の席なら」と言われ、先のカメラテストを受けていた青年といっしょの席になった。

「あつ、平尾さん、僕、三谷謙と申します。これでも、プロ歌手なんです。今日、審査、よろしく願います」

この礼儀正しい青年が、のちの五木ひろし君である。

彼は福井県出身。少年の頃から歌手を目指し、上原げんとさんに師事し、日本コロムビア主催の「歌うミスター平凡」に選ばれて、松山まさるの名前でデビューしたが、まったく売れず、その後、レコード会社を変え、一条英一、三谷謙と名前を変えたそうだが、それでも、鳴かず飛ばず、最後のチャンスでこの全日本歌謡選手権に予選から出場してきたという。これでダメなら、実家に帰って、農業をやると言っていた。

僕は食事をしながら、彼の熱意に感動したと同時に、芸能界の裏も見たような気がする。どの世界でもそうだが、実力はあったほうがいいに決まっているが、まず「売れてナンボ」である。歌手で言えば、レコードを出せるプロ歌手になっても、あるいは、どんなに歌がうまくても、ヒット曲に恵まれなければ、消えていくしかないのだ。ある意味、運も左右するかもしれない。

実際、その日も、僕の目の前にレコードを何枚も出したプロの歌手がいた。でも、僕は彼を知らないというより、見たこともない。

「ごめん、僕は君を知らないんだけど」

「当然です」

僕は、この時、作曲家の責任を痛烈に感じた。ヒット曲がないのは、彼だけのせいではないからだ。

幸い、三谷謙君は予想通り10週勝ち抜いた。だが、決して順調ではなかった。1週目から審査員のひとりから「新人としてはフレッシュさがない。型にはまりすぎている。いままでの曲物をまとめて田舎に帰りなさい」と酷評されたし、3週目、4週目あたりは落ちていくかもしれない、いわば合否のすれすれだった。

もし、あの時、三谷君がどこかの週で落ちていたら、歌手の木ひろしはこの世にいない、いまここ、福井県の農家に、歌のものをこく上手なおじさんがいたかもしれない。素晴らしい歌手なのに。

あの拳は、キックボクシングの型

三谷謙君が、日本を代表する大歌手、五木ひろしになれたのは、もちろん、本人の努力もさることながら、作詞家であり直木賞作家でもあり、当時、銀座のクラブ「藤」のママだった山口洋子さんのおかげである。

僕と同じく、「全日本歌謡選手権」の審査員だった山口さんは、三谷君の才能を見抜き、10週勝ち抜くと、彼をまずあるプロダクションに所属させた。そのプロダクションは、野口プロ。当時、大流行したキックボクシングジムで、沢村忠というチャンピオンを抱えていたプロである。もちろん、メインはキックボクシングだから、明らかに煙草いだった。だが、彼女には作戦があつたにちがいない。山口さんは、沢村選手の歌の作詞をしたことで野口社長と知り合つたらしい。

所属先が決まると、彼女は早速、彼の再デビューのための作詞をはじめた。

ある日、僕が山口さんに呼ばれて銀座の喫茶店に行くと、彼女から三谷君の再デビューのために書いた詞を数編渡されて、その場で見た。

ところが、みんなそれぞれいい詞なのだが、特にこれという、なかなか僕のイメージ

が湧くような詞がなかった。僕は、曲作りをする時に、ある種のカンが働く。詞が先にある場合には、その詞の世界を理解できた時に、ずっとメロディが生まれてくる。これは、言葉でいうのがむずかしいが、言葉が僕の脳の一部を刺激し、それによって、メロディが引き出されるのかもしれない。

もう一度読み返した時、一編の詞がひっかかった。そのタイトルは「あの人は行ってしまった」と書かれていた。

そこには、「よこはま」からはじまる、4文字、4文字、7文字の繰り返し、の単語が並んでいるだけだった。

僕はじつと読んだ。すると、不思議な感覚に陥った。最初の4文字と次の4文字の間に、時間の経過が見えてきた。

(待てよ、そうすると、これ、思い出なんだ)

そして、その言葉が洋画のワンシーンのように思え、ひとつひとつの単語を映像に浮かべながら口に出してみた。すると、どうだ。単語と単語の間に、見事なリズムがあることがわかった。4文字 イチ、ニー、4文字、イチ、ニー、7文字。また、4文字、イチ、ニー、4文字、イチ、ニー、7文字……。

すると、自然に次のメロディが浮かんだ。

こうして、「よこはま・たそがれ」を持って帰り、曲を完成させた。

山口さんは、その間に、作家の五木寛之さんをお願いして、五木という苗字を姓の名前をやさしくして、五木ひろしと命名。『谷君が所属していた徳間音楽の徳間社長に連絡をとり、「おたくにすごい歌手が埋もれていたのよ。再デビューさせるから力を貸して!」と言ったというのだから、いまさらながら、すごい熱意だった。

おかげで、この「よこはま・たそがれ」は大ヒット。オリコン・チャート第1位の第1位を獲得した。以後、彼は順調にヒット曲を飛ばし、やがて、「復讐」でレコード大賞も受賞。こうして、組曲のトリを取る超一流歌手になっていったのである。

ちなみに五木君が歌う時、拳を握るのは、恩人である野口博子のキック中タシンの型であり、「ボクシングも歌も、コブシが肝心です!」と言っている。

また逢う日まで

昭和
46

阿久悠作詞 筒美京平作曲・編曲

尾崎紀世彦歌 (フィリップス)

「うた」とは何か

僕は最近、「うた先案内人」と称して、会場に集まってもらった人にある時はひとりで、またはふたりで、また時には全員で歌って楽しむコンサートを実施している。

これは、「うた」というものが、決して歌手だけのものではなく、「うた」を愛するみんなのものだと思うからだ。

そう考えるには、もちろん、僕なりの理由がある。

そもそも、「うた」にはいろいろな漢字が使われている。歌、唄、唱、詩、謡、詠、謳。童謡や民謡は、なぜ「謡」の字を使うのか。長唄、小唄、端唄などは、なぜ「唄」なのだろうか。声を合わせて歌う時はなぜ、合唱なのか。もちろん、メロディがなくても、



昭和46年3月

和歌、短歌は「歌」の字を使う。

僕は、「うた」の語源は、「うったえる」ことから来ているのではないかと思うのだ。自分の伝えたいことを人に訴える、それが「うた」なのだ。

だとしたら、「うた」は誰でも「うたつて」いいことになる。

「うた先案内人」をしていると、実に、楽しいことがある。たとえば、そういうコンサートをやると、この尾崎紀世彦君の「また逢う日まで」を歌う若者が出てくる。でも、どう考えてもこの名曲が大ヒットし、日本レコード大賞と日本歌謡大賞を同時にとった昭和46年には、まだ生まれてもいない。それなのに、自分なりの歌唱法で、見事にこの歌を歌いこなすのだ。

ということは、この「また逢う日まで」という曲は、いまの時代にも、その訴えたいことが生きているということだ。まさに「うた」なのだ。

もちろん、この曲にかぎらない。この「昭和歌謡」に僕が選んだ曲以外にも、たくさん人の歌が残っている。ということは、昭和という時代は、それぞれの歌が多くの人々の心に訴えた時代だったにちがいない。みんなが歌えるということとは、それだけ訴える力が強かったということなのだ。

近年はもしかして一部の人たちにだけ訴える歌が多く、それらの歌がみんなの心に訴えていないことが多くなったのかもしれない。もう一度、「うた」とは何かを考える時代に入ったような気がする。

前置きが長くなった。このビッグ・ヒットを出した尾崎紀世彦君は、ジミー時田とマウンテン・ブレイボーイズを経て、GSのザ・ワンダースを結成したが売れず、昭和43年、ソロとなって、「別れの夜明け」でデビュー。2枚目のこの曲がミリオンセラーとなった。

しかし、残念ながら、平成24年5月、69歳で亡くなった。若すぎる死だった。

洋楽の資料室 筒美京平さん

いい機会だから、「また逢う日まで」を作曲した筒美京平さんのことも書いておきたい。彼は、僕より三つ下の昭和15年東京生まれ。小学校から大学まで青山学院という「お坊っちゃん」である。

幼稚園の頃からピアノを弾き、大学時代はジャズに打ち込み、日本グラモフォンとい

うところは、その名の通り、クラシックからジャズまで、あらゆる洋楽のレコードを整理し、保存するところである。

だから、もともとの音楽好きが高じて、クラシックから世界のポップスまで、とにかくありとあらゆる洋楽を何万、いや、何十万曲と聴きまくったにちがいない。

だから、とにかく、彼の頭のなかには名曲がいっぱい詰まっっていて、「あれ、何だったっけ」とイントロをちよつと言うだけで、曲名をすべて教えてくれたという。

その彼が作曲家に転向したのだから、いくらでもいいメロディが浮かんでくるだろう。それに、さらにすごいのは編曲能力である。僕は作曲はするが、アイデアは出しても編曲はしない。編曲というのは、一般的には、レコーディングや演奏の際に各楽器別に譜面を作成することだが、僕は「作曲家のつくったメロディに色をつけたり、化粧をすること」だと思っている。その意味でも、「洋楽の資料室」は材料が豊富だから、編曲も見事である。

「また逢う日まで」のイントロを思い出してみると、筒美京平さんの編曲の才能のすごさも想像がつくだろう。

だから、彼が出てきた時は、「すごい作曲家が出てきたものだな」と思ったことを覚

えている。僕は、作曲術も学ぶことなく、ただ、自分で歌うためという理由で作曲家になったのだから、作曲家になった動機があまりにもちがいきるので驚いたのだ。ここには入れなかったが、いしだあゆみさんの「ブルーライト・ヨコハマ」やジューデイ・オングの「魅せられて」などのメロディラインの見事さも、まさに、「洋楽の資料室」簡美京平さんの面目躍如といったところだろう。

17歳

昭和46

有馬三恵子作詞 簡美京平作曲・編曲

南沙織歌 (CBSソニー)

アイドル・ポップスの象徴シンシア

その簡美京平さんが、ある日、当時、沖縄でアマチュア・タレントとして活躍していた少女を上京させ、日音のレッスン室で自らピアノを弾いて、オーディションをしたのが、内間明美ちゃん、のちの南沙織さんだ。



昭和46年6月

その時、彼女は、当時ヒットしていたリン・アンダーソンの「ローズ・ガーデン」を歌ったという。

その声を聞いて、即、デビューが決定し、タイトルは発売後1カ月で17歳を迎えることから「17歳」と決定し、作詞を「小指の想い出」の有馬三恵子さんをお願いしたそう
だ。

すぐデビューが決まっていたということは、レコード会社も、それだけすでに準備万端整っていたということだ。沖縄系アイドル売り出しのための、オーディションという名のお披露目だったかもしれない。それぐらい、南沙織さんはルックスもよく、いかにも沖縄系の少女らしく、性格も明るく、誰にでも愛される。もちろん、歌のリズム感も天性のものだっただろうと思う。

筒美さんの狙いは、爽やかなアメリカン・ポップス。筒美さんの特徴は、ものすごく素晴らしいイントロだ。そのイントロからはじまって、歌しやすいメロディが続く。しかも、歌いやすいように、歌いやすいように、曲が展開する。僕だって、彼の曲で歌いたいくらいだ。

だから、この「17歳」もイントロを聴いただけで、「ああ、かっこいい曲だな」と僕

も思ったのだから、南沙織さんもさぞ乗って歌っただろうと思う。また、筒美さんの特徴であるアウトドアの作品も、この曲のなかによく出ている。とにかく、爽やかで、明るい。それも、沖縄出身の南沙織さんには合っていたのだと思う。

音楽的な特徴を言えば、この「17歳」の最初の3行のメロディの素晴らしさ。そして、それに続くサビの部分の転調も、これまでにない「カッコよさ」だった。この構成は、それまでの和製ポップスにも、GSの曲にもなかった、いわゆる「想定外」の展開だったのである。

僕の予想通り、これが、見事にシンシアの張りのある声質とマッチし、大ヒット。そして、この曲に代表されるリズムとメロディは以後、天地真理や麻丘めぐみ、アグネス・チャン、山口百恵へと続くアイドル・ポップスが流行するきっかけとなった。

こうして、南沙織、小柳ルミ子、天地真理の三人娘の時代がはじまったのである。

南沙織さんは、米軍勤務のフィリピン男性と日本人女性の間に生まれたハーフだが、別の角度から見ても、彼女が沖縄人たちの音楽のセンスのよさを「昭和歌謡」の世界に伝えた功績は大きい。

彼女がデビューして2年後に、フィンガー5がデビュー。それがやがて、安室奈美恵、

SPEED、夏川りみという沖縄パワーにつながっていくことになった。
 ちなみに、この年、昭和46年10月3日、日本テレビで「スター誕生！」の第1回が放送されている。この番組からはアイドルが次々と誕生したが、歌手でアイドルと呼ばれた先がけは南沙織さんだったと思う。

当時の南沙織さんは、のちに「スター誕生！」から出てくるどのアイドルよりもかわいかった。その意味でも、この歌は、テレビのなかで歌っている歌手に対して「かわいいね」という評価が下されるアイドル時代の幕開けの歌だったかもしれない。

瀬戸の花嫁

昭和47

山上路夫作詞 平尾昌晃作曲 森岡賢一郎編曲

小柳ルミ子歌 (ワーナー・パイオニア)

ルミ子は「結婚なんかしたくない！」と言った

僕は歌手、ことに新人の曲を作る時、できるだけその人の人間性をつかもうと心がける。そのために、食事に誘ったり、喫茶店で話



昭和47年4月

をしたりして、相手を観察する。でないと、その歌手にぴったりのメロディが作れないのだ。不器用かもしれないが、デビュー曲は特に、その歌手にふさわしい曲にしたいからだ。

小柳ルミ子さんの時も同じだった。デビュー曲を頼まれた時も、よく話をしたり、いっしょにディスコで踊ったりもした。

彼女は宝塚音楽学校を首席で卒業している。それも、女優になるためではなく、歌手になりたくて勉強したと言っていた。当時は、たしかNHKの朝ドラの「虹」に出演していたように思う。だから、最初は女優が歌うのかと思った。

実際、彼女の歌を聞いてみると、魅力的な声だった。艶があり、ことに高音が素晴らしい。「売れる声」の持ち主だった。

その時、僕は、彼女のなかになぜか日本の情緒を感じとった。日本情緒と言ってもお座敷とか着物とかではなく、なつかしい日本の風景が感じられる、大人の童謡のようなものが作れないかと思ったのだ。日本人のものと持つている心象風景と言ったほうが近いかもしれない。それを彼女に歌ってもらいたい、と思ったのだ。

僕は早速、曲作りに入った。作詞する安井かずみさんと相談のうえ、歌のタイトルは

「わたしの城下町」に決まっていた。城下町を舞台にした、大人の童謡。僕の頭のなかに次々と童謡的なメロディが浮かんできた。

そのメロディに、安井さんは詞をつけた。まず、曲があつて、それに詞をつける。いわゆる「はめ込み」というやり方だ。

安井さんの友人の女優、加賀まり子さんがその詞を見て、「あんた、何よ、『わたしの城下町』って。お殿様じゃあるまいし」と笑ったそうだが、言われてみるとたしかにそうかもしれない。

こうして、ルミ子さんのデビュー曲「わたしの城下町」が完成し、ヒットした。

続いて、第2弾は「お祭りの夜」、これも51万枚のヒット。第3弾は「雪あかりの町」。作詞が安井かずみさんから山上路夫さんに代わったが、山上さんが先に詞を書き、僕がその詞に合わせて曲をつくる以外に、大人の童謡という基本的な路線は変わらなかった。それからしばらくして、ルミ子さんのアルバムをレコーディングしていた時、予定より早くレコーディングが終わったので、ルミ子さんを囲んでコーヒーを飲みながら雑談になった。彼女がまだ19歳の時だったと思う。

「ルミ子、君は何歳でお嫁に行きたいと思う?」

誰かが何気なく彼女に聞いた。すると彼女は、毅然としてこう言った。

「私はお嫁に行きません。私は歌手になるために東京に出てきたんです。私から歌をとつたら何も残りません。歌は一生歌っていききたいんです。だから、結婚はしません！」僕たちは、彼女のあまりの剣幕にただ呆然とするだけだった。

でも、実は、彼女のこの発言で「瀬戸の花嫁」が生まれたのである。

こんな方法で、歌ができるのか？

結局、その晩は「ルミ子は結婚しないんだってよ」ということで解散になった。

そして、いよいよ第4弾の企画に入った時、その時のメンバーがこう言ったのだ。

「ルミ子が結婚しないんだたらさ、歌で嫁にやらない？」

たしかに、それはいいアイデアだ。みんな、「おもしろい」と言い出したが、まだ19で若すぎるとマネージャーは反対した。しかし、多勢に無勢。「昔は15ぐらいで嫁に行つたんだ」と押し切って、ルミ子の花嫁路線が決まった。

その会議には、山上路夫さんがいなかったたので、また別の機会に集まり、山上さんにこんな説明をしたことをよく覚えている。

「ガミさんね、都会の花嫁はダメよ。帝国ホテルで結婚式なんかダメだからね。どこかさ、田舎のさ、ほら、あるじゃん、地方のきれいな娘がほくらいで嫁にいくって。でも、だからと言って、あんまり田舎はダメよ。かやぶき屋根とか、馬に乗ってお嫁入りとか、そういうんじゃないよ」

いま思えば、何を言いたかったのかよくわからないけれど、山上さんもわかったようになわらないような顔をしていた。

そして、1週間後に山上さんは、2編の詞を書いてきてくれた。ひとつは「峠の花嫁」、そしてもうひとつが「瀬戸の夕焼け」だった。

（うーん、峠の花嫁ねえ。隣村にお嫁に行くって、戦前の感じがして、ルミ子っぽくないなあ）

（瀬戸の夕焼けかあ、きれいな歌だけどな、なんか段々畑が見えたりとか、そういうの、ないの？ もうちょつと瀬戸内海を俯瞰して見ている感じがほしいね）

みんな説明不足のくせに、勝手なことを言っている。

そんな時、渡辺出版の人がこう言った。

「この二つ、合わせて、『瀬戸の花嫁』ってどう？」

「オーッ」

思わず歓声が上がった。そして、時間もないので、山上さんは「瀬戸の花嫁」で詞を書き、僕は「瀬戸の花嫁」というタイトルだけでメロディを作る。10日後に同時に見せ合って、あとから一致させようということになった。つまり、詞に合わせて曲を作るのでもなく、曲に合わせて詞をはめ込むわけでもない。同時進行、よいドン方式だ。

そして、10日後、事件は起きた。

ふたりで合わせたら、なんと、サビまでピツタンコだった。

山上さんは「瀬戸は日暮れて夕波小波」、僕のほうは「タタターン、タラタンターン、タラターンタタンタンタン」だもの。これには驚いた。こんなことは、きっとこれからもないと思う。むしろ、気持ち悪いくらいだった。

なぜ、一致したか。それは決して偶然ではないと僕は思う。山上さんのルミ子さんへの思いと僕の思いが完全に一致していたということだ。

こうして生まれた「瀬戸の花嫁」は昭和47年度の歌謡大賞を受賞し、売れ行きはなんと、75万枚に達した。

どうにもとまらない

昭和
47

阿久悠作詞 都倉俊一作曲・編曲

山本リンダ歌 (キャニオン)

アクション・グラマー時代の到来

南沙織、小柳ルミ子、天地真理の三人娘の登場によって、アイドルたちが次々とテレビの画面を独占していくなか、ビジュアル的にまた別のジャンルの歌手たちが現れた。

山本リンダ、欧陽菲菲、夏木マリ、安西マリ、ゴールデン・ハーフといった、歌って踊る歌手たちの登場である。歌とアクション、それにセクシーというこの流れは、やがて、ピンク・レディーへとつながっていく。

そのなかでも、特にここまで保たれてきた「昭和歌謡」に大きな衝撃を与えたのは、山本リンダさんだろう。

彼女はこの曲がデビュー曲ではない。昭和41年に舌足らずで歌う「こまっちゃうナ」



昭和47年6月

の大ヒットで一世を風靡しているのだが、キャニオンに移籍して、かわいいモデルからのイメージ・チェンジをはかった。それが、アクション・グラマーと呼ばれる、素晴らしい容姿で舞台狭しと踊るセクシー路線だった。

歌唱力とはかく、美貌とスタイルだけは十分ファンの心をつかめる山本リンダさんのイメチェン第2弾「どうにもとまらない」は、そのアクションとともに予想通り大ヒットした。

実際、阿久悠さんの詞もさることながら、都倉俊一君のメロディラインがすごい。パーカッションによるサンバのリズム、ビートの効いた音、頭にアクセントを持ってきたテンポ、さらに、それにスタイルのいい彼女のセクシーなダンスが相まって、見事なシヨウを見ているようだった。

山本リンダさんは、福岡県小倉生まれ。父は駐留米軍の軍人、母は日本人。少女モデルを経て、ミノルフォンでデビューしたが、この曲で彼女のイメージ・チェンジは大成功したというわけだ。

さすが、阿久・都倉コンビだと言わざるを得ない。

せんせい

昭和
47

阿久悠作詞 遠藤実作曲 只野通泰編曲

森昌子歌 (徳間音工)

偉大なるオーディション番組「スター誕生」

南沙織、小柳ルミ子、天地真理たち、アイドル・ポップスが若い男の子たちを熱狂させていたのと、まさに同じ時期に、日本テレビ系で「スター誕生!」というお化け番組がはじまった。

この番組が他のオーディション番組と異なることは、毎週の合格者が集う決戦大会にあった。決戦大会と言っても、出場者の順位を決めるのではない。会場に集まったプロダクション、レコード会社の代表者がプラカードを持って、その場でスカウトするというシステムだった。

いわば、公開スカウト合戦だ。素晴らしい子には、何社からもプラカードが上がり、出演者は思わず涙する。それはそうだ。プラカードが上がった瞬間に、プロ歌手になれ

せんせい

森昌子



昭和47年7月

るのだから、感激するのも無理はない。司会の萩本欽一さんが盛り上げる。これがまた、視聴率を上げた。

そして、「昭和歌謡」にとって、この番組がもたらした影響ははかりしれない。なぜなら、この番組の決戦大会から、次々とアイドルが歌謡界に飛び込んできたからだ。森昌子、桜田淳子、山口百恵、黒木真由美、伊藤咲子、石野真子、清水由貴子、中森

明菜、岩崎宏美、ピンク・レディー、岡田有希子、柏原芳恵、小泉今日子……。

その決勝大会から、最初にデビューしたのが初代グラドルチャンピオン森昌子さんで、当時、中学二年生。そして、彼女のデビュー曲が「せんせい」だった。

いま、聞いても、この歌は、揺れる女学生の女心を実にうまく捉えた「昭和歌謡」の傑作で、発売まもなく大ヒットとなったのも当然だ。

逆に言えば、先生に淡い恋をした思い出を持つ女性たちが、この時代もいかにたくさんいたかと思わせる。阿久悠さんは、ここでも名プロデューサーの才能を発揮している。また、遠藤実さんも「高校三年生」をはじめ、学園ソングを多数作曲しているので、お手のものだったかもしれない。

この「せんせい」は、「スター誕生」という番組の存在と、地方の機械のない少女

の淡い初恋を見事に作品に仕上げた功績で、「昭和歌謡」に残したい作品である。

しかし、阿久さんや遠藤さんだけの力ではない。彼女の歌の実力もたいしたもので、翌年、森昌子さんは、史上最年少でNHK紅白歌合戦に出場している。

森さんの歌のうまさはその後、ますます磨きがかかり、のちに「哀しみ本線日本海」、「越冬つばめ」などのヒットを放つが、それは、「スター誕生！」初代グランドチャンピオンの歌唱力はいかに本物だったかを証明している。

喝采

昭和
47

吉田旺作詞 中村泰士作曲 高田弘編曲

ちあきなおみ歌 (日本コロムビア)

「昭和歌謡」を代表する名曲と名歌手

僕は、これまで何百人というプロ歌手の歌を聞いていて、「ああ、うまいなあ」と思った歌手を挙げればきりがない。

なかでもちあきなおみさんは、あの美空ひばりさんとも比較され



昭和47年9月

るほどの歌姫である。

しかし、聞けば、ちあきなおみさんの歌手生活は、そうした天才歌手にまったくふさわしくなかった。15歳、18歳で受けた二度のレコード会社のオーディションで、そのたびに「歌唱力が足りない」という理由で落とされているからである。いったい、誰が審査をしているんだと思いたくなるが、事実だからしかたがない。

しかし、諦めなかった彼女は、20歳でコロムビアのオーディションにようやく合格し、「雨に濡れた慕情」でデビュー、続いて「四つのお願い」を出したが、中ヒット止まり。

そんな時、ちあきさんは、作曲家・中村泰士さんと出会う。彼は、昔、僕と同じロカビリーの歌手で美川鯛二という名で歌っていたし、同じプロダクションにも所属していたのでよく知っている。その彼が、当時、友人佐川満男君のために書いた「今は幸せかい」で作詞・作曲に成功し、作曲家に転向していた。

そして、作詞家吉田旺さんと組んで、この「喝采」を完成させ、すでに歌唱力抜群だったちあきさんに歌わせると、発売3カ月後という最短でレコード大賞を受賞するという快挙をなしとげたのだ。

それにしても、歌詞、曲、そして歌手とすべて揃って素晴らしい曲は、そうめったに

ない。この「喝采」こそ、「昭和歌謡」を代表する名曲に僕が挙げるのは、そうした理由からである。

ただし、この歌を歌うのは、むずかしい。かなり難易度が高い。

特に「恋の歌歌う私に」、「黒いふちどりが」、「ありました」、「教会の前に」、「祈る言葉さえ」、「なくしてた」は、頭に一拍休符があると思って歌えるかどうか。さらに「あれは三年前」と「動きはじめた汽車に」、「ひとり飛び乗った」の頭は半拍空ける。ここがむずかしい。

まず、リズムを確実に覚えよう。

それに、この歌に挑戦するのであれば、歌手と言うよりも女優になったつもりで歌うといい。つまり、歌の主人公になりきることが必要だろう。

ちあきさん自身もこの歌に関して、こう言っている。

「映画の主演女優をやってもらいたいという話がきました。でも、お断りしました。私は歌手ですから、歌のなかで女優になりますから」

あなたも歌のなかの女優になった気分で、ぜひ、堂々と歌ってみたらどうだろう。

ひなげしの花

昭和
47

山上路夫作詞 森田公一作曲 馬飼野俊一編曲

アグネス・チャン歌 (ワーナー・パイオニア)

僕が最初に彼女をスカウトしたのに……

あれは、いつだったか。香港・台湾洋上セミナーというイベントに招待され、総勢16人で香港に着いた時のことだ。

「さあ、香港だ。うまい料理でも食べようか」と下船したら、「平尾さん、お客様がお待ちです」と言う。誰だと思ったら、アイリーンだった。アイリーンという子は、一時期、日本でレコードを何枚も出した香港の美人女優兼歌手で、素敵なスターだった。

(そうか、そう言えば、今度、香港に行くって、彼女に話したっけ)
彼女はそれを覚えていて、僕を迎えに来たのだ。
「平尾さん、妹が待っています。会ってください」



昭和47年11月

「えー！ いまから？」

僕は、みんなと食事に行きたかった。何しろ、香港の最初の夜で、ひよっとしたら最後の夜になるかもしれないのだから。しかし、アイリーンも必死だ。しかたがない。わざわざ迎えに来てくれたのに、無視するわけにはいかない。仲間には事情を説明して、先に行ってもらった。

僕がアイリーンに連れていかれたのは、小さなスタジオだった。そこで、「アグネス・ワールド」というテレビ番組をやっていた妹に会った。それがまだ14歳のアグネス・チヤンだった。

DJの真似事かと思ったのは、彼女のラジオ番組だった。

当時、アグネスは香港で歌手デビューを果たした人気アイドルだった。しかし、僕はそれも知らなかった。アグネスは「いま、日本から平尾昌晃さんがスタジオに来てくれました。ちよっとお話をうかがいましょう」などと言い、僕を出演させた。そんなこと、聞いていないと思いつつ、はじめてアグネスと言葉を交わした。まだ、14歳なのに、素晴らしいタレント性だった。

僕との対談のコーナーがあって、ふたりで「ユー・アー・マイ・サンシャイン」なん

か歌って、それが終わると、アグネスが歌い出した。たしか、カーペンターズの曲だったと思う。それを自分で広東語に訳して歌っていた。

僕は驚いた。なんという高音の伸びなのだろう。しかも発声も素晴らしく、いつの間にか、まだ少女の彼女に魅せられてしまっていた。なみなみならぬタレント性を僕は長年のカンで感じとったのだ。

番組の収録が終わり、アイリーンとアグネスと食事をした。そして彼女の屈託のない笑顔を見た時、「この子は、日本でもきつとアイドルになる」と確信した。

僕は旅行から帰ると、渡辺プロのスタッフに彼女の話をした。

こうして、彼女は来日をした。

だが、僕は「デビュー曲を絶対、僕に書かせてほしい」とまでは言っていなかった。だから、諸般の事情から、彼女のデビュー曲は、森田公一さんの作品になった。

ストレートの黒髪、愛くるしい瞳、ミニスカートの白いハイソックス……。そして、あの独特の高音で、たどたどしい日本語で歌い出すと、小学生から大学生まで、みんな彼女の虜とりこになっていった。

（僕の思っていた通りだ！）

デビュー曲は書けなかったが、しかし、アグネスは覚えてくれていた。「平尾さんは、私を日本に連れてきてくれた恩人です」
こうして僕は、アグネスのデビュー第2弾の作曲をできることになった。僕は一生懸命、彼女のために書いた。それが「草原の輝き」である。

情熱の嵐

昭和
48

たかたかし作詞 鈴木邦彦作曲 馬飼野康二編曲

西城秀樹歌 (RCA/ビクター)

親衛隊の登場

南沙織、小柳ルミ子、天地真理たち三人娘の笑顔がテレビの画面を独占した昭和47年頃、GSに替わる男性アイドルたちが次々と登場した。

「アイドル」という言葉が使われるようになったのは、この頃からだが、特に男性歌手がアイドルと呼ばれるようになったのは、この時代からだ。橋幸夫、舟木一夫、西郷輝



昭和48年5月

彦の「御三家」が人気絶頂の時代でも、彼らはアイドルではなかったし、ザ・タイガースやザ・テンプターズにも、マスコミは彼らをアイドルとは言わなかったからだ。

その男性アイドルの先駆けは、女の子かと思うかわいらしさと独特な声質の郷ひろみ君であった。僕も正直、「ずいぶんかわいらしい子が出てきたな」と思った。しかも、デビュー曲が「男の子女の子」だから驚いた。

そして、もっと驚いたのは、ファンの女の子たちの掛け声であった。リズムに合わせて、「ゴー、ゴー」と一糸乱れぬ合いの手を入れている。これは、それまでのファンにはなかったことだ。

僕らのロカビリー時代のステージでも、女性ファンはキャーキャー騒いだり、なかにはステージに上がってきて、僕たちを引き摺り下ろそうとした過激な女性たちもいたけれど、いっしょに歌を楽しむ光景はなかった。

間奏の間に声を合わせてリズムをとる。これはファンにとっては、きつと楽しいことだろうと思う。こうした応援団の彼女たちは、「親衛隊」と呼ばれるようになった。もちろん、女性アイドルにも男性の「親衛隊」が登場するのだが、僕が覚えているかぎり、「親衛隊」は女性ファンのほうが先だったような気がする。

郷ひろみ君に続いて出た西城秀樹君も、すぐに女性の親衛隊が一斉に叫び、
「ヒデキー」と声を合わせて掛け声をかける。さらには、彼の最大のヒット曲「Y
MCA」のカバー曲では、会場を埋め尽くしたファンが一斉に、「YMCA」に合わせ
て両腕を頭上に上げて、「Y」、「M」、「C」、「A」と腕文字を作るのだから、実に壮観
だった。これが、いまのサザンをはじめとするコンサート会場での盛り上がりにつな
がっている。

さらには、「青いリンゴ」、「私鉄沿線」の野口五郎の登場で、「新御三家」と呼ばれる
男性アイドル時代の登場を迎えたのだった。こうして、日本の芸能界はファンも会場で
応援して楽しむという一番華やかな時代を迎えるのであった。

この「新御三家」がデビューし、芸能界がにぎやかになりはじめた昭和47年11月、東
京・上野動物園でパンダが初公開。この日だけで1万5千人が入場し、大混乱になった。
若い子がアイドルを「追っかけ」、子供たちがパンダに夢中になる。大人たちもそれを
微笑む。日本人の誰もが「幸せだった」時期かもしれない。

郷ひろみ君に続いて出た西城秀樹君も、すぐに女性の親衛隊が「情熱の嵐」に合わせて、「ヒデキー」と声を合わせて掛け声をかける。さらには、彼の最大のヒット曲「YMCA」のカバー曲では、会場を埋め尽くしたファンが一斉に、「YMCA」に合わせて両腕を頭上に上げて、「Y」、「M」、「C」、「A」と腕文字を作るのだから、実に壮観だった。これが、いまのサザンをはじめとするコンサート会場での盛り上がりにつながるっている。

さらには、「青いリンゴ」、「私鉄沿線」の野口五郎の登場で、「新御三家」と呼ばれる男性アイドル時代の登場を迎えたのだった。こうして、日本の芸能界はファンも会場でも応援して楽しむという一番華やかな時代を迎えるのであった。

この「新御三家」がデビューし、芸能界がにぎやかになりはじめた昭和47年11月、東京・上野動物園でパンダが初公開。この日だけで1万5千人が入場し、大混乱になった。若い子がアイドルを「追っかけ」、子供たちがパンダに夢中になる。大人たちもそれを微笑む。日本人の誰もが「幸せだった」時期かもしれない。

神田川

昭和
48

喜多条忠作詞 南こうせつ作曲 木田高介編曲

かぐや姫歌 (日本クラウン)

フォークは社会的な歌から個人的な歌へ

僕は、この歌をはじめて聞いた時、「なんて日本人って素晴らしいんだろう」と思ったことを思い出す。

なぜ、素晴らしいかというと、それまでの歌謡曲は、いかにもプロの作詞家、作曲家によって、売るために作られた曲が多かったのに対し、まったく個人的な、しかも日常生活を細かく描いた私的ドラマを歌にしたことに、日本人は何も抵抗なく受け入れたからだ。

しかも、いまでは当たり前になった「同棲」をさらりと歌にしても、それが許されたことで、日本の歌謡界は一挙に大きな広がりを見せたような気がする。その意味でも、この「神田川」が「昭和歌謡」に果たした役割は大きいと僕は思う。



昭和48年9月

この歌は、文化放送に新曲のキャンペーンで来ていた南こうせつさんが、知り合いの放送作家喜多条忠さんに「何か書いてよ。僕が曲作るから」と依頼したところ、彼は家に帰り、若かった頃の苦い思い出を詞にして、電話で南さんに伝えたところ、すぐに歌ができたという伝説が残っている。

途中の、女性が外で待っている部分は、逆ではないかとよく言われるようだが、実際に喜多条さんにそんな体験があったとか。

南こうせつさんと僕は縁があつて、彼もまた五木ひろし君といっしょの「全日本歌謡選手権」に出場し、4週勝ち抜いたところで自分の意志で出場を取りやめているが、五木君が10週勝ち抜き、南こうせつさんに「よこはま・たそがれ」を聞かせたところ、「これはいい」と言ってくれたそうだ。

ちなみに、僕にも若く貧しいカップルの日常生活を描いた「中野・阿佐ヶ谷・高円寺」という歌がある。30年以上も前に作曲した歌だが、友人がいまもなお大切に聴いてくれている。

いつか、アレンジし直して、出してみたい。

この「神田川」を上手に歌うには、下準備が必要だ。

それは、「貴方はもう忘れたかしら」の「忘れたかしら」の部分のメロディをはずさないために、「タラタラタラ」で練習してみるのだ。「あなたはもうタラタラタラ」と何度も歌う。すると、「二人で行ったタラタラタラ」も歌える。同様に「いつも私がタラタラタラ」も、「小さな石鹸タラタラタラ」もできる。それを何回も繰り返してから、歌詞を乗せて歌うと譜面通り歌が乗っていく。そして、このメロディの大事な部分が「タラタラタラ」で作られていることがわかってくるにちがいない。

うそ

昭和
49

山口洋子作詞 平尾昌晃作曲 竜崎孝路編曲

中条きよし歌 (キャニオン)

実際に吸殻入れにあつた「折れた煙草」

高波明、渥美健という歌手をご存知だろうか。

どちらも、中条きよし君の売れなかった歌手時代の名前だ。まだ、



昭和49年1月

彼が20代前半のことである。念願の歌手デビューを果たしても、まったく無名のまま消えていった人たちはどれだけいるだろうか。放っておけば、彼もまたそのなかの一人だった。

その彼を救ったのが、五木君の項で書いた「全日本歌謡選手権」だった。

彼が番組に応募したのは、昭和48年のこと。彼は当時、歌手の道からいったん身を引き、新宿で小さなスナックを経営していたようだった。

彼は応募すると、見事に10週を勝ち抜いた。これで、五木君、八代亜紀さんに続くスター誕生だとみんなが評価した。

だが、僕は、正直、あまり彼を認めなかった。いや、歌の才能はたしかにあった。だが、その風貌があまりにもホスト的で、女性を虜にしてしまうジゴロのようであったからだった。

だから、審査員として講評を求められても「ムードコーラスのボーカルあたりが向いているんじゃないですか」などと軽くコメントしたことを覚えている。それでも、10週勝ち抜いたことで、八代さんと同じ六本木プロに所属が決まり、キャニオンレコードから、新芸名、中条きよしとして再々デビューが決まった。

そんなある日、六本木プロのマネージャーの藤井君が中条君を連れて、アポなしで僕のマンションにやってきた。藤井君は昔僕のところにいたことがあるのでよく知っている。

僕はその時、友人たちとマージャンに興じていた。

「悪いけどさ、いまはダメだから、また改めて来てよ」

僕はそう言っ、いったん帰ってもらったが、熱心な彼はその晩、再び現れた。もちろん、中条君も一緒である。

話を聞くと、中条君は思ったより苦勞人で男っぽい。人は見かけだけで判断してはいけない。そうとわかれれば、彼のためにひと肌脱がないわけにはいかない。なぜなら、僕も「全日本歌謡選手権」の審査員のひとり、彼の実力を十分に知っているのだから。

しかも、話を聞けば、山口洋子さんがすでに詞を書いているというではないか。五木君の場合と同じケースだ。聞けば、山口さんは中条君の持っている雰囲気に合わせて、女に貢がせる男への女の思いを詞にするという。それなら、おもしろい。その詞を見てみたい。

「よし、書こう」

僕がその場で約束すると、ふたりは喜んで帰っていった。

しばらくして、山口さんの詞が届いた。

いや、驚いた。「うそ」というタイトルで書かれた詞を読んで、銀座のママでなければ書けないと思い、山口さんに聞いた。

「これ、ママの体験談でしょ」

ところが、これは「姫」のホステスさんから相談された話がもとだったそう。

ある日、そのママが久しぶりに彼氏の家に行った。その彼女、煙草を吸うので、「ねえ、灰皿とってくれない」と灰皿を見ると、折れて赤い口紅のついた煙草があった。

「ねえ、これって、絶対、おかしいわよね」

山口洋子さんはそのママに、そう言われた体験を詞にしたのだそう。

僕は、「折れた煙草」は男の吸殻だとばかり思っていた。そして、マージャンで抜けている間に詞を声に出しながら、ギターを弾き、メロディにした。

マージャンを嗜む人ならわかりだろうが、半荘の間、抜けるのだから、作曲していた時間は2時間ほどだっただろうか。僕はこの「うそ」をギターで弾いて録音してみた。そのテープをかけると、あつと言う間に、マージャン仲間が「あーあ」ではじまるサビ

の部分のメロディを覚えて歌い出したのには驚いた。

(これは売れる！)

僕の直感通り、この年、中条きよし君の「うそ」は、154万枚という超大ヒットとなり、その年のレコード大賞大衆賞を受賞した。

マージャン仲間が、いま、できたてはやはやのメロディを聞いたばかりなのに、すぐにみんなで口ずさんだ事実は馬鹿にできない。やはり、「歌」は、誰もが歌いたくなる歌でなければいけないのだ、と確信した。

二人でお酒を

昭和
49

山上路夫作詞 平尾昌晃作曲 森岡賢一郎編曲

梓みちよ歌 (キング)

僕の言う通りに歌うか？

僕も歌手の時代に味わったことだが、どんな一流の歌手でもスラップと言うか、まったく売れなくなってしまう時期がある。



昭和49年3月

一度、人気の頂点を極めてしまうと、再起、いわゆるカムバックは非常に難しい。特に、若い時にいったん頂点を極めてしまうと、あとがむずかしい。

「こんにちは赤ちゃん」で大ヒットを飛ばし、レコード大賞を受賞した梓みちよも、人もそうしたひとりだった。特に、まだ10代で有名歌手の仲間入りをしてしまったのだから、そのあとが大変だったのだ。

本人は、どんどん「いい女」になっていく。だが、ヒット曲がない。女性がより美しくなっていく過程で、いつまでも「こんにちは赤ちゃん」では生きていけないのが、歌謡界なのだ。

そうしたなかで、昭和46年に発売になった僕の作曲による「渚のセニョリーナ」は、彼女への再起のための第一歩だった。しかし、それから2年、まったく鳴かず飛ばず。そのうち、彼女の新曲は1曲も出なくなってしまった。これも、芸能界にはよくある話だ。

新曲がなければ、話題がない。話題がなければ仕事がない。仕事がないから歌えない……。こうして、消えていった歌手がどれだけいるだろうか。梓みちよさんも、そうした負のスパイラルに陥ってしまっていた。

そんなある日、渡辺プロから「梓みちよがコンサートについて悩んでいるので、ふたりでいっしょにやって、アドバイスをしてあげてもらえませんか」という依頼を受けた。コンサートと言ったって1回ではない。全国各地をまわるコンサートツアーだ。

「わかった。でも、しばらく彼女の歌を聞いていないから、一度聞いてみる」
そう答えた、彼女のデイナーショーに行ってみた。

つまらない。声もいいし、もちろん、スタイルもいいし、しゃべりもうまい。だけど、お客さんが知っている歌がない。彼女が得意になって歌うのは、聞いたことのないシャンソンばかり。ようやく最後に「**こんにちは赤ちゃん**」を1番だけ歌って終わりだった。その時、僕は思ったのだ。彼女がシャンソンを好きなのもわかるし、越路吹雪さんのようになりたがっているのもわかる。でも、その前に、「歌」がなければと。

僕にとつての「歌」とは、みんなが口ずさむ歌。知らず知らずに、歌い出してしまふ歌。誰でも知っている歌。それがないから、彼女は何を歌っても、ひとりよがりになってしまうのだ、ということがこの時、よくわかった。

そこで、僕は彼女に曲を書くことを約束した。そのかわりと言っては変だが、彼女に僕の言う通り歌ってほしい、と注文をつけたのだった。

ちよつとした別れの歌を腰掛けて歌おう

その条件のひとつは、ステージの階段に腰掛けて歌うこと、だった。

なぜ、そんな注文をつけたかというと、彼女にお客さんとコミュニケーションをとってほしかったからだ。座って、「ねえ、皆さん、こんな歌、聞いてくれませんか」という感じが、みちよちゃんに似合うと思ったからだ。

では、それにはどんな歌がいいか、早速、作詞家の山上路夫さんに相談した。

「ガミさん（山上さんのニックネーム）、僕の好きな歌があるんだ。『テイ・フォー・ツー』って歌なんだ。指を鳴らしながら、歌うんだけどな。そんな歌、考えてくださいよ」とすると、タイトルがすぐに決まった。「二人でお酒を」。『テイ・フォー・ツー』から「二人でお酒を」とはいかにも安易だが、僕はそれでいいと思った。

そこで、僕は、さらに注文をつけた。これを別れの歌にしたいとガミさんに言った。それも、永遠の別れではなく、ちよつとしたすれ違いで別れるけれど、またいつか会えるかもねという感じの、サラリとした粹な別れの歌にしてほしいと言ったのだ。さすがガミさんだ。僕の気持ちを理解してくれて、詞を書いてくれた。

思い通りの詞ができたので、いよいよ曲作りだ。

僕は、メトロノームを目の前に置いた。そして、そのリズムに合わせて、自分の体を横揺れさせた。リズムに合わせて、指を鳴らしてみた。すると、どうだ。歌い出しのメロディがスムーズに出た。

さあ、お別れね。いままでいろいろありがとう。お互い、恨みっこなしで、さあ、お酒でも飲みましょうよ……。その語りかけるような調子が、リズムに乗った。

早速、梓みちよちゃんはショーで、僕の言う通り、なんと、ステージで床に座って片ひざを立て「二人でお酒を」を歌ったら大成功。拍手が鳴りやまない。

すぐに、評判になり、シングルカットされ、大ヒット曲になった。

それにしても、山上路夫さんも僕も、酒を飲まない。そんなコンビの「二人でお酒を」。だから、世の中、おもしろい。

第五章

昭和50～60年代

— 1975～1989

年下の男の子

昭和
50

千家和也作詞 穂口雄右作曲・編曲

キャンディーズ歌 (CBSソニー)

時代はビジュアルへ

昭和40年代に入ると、カラーテレビの発展とともに、それまでのいわゆる歌を「聞かせる」時代から「見せる」時代へと歌謡界は大きく舵を切った。

そして、それまで使われていなかった「アイドル」という言葉が大きくクローズアップされ、次々と「昭和歌謡」の世界にアイドルたちが登場してきた。大ヒットの有無は別にして、名前だけあげてみよう。懐かしい名前もあるかもしれない。

岡崎友紀、石田ゆり、安倍律子、可愛和美、吉沢京子、小柳ルミ子、天地真理、南沙織、山口いづみ、奈良富士子、小林麻美、麻丘めぐみ、牧葉ユミ、五十嵐じゅん、安西マリア……そして、山口百恵を頂点とするアイドル全盛時代が始まるのである。



昭和50年2月

そうしたなかで、アイドルグループとして颯爽と「昭和歌謡」に登場したのが、ランちゃん、スーちゃん、ミキちゃんと呼ばれた三人組のキャンディーズだった。

彼女たちの魅力は、なんと言っても、庶民的だったことだ。「ランチャーン」と呼べば、「はーい！」と答えてくれそうなアイドルたち。キャンディーズの歌がヒットしたのはそうした理由からだった。

さらに、彼女たちがよかったのは、人気テレビ番組にコメディエンヌとして出演していたことである。「8時だよ！ 全員集合」をはじめ、「見ごろ食べごろ笑いごろ」、「レツゴー・ヤング」などレギュラー番組を持ち、歌だけでなく、身近なアイドルとして人気を手にした。

そして、次々とヒット曲を連発し、昭和53年4月4日の後楽園球場のファイナル・コンサートを以って解散した。懐かしいヒット曲を挙げておこう。どれも「庶民的」な歌であることは言うまでもない。

「あなたに夢中」、「ハート泥棒」、「やさしい悪魔」、「年下の男の子」、「ハートのエースが出てこない」、「春一番」、「暑中お見舞い申し上げます」、「微笑がえし」……。

ファンにとっては、いつも自分の隣りにいたアイドル、キャンディーズ。

ということとは、彼女たちと青春をいっしょに過ごした人たちにとっては、こうしたキヤンディーズのヒット曲を並べることが、たまらない青春のページをめくることになるのかもしれない。

シクラメンのかほり

昭和
50

小椋佳作詞・作曲 萩田光雄編曲

布施明歌（キング）

歌は語れ

僕の「おもいで」でヒット歌手の仲間入りをした布施明君が、その後、外国人女優との結婚・離婚などあって低迷していたが、この「シクラメンのかほり」を歌ったことによって、再び、人気歌手の地位を確保した名曲だ。

この曲は、小椋さんがまだ第一勧銀（現・みずほ銀行）の赤坂支店にいた頃、休憩時間に取り先で見たシクラメンの花が印象に残り、曲が生まれたと言われている。言い換

布施明
シクラメンのかほり



昭和50年4月

えれば、仕事中に作った歌というわけだ。

本人としては、あまり納得していない歌だったそうだが、縁があつて、この曲を布施君が東京音楽祭で歌ったところ、大変に評判になり、大ヒットにつながり、レコード大賞を受賞した。歌というのは、歌手や作曲家にとっても、人生をかなり左右することが、この曲の例でもよくわかる。

さて、この歌の特徴は、何と言っても「語り」だ。

ということは、歌う時は、文節ごと分けて歌うことが必要だ。たとえば、歌い出しは、「真綿色した」でひとつ、「シクラメンほど」でひとつ、「すがしい」でひとつ、そして、「ものはない」でひとつ。確実に切って歌う。

続いて、「出会いの時の」、「君のようです」もふたつに、というように、歌詞を切って、ひとつひとつ語りかけるように、ていねいにやさしく歌えばかなり上手に聞こえる。

そして、「季節がー」以後は大きく声が広がるように。2番も同じ調子で。そして、サビの「疲れを知らない子供のように」は一気に、強く歌うこと。以降の3行も、ひと息で歌う。これがコツだ。ただし、この歌は、あまり、感情を込めないほうがいい。

これは、小椋さんが自分でも歌うので、もともと歌いやすいように作られているから、

練習を重ねればかなりうまく歌えるようになるにちがいない。

ちなみに、小椋さんの奥さんの名前は「佳穂里」さんだそうだが、小椋さんは、この歌とは関係ないと言っている。

なごり雪

昭和
50

伊勢正三作詞・作曲 松任谷正隆編曲

イルカ歌（クラウン）

押し寄せるフォークの波

昭和40年代後半のアイドルブームに沸く日本の歌謡界に、沖合から大きな波が押し寄せていた。

それが「フォーク・ブーム」である。

吉田拓郎、井上陽水らのヒットを契機に、南こうせつとかぐや姫、グレープなどの、いわゆる叙情的なフォークソングもヒットし、「昭和歌謡」の幅はグンと広がった。

この頃から、フォークソングは、ニューミュージックと言われる時代に入ったのだと



昭和50年11月

思う。

僕は作曲家であり、歌手でもあるけれど、正直言って、彼らの才能には脱帽した。何しろ、自ら作詞作曲し、楽器を演奏しながら歌う彼らがひとりではなく、次々と登場してきたのだから。しかも、彼らが自分で歌う「結婚しようよ」にしろ、「傘がない」にしろ、「神田川」、「精霊流し」にしろ、それらがまた名曲であつたからである。

この「なごり雪」もそうした名曲の一つで、もともとは、かぐや姫のアルバムに収録された作品がイルカさんによつてカバーされ、ヒットした。

なぜ、イルカさんの歌でヒットしたのだろうか。

それは、女性が男性の気持ちになつて歌つたからだ。僕は思う、歌は、三分詞の物語だ。それには出会いもあれば別れもある。イルカさんは、たつたギター一本で、ある青年の、好きだった女性と駅での別れを見事に表現してくれたからである。

もし、この歌をカラオケで歌うなら、男性の気持ちになつて歌うのは当然だが、インストロですでに駅のホームに立っていないといけない。雪がいまにも降り出しそうな空の下、そして、隣りには女性。なんだか、まぶしいくらい、きれいになつた女性がいる。そんなイメージを持って、歌い出してみると、きつとうまくいく。

イルカさんは、東京都中野区出身のフォークシンガーで、父親は戦後最高のジャズバンド「渡辺弘とスターダスターズ」の花形テナーサクソ奏者だった保坂俊雄さんだ。

木綿のハンカチーフ

昭和
50

松本隆作詞 筒美京平作曲 筒美京平／萩田光雄編曲

太田裕美歌（CBSソニー）

それまで存在しなかった楽曲構成

この歌はおもしろい。なぜなら、これも筒美京平さんの作品だから。

もう筒美さんの作品はイントロを聞いただけですぐにわかる。前にも書いたが、とにかく、筒美さんの書く曲のアレンジは素晴らしい。

筒美京平さんの作品はたくさんあるし、どれも名曲なのだが、僕があえて「これはかなわない」と思う曲を四つ挙げるとすれば、「また逢う日まで」、「17歳」、「魅せられて」、そして、この「木綿のハンカチーフ」だ。



昭和50年12月

それはともかく、ここまで見てきたように、「昭和歌謡」は、昭和40年代から50年代にかけて、大きくその羽を広げ、なんでも吸収し、黄金時代を迎えたが、その先駆けになったのがこの「木綿のハンカチーフ」だと僕は思う。

歌は物語だと言ってきたが、筒美さんの曲にも頭が下がるが、松本隆さんのこの作詞法にも驚かされた。

まず、歌詞の長さ。言ってみれば、それだけ長い物語だということである。1番が9行で、それが4番まである。しかも、ご存知のように、歌詞が男女の会話形式で書かれていて、本来ならデュエットで歌ってもおかしくないところを一人に歌わせている。

そういう意味では、従来の「昭和歌謡」では、決してできなかった曲だと言っているかもしれない。

しかし、筒美京平さんという人はすごい。

4番を読めばわかるが、この歌は都会に出た男が故郷に残した彼女に「もう帰れない」と告白する悲しい別れの歌だが、これをいとも簡単に、爽やかな青春ドラマのようなカントリー・ポップスにまとめた才能はいまさらながら恐れ入る。

この「木綿のハンカチーフ」は、太田裕美さんのデビュー曲「雨だれ」から数えて4

曲目だが、当時、大ヒットしただけでなく、いまでも多くの人に愛され、歌われている。それだけ、絹ではなく、木綿のハンカチーフに託した、この物語の主人公たちが日本中にたくさんいたにちがいない。

ただし、歌ってみるとわかるが、この歌はなかなかむずかしいということをはひと言つけ加えておこう。

もし歌うなら、男と女の気持ちを即座に切り替える必要があるので、そのあたりを意識して。また新趣向として、デュエットしてもおもしろいかもしれない。その場合、4番はごいっしょに。

北の宿から

昭和
50

阿久悠作詞 小林亜星作曲 竹村次郎編曲

都はるみ歌 (日本コロムビア)

イン・ドア・ソングの典型

歌には「イン・ドア」と「アウト・ドア」があると思っている。



昭和50年12月

僕はどちらかと言えば、「アウト・ドア」派で、明るい雰囲気（このへ北の宿から」はまさにインドアの典型だと言っているだろう。

作詞した阿久悠さんの作詞法は、まず、物語を作り、それを映像化することだと僕は思っている。

だから、阿久さんが書かれた歌を歌う場合には、まず詞をよく読み、それを再現ドラマのように映像化することができれば、きつとうまく歌えると僕は信じている。

その時に、まず大事なのが、この歌は「イン・ドア」か「アウト・ドア」か。そして、風景を浮かべる。

この歌の場合は、タイトルから想像するに、どこかわからないが場所は東北か北海道の「宿」が舞台。

吹雪のなか、汽笛が聞こえるのだから、駅もそれほど遠くない。お客もいない、そんな淋しい宿に女がひとり。部屋に閉じこもり、編んだところで、どうせ受け取ってもらえないセーターを編み、夜になれば、お酒を注文して、部屋でしみじみ飲んでいる。

吹雪のような寂寥感（せきりようが次第に心のなかまで吹き込み、いくら飲んでも体は温まるどころか、どんどん冷えていく。酔えない。

「もう、生きていたってしかたがない」

しかし、死ぬ勇氣もない。あなたが悪い。いえ、私も悪かった。終わったことはしかたがない。だから、すべてを忘れようと、こうやって、こんな地の果てのようなところまで旅に出たけれど、やっぱりあなたが恋しい。恋しくて、恋しくて、たまらない……。まさに、もう決してこれ以上、どこにも逃げられない、吹雪に閉じ込められた北の宿から、恋しい男への思いを漆黒の空に向かって放り投げるような女心――。

それをあくまでも静かに表現できたら、この歌はきつとうまく歌える。キーワードは、静かな聞き直り。ただし「女心の」と「あなた、恋しい」。ここは歌い上げたほうが決まる。

心を刃物のように研ぎ澄まして、決して声を張り上げることなく、一字一句でいいいに歌うことが、阿久さへんの世界を築くことにつながると思はれる。

ペッパー警部

51

阿久悠作詞 都倉俊一作曲・編曲

ピンク・レディー歌（ビクター）

小学生をつかまえた

都倉俊一さんは、「スター誕生！」で合格した二人組をどうスターにするか、考えた。まず、名前である。最初、二人がフォーク系の歌手だと思った関係者が「白い風船」と命名していた。

「スター誕生！」の審査員である都倉さんは、静岡から出てきたこの二人の女の子が最初からそんな地味な名前じゃ売れない、とわかっていた。

そんなある夜、関係者でホテルのラウンジでお酒を飲みながら、その二人組の話をしていたら、誰かが「ピンクレディー」というカクテルをバーテンダーに注文した。目の前で、グラスにジンベースにした桃色のカクテルが注がれていく。都倉さんは思わず膝を叩いて、「それだ！」。

一世を風靡したピンク・レディーの名前は、こうして決まった。

「ピンク・レディーにしよう」

「いいですね、決まり！」

また、その席で、ビクターの飯田久彦さん、愛称チャコが新たな作戦を提案した。その作戦とは、「とにかく世の中をびつくりさせるようなもの」がキーワードだった。

「彼女たちを使って、歌にしろ、衣装にしろ、振付にしろ、なんか、いままでに考えられないようなアイドルをつくりましょうよ」

こうして阿久悠さんによって「ペッパー警部」というアメリカのアニメに出てくるような主人公が発案され、都倉俊一さんはシンプルなメロディに強烈なビートを加え、土居甫さんは、ミニスカートで大胆に脚を開く踊りを考案した。

まさに、彼らは「世の中をびつくりさせる」ためのチームだったかもしれない。言い換えれば、彼らは「ピンク・レディー」というそれまでにないアイドルの形をまず作り、それを彼女たち2人にやらせたのである。これは、これまでの「昭和歌謡」にはなかったことだった。

「よし、それでいこう」

いざ、蓋を開けたら、この「びっくり作戦」は大成功、「ペッパー警部」はあつと言
う間に大ヒットとなった。土居さんの奇抜な振付も大成功。

なにしろ、子供たちがピンク・レディーの振付を熱心に覚え、真似をしたからである。
さらには、ピンク・レディーのキャラクターグッズが続々と登場。一大ピンク・レディ
ーブームとなった。

「びっくり作戦」チームは、その後も、「S・O・S」、「UFO」、「サウスボー」など
ヒットにヒットを重ねたが、これだけのブームを起こしても、ピンク・レディーの絶頂
期は昭和52年から53年のわずか2年。昭和55年に解散し、その後2人は個々の事務所で
活動している。

そして、いつの間にか、ピンク・レディーを知らない世代が30代になっている。時代
の流れは、早いものだ。

津軽海峡・冬景色

昭和52

阿久悠作詞 三木たかし作曲・編曲

石川さゆり歌 (日本コロムビア)

歌は「時代」を見事に映し出す

ピンク・レディーで阿久悠さんは、ひとつの時代を見事に切り取った。

特に僕は、それを「UFO」という曲で感じとった。なせなら、当時、未確認飛行物体、いわゆるUFOが世間を騒がせていたからである。実際、日本テレビの矢追純一ディレクターは、UFOの存在をテレビを使って証明しようと躍起になっていた。

そんなところに、阿久さんは「UFO」という詞を書き、都倉さんはそれにぴったりのリズム感で作曲し、土居さんは頭の後ろで手を上げる独特の決まりポーズを振付けた。いままで、どこの誰が「UFO」を歌にしようとしただろうか。その意味では、「歌」



昭和52年1月

と時代を見事にドッキングさせ、時代をまるごと後世に残そうとした阿久さんの狙いは成功したと思う。

時代を絵にする天才作詞家、その阿久悠さんが石川さゆりさんのために書いたのが、この「津軽海峡・冬景色」。実は、この歌も、阿久さんは、きちんと詞の中で、その時代を切り取っていた。

たとえば、いま「上野発の夜行列車」はない。その昔は、東北へ向かう、あるいは東北からやってくる列車の玄関口は上野駅だったことが、この歌でわかる。また、「青函連絡船」も、この歌のヒットから11年後の昭和63年3月に、80年にも及ぶその歴史に幕を下ろしている。

したがって、青函トンネルを通る列車に乗るから、竜飛崎は見えない。つまり、いま、津軽海峡は空の上からしか見えないのだ。だとすれば、「北へ帰る人の群れは、誰も無口」かどうかわからない。つまり、この詞には、この時代はこうであったという事実が歌とともに残っているのである。

それで思い出したが、僕が子供の頃、「岡晴夫ショー」を藤沢の映画館に見に行った記憶がある。当時は、映画館で映画と実演をやっていたのだ。岡さんと言えば、戦前か

ら戦後にかけて、「オカッパル」と呼ばれた人気歌手だ。

その時、岡晴夫さんは当時のヒットソング「憧れのハワイ航路」を歌った。調べてみたら、昭和23年のヒット曲だった。

「憧れのハワイ航路」——もう、おわかりだと思うが、当時、ハワイにはセレブたちは飛行機でなく、客船で行った。ハワイ航路は日本郵船の花形航路だった。それが、庶民には憧れだったのだ。

(えー、ハワイに船で行くのが憧れ?)

いまなら、誰もがそう思うだろう。津軽海峡を船で渡った時代があったということと同じことなのだ。歌と時代は切っても切れない関係にある。逆に言えば、その歌を歌えば、懐かしい当時の思い出が浮かんでくる。

まさに、「歌は世につれ、世は歌につれ」である。

「昭和歌謡」の真のおもしろさは、そこにあると言っていいだろう。それにしても、この歌にかぎらず、歌の力はすごいと思うのは、わずか1行で季節が変わったり、何年も過ぎたりすることだ。

ここで言えば、歌い出しのわずか数秒で、上野から青森に行ける。これは、歌だから

できることで、小説ではこうはいかない。こうした歌の楽しさも味わうとおもしろいかもしれない。

もともとこの歌は、優れた歌唱力を持ちながら、同時期にデビューした森昌子、桜田淳子、山口百恵のアイドル・ブームに遅れをとった石川さゆりさんのために、阿久悠、三木たかしのコンビが立ち上げた12カ月の旅シリーズ12曲のなかの1曲。

これがきっかけとなり、「能登半島」、「風の盆恋唄」、「天城越え」とヒット曲が続ぎ、石川さゆりさんは、「昭和歌謡」のなかで、一流歌手の仲間入りを果たすことができた。この「津軽海峡・冬景色」は、そのきっかけになった歌である。

硝子坂

昭和
52

島武実作詞 宇崎竜童作曲 馬飼野康二編曲

高田みづえ歌 (テイチク)

引つ込み思案なアイドル

昭和40年代後半から50年代前半にかけて、人気オーディション番



組「スター誕生！」から、この時代のアイドルたちがすべて誕生したように思われるが、必ずしもそうではない。

フジテレビ系のオーディション番組「君こそスターだ」という番組からも、林寛子さん、石川ひとみさん、新田純一君、そして、この高田みづえさんが誕生している。資料を見ると、高田みづえさんは、第18回グランドチャンピオンだそうだから、番組も歴史があるのだ。

僕が知っているかぎり、当時の彼女のイメージは、「小さくておとなしい女の子」だった。

普通、アイドルなら、もっと目立ちたがり、ちよつと派手めの子を想像してしまいがちだが、彼女は本当に静かな子で、ステージでも他の歌手と並ぶと、いつも人の陰に隠れてしまうような子だった。根っからそういう性格なのだろう。

よく、山口百恵さんに「みづえちゃん、ステージに立った以上は目立たなければダメよ。もつと、真ん中に行きなさい」と言われ、その時は行くのだが、百恵さんがいないとまた戻ってきてしまうような子だった。

地味というか、遠慮がちな性格だったから「大丈夫かな？」と心配していたのだが、

勝手にしやがれ

昭和
52

阿久悠作詞 大野克夫作曲 船山基紀編曲

沢田研二歌 (ポリドール)

バラードでも、ロックでも

僕が「昭和歌謡」を選ぼうとした時、一番迷ったのは、ジュリーだ。

沢田研二君と言えば、当然、ザ・タイガース時代の活躍も書いておかなければならないし、ソロになってからの活躍も素晴らしい。もちろん、両方とも書くのが正しいのかもしれないが、僕は音楽的な観点から、彼に関しては、昭和46年からソロシンガーになってからの曲に注目したい。

その理由は、ザ・タイガース時代のジュリーは、歌はもちろん上手だったが、やはり、若さと甘さだけで歌っていた。もっとも、それはGS時代の寵児だからやむを得ないことだが、「昭和歌謡」に歌手として名を残すとしたら、やはり、ソロになってからのジ



昭和52年5月

ユリーだろうと思うからだ。

ソロになってからのジュリーの最初のヒット曲は昭和48年の「危険なふたり」だ。これは、安井かずみさんが詞を書き、ザ・ワイルドワインズを率いた加瀬邦彦さんが作曲した懐かしいロックンロール調な曲だった。なんとなくだが、僕は「ダイアナ」を思い出した。

次のヒットは、昭和50年の「時の過ぎゆくままに」だろう。これは阿久悠さんの作詞で、井上堯之バンドの大野克夫さんの作曲だ。この曲調は、どちらかと言えばバウンドだ。なんとなくけだるい感じをうまく曲で表現している。

そして、ソロシンガーとして、ジュリーが一大飛躍した曲が、同じ阿久・大野コンビによるこの「勝手にしやがれ」ではないだろうか。音楽的にはバウンドから、転じて、ロック調でスケールの大きなサウンドになっている。

阿久さんがさすがだな、と思ったのは、いろいろな歌をジュリーに歌わせたことだ。

阿久さんはジュリーが好きだったというか、なんか不思議な男の魅力を感じていたみたいだった。その証拠に、阿久さんは、ジュリーのことについてこう書いている。

「沢田研二のための詞を書くことが圧倒的に楽しい時で、ぼくは美しく見える男と男が

美しく見える時と、このふたつを一生懸命に考えながら、さまざまなシチュエーションの男を書き、ジュリーこと沢田研二がその世界に倍にも三倍にもふくらませてバフォーマンスする奇すぶりにうっとりとしてたのである」(阿久悠ホームページより)

つまり、僕が見たところ、阿久さんは、ジュリーのステージに現代の歌舞伎の粋な早替りとか、宙乗りのような、いわゆる「けれん」のようなものを見ていたんじゃないかと思う。

つまり、そうした阿久さんの男のダンディズムを強調した詞、さらには指を差したり、頭上に両手を挙げ左右に振るなどの大胆なアクションが受けて、ジュリーのサウンドはこの曲で完成したと思う。

そこにはもちろん、バラードでもロックでも、なんでも自分のものにしてしまう歌手沢田研二の素晴らしい音楽的才能があったことは言うまでもない。

この「勝手にしやがれ」は、この年の日本レコード大賞、日本歌謡大賞をダブル受賞している。まさに、「昭和歌謡」の名曲のひとつである。

ただ、この歌を歌う時は、ブレスに気をつけてほしい。歌が一直線のために、息が続かない人が多いのだ。どこでブレスをするか。そこがむずかしいと思う。だから、むし

ろ、ひとりで歌うより、たくさんの人で歌うとおもしろい効果が出るような感じがしてならない。

あとは、歌のスピード感だ。スピード感がないとつまらない。そのためには、タンバリンを叩いたり、体を動かしたりしながら歌ってほしい。サビの部分は、一行ずつ、一息で。

実は僕もジェリーには1曲だけ曲を書いたことがある。安井かずみさんが作詞した『あなただけでいい』という曲である。

秋桜（コスモス）

昭和52

さだまさし作詞・作曲 萩田光雄編曲

山口百恵歌（CBSソニー）

なぜ、百恵さんが「昭和歌謡」のスーパースターか

僕はここまで、戦後の「リンゴの唄」から、ずっと「昭和歌謡」の歴史とそれぞれの時代のヒット曲の分析をしてきた。



昭和52年10月

その結果、わかったことは、もし、「昭和歌謡」という富士山のような山があったとしたら、この山口百恵さんが人気オーディション番組「スター誕生！」に出場した昭和47年から引退した昭和55年までの期間が、「昭和歌謡」の頂上だっただろうということである。

いま思い返しても、この時代、芸能界は実に華やかで、まさに百花繚乱であった。

この時代に青春を過ごした方たちはよくわかるだろうが、テレビにはアイドルたちが出演しまくり、吉田拓郎、井上陽水らのニューミュージック系の人気シンガーソングライターが紅白歌合戦への出演を拒否するなど、芸能界の話題には事欠かなかった。

また、西城秀樹、郷ひろみ、野口五郎、田原俊彦、近藤真彦ら男性アイドルたちも活躍、さらには、沢田研二が復活、さらには、チューリップ、アリス、ガロ、チェリッシュなども登場。女性アイドルも中三トリオに続いて、高田みづえ、岩崎宏美、ピンク・レディー、榊原郁恵、荒木由美子、演歌でも、五木ひろし、八代亜紀、細川たかし、都はるみがヒットを飛ばした。各テレビ局は、それぞれ音楽祭を企画、それによって、暮れのレコード大賞、歌謡大賞の「賞取りレース」はいつそう白熱した時代だった。

そんな時代の中にいたのが、僕は、山口百恵さんだと思う。しかも、いまから思え

ば、百恵さんが14歳から22歳までのことである。

(そうか、百恵さんが芸能界から引退したのは、22歳だったのか)と、当時を知っている人たちは、いまさらながらあまりの若さに驚くが、いま思えば、まさに「昭和歌謡」は、百恵さんが活躍したこの8年間で頂点だったのである。

美空ひばりさん以後、「百恵さんの前に百恵さんなし、百恵さんの後に百恵さんなし」ということは、決して僕だけの思いではないだろう。

その意味で、僕はあえて山口百恵さんを「昭和歌謡」のスーパースターに挙げたいと思う。その理由は三つあるが、それは百恵さんの代表曲と共に語っていこう。

まず、理由の第一は、この「秋桜」に代表されるように、シンガーソングライターが作詞作曲したものを「彼らよりも上手に」歌えることである。さだまさしさんは、まさしく日本を代表するアーティストだ。そのアーティストが作詞作曲したのだから、本人が歌ったものが誰よりもいいはずなのに、百恵さんの歌を聞くと、完全に百恵さんの歌になっている。いわば、百恵さんの色に染めていると言っていると思う。

その色は、映画「伊豆の踊子」や「古都」などの映画で見た、百恵さんの持っている、そこはかとない日本人女性の情緒の色だと僕は思う。その色は決して明るくない。

むしろ、陰影と言ってもいいかもしれない。

百恵さんがこの歌を歌うと、ふと、淋しげな陰の部分を感じる。それが、百恵さんの人生とどう関わっているかわからないが、その「はかなさ」のようなものが、さだまさしさんが歌う「秋桜」とのちがいかもしれない。

第二、第三の理由については、それぞれの曲に合わせて紹介しよう。

カナダからの手紙

昭和53

橋本淳作詞 平尾昌晃作曲 森岡賢一郎編曲

平尾昌晃・畑中葉子歌（ビクター）

恋人同士でもなくても歌えるデュエット曲を

普通、デュエット曲と言えば、おじさんおばさんたちは「銀座の恋の物語」、中年のカップルは「ロンリー・チャップリン」、洋楽が好きな人なら「ヘイ・ポーラ」が定番だろう。

ただ、残念なことに、デュエット曲と言うと、どうしても恋人同士の歌だと思われて



昭和53年1月

しまう。だから、好きでもない人とのデュエットはとてできないという声が多い。
そんななか、いま、上司と部下、同僚同士、先生と生徒といった特に恋人同士でなく
ても、この歌をデュエットで歌ってくれるのは、僕としてはとてもうれしい。

もともと、この歌は編曲家協会主催の「空の音楽祭」に僕が頼まれて、出品した作品
で、グランプリを獲得した曲だった。

「空の音楽祭」だから、外国旅行をメインテーマにし、若い人に「どこに行きたいか」
とアンケートをとったら、断トツでカナダが第1位だったことから、橋本淳さんが「カ
ナダからの手紙」とタイトルをつけ、詞を書いてくれた。

僕にとっては、久しぶりのリズムカルな曲が完成した。

その時、幹事役の服部克久さんに「マーちゃん、自分で歌ってよ」と言われたが、い
まさらという気がして躊躇ちゅうちよしていたら「デュエットならどう？」と言われ、しぶしぶ承
諾した。

そこで、ビクターと第一プロの立会いで、僕のミュージックスクールの女生徒6人を
選び、テストをした。白羽の矢が立ったのは、東京校の出身の畑中葉子ちゃんだった。

そして、僕と彼女のデュエット曲が発売になり、最終的に70万枚の大ヒットになった。

この曲で、いわゆるデュエットの流れが変わり、恋人同士でなくても気楽に歌えるようになったのがうれしかった。

与作

昭和
53

七澤公典作詞・作曲 池多孝春編曲

北島三郎歌（クラウン）

誰もが「歌」を作り、誰もが歌える時代

昭和40年代後半から50年代前半にかけて、日本の芸能界というか、音楽業界はまさに好景気に沸き立った時代だった。

さまざまな歌手たちがそれぞれのヒット曲を連発し、テレビの歌

謡番組は視聴率を上げ、年末のNHK紅白歌合戦の視聴率に至っては、昭和47年には、なんと80・6パーセントを記録、その後も70パーセント台をキープし、北島三郎さんの「与作」がヒットした昭和53年は、かなり下がったといえども、72・2パーセントを記録している。



昭和53年3月

平成24年の年末の紅白歌合戦の視聴率、第一部の30パーセント台、第二部の40パーセント台、個人別ではSMAPの46パーセントが最高という記録と比べても、いかに昭和40年代後半から50年代前半にかけての歌謡ブームがすさまじかったか、僕もいまさらながら驚いている。

では、なぜ、この時代が「昭和歌謡」の全盛期だと言えたのだろうか。

それは、「歌」がみんなのものだったからだと思う。「歌」はいつでも誰でも歌える時代になったからである。

その原因は、なんといっても、カラオケの普及だ。この頃は、カラオケが全国にまるで燎原の火のように、急激に熱く全国に広まっていった時期と重なる。そのうえ、今度、誰でも歌を作っているという番組までできた。それが、NHKの「あなたのメロディ」だった。

視聴者が自分で作詞作曲した歌を歌手が歌うという番組で、僕も審査員として少し関わったが、ここからもヒット曲が出た。

「与作」は、その代表作であり、北島さんが歌ってくれたことで、無名なギタリストだった七澤公典さんは一躍、有名になった。また、逆に、この曲によって、北島さんも新

境地を開拓することになったわけである。

素人が歌うだけでなく、プロ歌手の歌まで作ってしまう。「ハイハイホー」は、「僕」の作った歌を天下のサブちゃんが歌うんだぜ」という、なんだか、そんな素人の喜びの雄叫びに聞こえるのは思い過ごしだろうか。

そんな時代がこの時代だったのだ。歌に対するそんなエネルギーが、この時代に満ち溢れていたのである。

ちなみに、この「あなたのメロデー」からは、トワ・エ・モワの「空よ」なども生まれている。

プレイバックPART2

昭和53

阿木燿子作詞 宇崎竜童作曲 萩田光雄編曲

山口百恵歌 (CBSソニー)

「馬鹿にしないでよ」といつたい誰が言える？

僕が山口百恵さんと仕事をすることになったのは、テレビ映画の



昭和53年5月

「赤いシリーズ」でまずBGMをやらせてもらったのがきつかけだった。

そして、「今度、主題歌を書いてもらえませんか」と言われて、「赤い絆ーレッド・セ
ンセーション」を百恵さんのために書いたのが最初だ。もちろん、百恵さんのことは、
彼女が中三トリオで活躍していた頃から知っていたし、紅白歌合戦でもよく顔を合わせ
ていた。

さて、その山口百恵さんの魅力の二番目は、この「プレイバックPART2」に代表
される、強い女だ。

相手が誰だろうと、許せないことは許さないという、言い換えれば、カッコいい女の
歌を歌わせたら、彼女の右に出る者はいないだろう。

実際、この「プレイバックPART2」のなかで、「馬鹿にしないでよ」と歌ってい
るが、これはまさに百恵さんだからこそできたのであって、他の歌手であれば、きっと
「何イバっているんだ」と反感を買ったにちがいない。

この開き直りに近い、クールさ。

これが、僕の言う、百恵さんの第二の魅力だ。

実は、この魅力は、デビューの頃からあった。

「ひと夏の経験」がそれだった。「あなたが望むなら、なんでもあげるわ」などという歌を高一が歌っていいのかとさえ思った。だが、彼女は、それをさらりと歌ってみせた。しかも、彼女は「スター誕生」からデビューしたアイドルなのに、にこりともしないで歌ったのだ。

これが、やがて「横須賀ストーリー」へとつながり、「イミテーション・ゴールド」、そして、この「プレイバックPART2」へと続くのだ。

さらに、彼女は次にまた大きく飛躍する。

それが、「いい日旅立ち」だった。これもまた、アーティスト谷村新司本人が歌うより、はるかに百恵さんの色に染まった名曲になった。

日本の一流アーティストが自ら作詞作曲し、歌った歌を自分のものにし、本人よりも上手に歌いこなした歌手は、のちに小椋佳さんの歌「愛燦燦」を見事に歌った美空ひばりさんと、この時の百恵さんしかいないだろうと僕は思う。

いい日旅立ち

昭和53

谷村新司作詞・作曲 川口真編曲

山口百恵歌 (CBSソニー)

山口百恵がスーパースターである理由

そして、僕が感じる山口百恵さんの三つ目の魅力。それは、スケールの大きさである。大らかさと言っているいいかもしれない。そして、その大らかさのなかに、慈母にも似たやさしさを感じさせるのだ。その代表的な歌が、この「いい日旅立ち」である。

それは、都会で疲れきった女性たちに、「大丈夫よ、狭いようで、日本は広いんだもの。あなたを待っている人がきつといますよ」というメッセージを与えたかと思うと、「ほら、お母さんの背中で聞いた歌を歌ってみませんか」とか、「お父さんが教えてくれた歌を思い出して」という癒しの声をかける。

作詞作曲した谷村新司さんもちろんこの歌を歌うが、聴き手にとって、彼の歌とは



昭和53年11月

別に百恵さんのほうがはるかに癒されるのは、百恵さんに慈母の匂いを感じているからだと思う。

つまり、ここにも、「プレイバックPART2」とはちがう百恵さんが存在するのだ。この歌は、国鉄（現JR）のデイスカバー・ジャパンのキャンペーン・ソングとして広く歌われることによって、山口百恵さんは真の国民歌手になったと言えよう。

それにしても、デビューしたのが昭和48年、引退したのが昭和55年。わずか数年で「昭和歌謡」の中樞を担った歌手はいない。

これで、僕が彼女を「昭和歌謡」のスーパースターと言った理由がわかりだろう。さて、山口百恵さんを語る最後に、カラオケでこの「いい日旅立ち」を歌う時の注意を挙げておこう。

まず、基本は、自分が生まれ育ったところのイメージを浮かべること。故郷に山がある人は山を、海がある人は海を思い、次に、そこに住んでいる人、両親や兄弟姉妹、親友、初恋の人などを思い出しながら歌ってみると、きつといい歌になるはずだ。

イントロが流れはじめた時に、そうした懐かしい風景や人々が浮かんできたら、きつというまじく歌えるはずだ。

いとしのエリー

昭和 54

桑田佳祐作詞・作曲 サザンオールスターズ編曲 新田一郎監修

サザンオールスターズ歌 (ビクター)

世の中のテンポに合わせて、16ビートに

こうして、「昭和歌謡」を口ずさんだりしていて、ふと、いまの音楽を聞くと、明らかに曲のテンポがちがうことに気づく。

音楽的に言えば、「昭和歌謡」が8ビートなのに対し、平成の音

楽はいわゆる演歌を除けば、16ビートで曲が作られている。そのため、「昭和歌謡」で育った人たちは、いまの曲に乗れないばかりか、歌っている歌詞もわからない場合が多いだろう。16ビートの曲に歌詞を乗せるのだから、歌詞は昔のように意味を持った言葉ではなく、単なる音にすぎない。言ってみれば、ダンス音楽、ディスコ音楽に歌詞がついているのと同じことだ。

となれば、曲にも乗れず、歌詞もわからない人は、当然、歌うこともできない。



歌というものは、歌手や作詞家、作曲家のものではなく、多くの人に歌われてこそ意味がある。僕は思っているので、この傾向はあまりよくないと思うが、時代の要請だからしかたがない。

しかし、その傾向は平成になってから生まれたのではない。「昭和歌謡」のなかに、もうすではじまっていたのだ。

それが、サザンオールスターズである。

サザンオールスターズは、桑田佳祐君を中心とした青山学院大学の学生バンドだったが、昭和53年に「勝手にシンドバッド」でデビューした。しかし、彼の歌のテンポは早く、歌詞も英語交じりのため、一時はテレビ出演の際に、画面下にテロップが出たほどであった。

その後のサザンの活躍は、ご存知の通りだが、その代表曲と言ったら、僕は「いとしのエリー」を挙げたいと思うが、ファンの人たちはどう思うだろうか。実は、この歌を世界に通用する名曲だという作曲家やアーティストも多い。

一度、桑田君に歌の作曲法を尋ねたことがある。その時の彼の答えがユニークだった。彼は、ギターを弾きながら曲を作るのだが、その際、実は勝手なことをしゃべりなが

らギターを鳴らすのだそう。もちろん、思いついた英語も交えて、ギヤーギヤー騒ぎながら、次第にまとまってくるんです、と言った。

もともと、彼は高校時代から英語は特に抜群の成績だったそうだから、英語で考えるテクニクを身につけてしまっているのではないだろうか。

彼は僕と同じ茅ヶ崎の出身だから、海の歌が多いのがわかるが、加山雄三君とのちがいは、桑田君が渚で、加山君が海の上ではないかと思う。「チャコの海岸物語」などを聞くと、渚でのウォッチングが曲に生かされていると実感する。

さて、この歌をどう歌うかだが、これはかなり難易度が高い。かなり音域が広い人でないと歌えないし、前半と後半の歌い分けをしつかりと意識しながら歌うことが必要だろう。

舟唄

昭和
54

阿久悠作詞 浜圭介作曲 竜崎孝路編曲

八代亜紀歌（テイチク）

美空ひばりさんに歌ってもらいたくて書かれた歌

「歌に歴史あり」とよく言われるが、この「舟唄」には美空ひばりさんがらみの因縁話があると聞いたことがある。

ちよつと長くなるかもしれないが、僕が知っている範囲で書いておこう。

ある時、スポーツニッポンの企画で、読者から一人の歌手に歌ってもらいたい詞を募り、それに阿久悠さんが批評を加えるという企画があつたんだそう。

そして、阿久さん自身も、美空ひばりさんに歌ってほしい歌詞募集の際、「僕だったら、ひばりさんにこんな詞を書く」と作詞したのが、この「舟唄」だった。

読者の皆さんは、いま、気づかれたかと思うが、阿久さんはあれだけ多くの人に詞を



昭和54年5月

提供していながら、美空ひばりさんには一曲も書いてない。これには、実は、理由があった。

阿久さんは、従来の演歌、いわゆる昭和30年代の歌謡曲に共通した古めかしい「言葉」を使う歌が嫌いだったのである。いかに、使い古された常套句を使わずに、現代に合った言葉で、物語の主人公の気持ちを表現できるか、そこに力を注いできた。

ところが、その演歌に君臨していたのは、美空ひばりさんだった。そのため、ひばりさんに歌ってもらう歌を書きたくても書けなかった。

そこで、この新聞の企画を通して、「僕だったら、ひばりさんにこんな詞を書く」とこの「舟唄」の詞を書いたのだった。しかし、もちろん、それは実現しないまま、担当の音楽プロデューサー小西良太郎さんが手元に持っていた。

そんなある日、小西さんは作曲家浜圭介さんから相談を受けた。浜さんは、奥村チヨさんの「終着駅」、北原ミレイさんの「石狩挽歌」で有名だが、その頃ヒットがなかった。困っている浜さんに、小西さんは阿久さんの「舟唄」を渡した。

浜さんは、喜んで作曲をした。そして、誰か歌いたい歌手がいたらと、小西さんに完成したテープを渡した。そこへまた、ヒット曲がしばらく出ていない歌手がやってきた。

それが八代重紀さんだった……というわけである。

しかし、テープを聞いたレコード会社の関係者は、誰もが「こんな暗い歌が売れるわけがない」と言ったそうだし。しかし、新曲がほかにあるわけではない。結局、この曲で勝負するしかなかった。それが、大ヒットしたのだから、わからないものである。

僕には作曲できない、この歌い出し

テイチクの人が「こんな暗い歌」とこの歌を評したが、彼らの感想は決して間違いではない。

僕もこの「お酒はぬるめの罫がいい」、「肴はあぶったイカでいい」ではじまる歌い出しのメロディには驚いた。しかも、この八五調が4行も続くのだから、浜圭介さんは「よくこんなメロディを考えたな」と思ったほどだった。

しかし、浜さんの「石狩挽歌」を知っている人は、どこか同じ匂いと暗さを感じるだろう。「海猫が鳴くからニシンが来ると」ではじまるあの石狩挽歌につながる北の海の感じである。

また、それはともあれ、この歌を上手に歌うコツに行こう。

それは、最初の2行ですべてが決まる。

そして、この2行のメロディは似ているようで、まったくちがう。「お酒は」と「肴は」は明らかにちがうし、「ぬるめの」と「あぶった」もちがう。そうなれば、当然「爛がいい」と「イカでいい」もちがう。

だから、歌う前に、ララララでいいから、メロディを奏でてみるといい。

「ララララ ララララ ラララララー ララララ ララララ ラララララー」

この2行が終わったら、次の2行も同様にハミングしてみよう。何度も「ララララララララ ララララララー」がそれぞれの行ごとに意識できたら、歌詞を歌ってみる。

その時に大事なものは、「爛がいい」の「か」と「イカでいい」の「イ」を強くなくてもいいから、はっきりと発音することである。これがメリハリである。同様に「女は無口な」の「む」、「ぼんやり」の「ぼ」がポイントになる。

「しみじみ」以降は、例の阿久さんの作詞法である、物語の映像を浮かべながら、どこでもいいから、居酒屋でひとりで飲んでいる主人公の気持ちになって、それこそ「しみじみ」歌えれば、合格だろう。

最後の「舟唄を」の部分、大きく、強調するように歌うと全体がまとまってくる。

そして、「沖の」からは、海の映像を浮かべながら歌うことを忘れずに。

贈る言葉

昭和
54

武田鉄矢作詞 千葉和臣作曲 惣領泰則編曲

海援隊歌 (ポリドール)

金八先生という番組があった！

そうそう、この時代で忘れてはいけなのは、テレビ番組だ。

僕らが若い頃は、「エデンの東」とか「ハイヌーン」とか、洋画の主題歌がレコード売上げランキングの上位を占めていたが、いつの間にか、映画の主題歌がヒットする例が少なくなった。

そんななか、「昭和歌謡」に大変珍しく、テレビの主題歌が入ってきた。それが、この「贈る言葉」である。

これは、昭和54年からはじまったTBS連続ドラマ「3年B組金八先生」の主題歌で、先生役にはフォークグループ海援隊のリードボーカル、武田鉄矢さんが出演し、これが



昭和54年11月

昂

昭和
55

谷村新司作詞・作曲 服部克久編曲

谷村新司歌（ボリスター）

ウイスキーのCMソングとして作られた

僕は、以前から、アリスというグループにとっても興味があった。

アリスは谷村新司、堀内孝雄、矢沢透の3人組のバンドで、昭和47年から10年間ほど、「昭和歌謡」に貢献した。「今はもう誰も」、「冬の稲妻」、「チャンピオン」などの数々のヒット曲を出したが、彼らがすごいのは解散後だ。

谷村さんは、まだアリスが結成中にもかかわらず、「いい日旅立ち」を百恵さんのために提供したりしていたが、昭和55年、この名曲「昂」を作詞作曲した。

また、堀内さんは歌謡曲路線に転向し、「恋唄綴り」で日本レコード大賞を受賞している。

そんな彼らが、再びアリスを再結成したという話も聞くが、バンドはバンド、個人は

個人という活動は、相当才能がなければできないことなので、ますます彼らの今後の活動を見守っていききたいと思っている。

さて、この「昂」だが、「北国の春」とともに、中国を中心としたアジア諸国で大変に流行している。これは、実に素晴らしいことだと思う。

聞いたところによれば、この曲はもともとウイスキーのCMソングのために作られたそうだ。映画「天平の^{いらか}薨」の映像をバックにした、雄大な曲ができないかと頼まれた谷村さんが作詞作曲し、編曲を服部克久さんが担当し、男性コーラスを入れるなど工夫したという。

すると、CMが放映されると同時に、何万という問い合わせが視聴者から来たという会心のコマースャルソングになったのだそう。

これだけ雄大な曲だから、中国文化や音楽の研究を重ね、それこそ構想何年という苦心談がつきものだが、谷村さんの話だと、引越しの最中に、ふとメロディが浮かんだので、部屋にこもり、20～30分で書き上げたというからおもしろい。

僕にもそんな体験がよくあるが、いい曲は実は、何でもない時にヒョコッと浮かぶものなのだ。

青い珊瑚礁

昭和
55

三浦徳子作詞 小田裕一郎作曲 大村雅朗編曲

松田聖子歌 (CBSソニー)

天性の「売れる声」の持ち主が現れた！

前章で「昭和歌謡」という山脈の頂上を極めたのは、山口百恵さんだと書いたが、その後、「昭和歌謡」の後半の峰々を支えたのが、

松田聖子さんだと僕は思う。

彼女は、僕のスクールの福岡校で、デビュー前の10カ月間ほどレッスンを受けていた。その頃、彼女を直接教えていた岩本先生によると、彼女に一度もボイス・トレーニングをしたことがなかったそう。要するに、最初から、あの声だったというわけだ。

僕が会った時も、彼女は格別、目立つ子ではなかった。体も細身だし、強い風が吹いたら倒れてしまうのではないかという華奢な子なのに、歌わせるとどこからその声量が噴き上がってくるのかと思うほど、感動した。



青い珊瑚礁

昭和55年7月

そして、部屋中に響き渡るような、彼女独特のあの中高音のエキゾティックな艶のあの声が、僕たちプロを圧倒し、魅了した。

もちろん、そんな天性の「売れる声」を持つ彼女に何も言うことはなかった。あえて、僕がその時に注意したことと言えば、久留米出身なので、方言とアクセントを直すことだった。ゲームをやると、「先生、あたし、勝つとよ」などと方言丸出しだったので、これからアイドルになるために方言を直すことと、歌を歌う時は、なるべく大きな口を開けて歌うよう指示した覚えがある。そのために、息継ぎ、いわゆるブレスも大きく息を吸うことを教えた。

そして、彼女は昭和55年「裸足の季節」でデビュー。この曲は化粧品会社のCMソングでヒットしたが、第2弾のこの「青い珊瑚礁」で、女性アイドルのトップスターへ大躍進し、8作目の「赤いスイートピー」で完全に、百恵さん引退後の「昭和歌謡」の世界でトップの地位を獲得したと、僕は思っている。

その後は、ご存知のように、歌だけでなく、彼女の女性としての生き方が多くの女性の共感呼び、いまでも、松田聖子さんと言えば、日本を代表するエンターティナーである。

いい歌手は遠くにいても、近くに聞こえる

彼女の歌声をもう一度改めて聞き直すと、中音から高音にかかる声が気持ちよく伸びて非常にきれいだが、中音から下の部分もあなど侮れない。

普通、中音から高音がきれいに伸びる人は、中音から下の音が弱くなりがちだが、彼女の場合は決して弱くなったり、細くなったりしない。あの細い体のどこが楽器になっているのかと思うほど、低音も力強い。

だから、すべての歌詞が聞いている人にしっかりと伝わってくる。つまり、小さな声で囁くように歌っても、「言葉」はきちんと聞こえる。

歌手にとって、これが大事なのだ。

僕は、つねづね、「いい歌手の歌声は遠くにいても、近くにいるように聞こえる」と言っているが、まさに彼女の歌声は、その典型だ。僕らが彼女の歌を聞いて、心地いいのはそのためなのだ。

ということは、この歌を普通に歌うのは簡単だが、上手に歌うのは、かなりむずかしいということだ。

よく言われる、「誰でも歌えそうで、歌えない」曲のひとつにあげてもいいだろう。ひとつだけ、うまく歌えるかもしれない秘訣を教えておこう。

特に、松田聖子さんが他の歌手より優れているのは、「恋心」の表現である。きっと、子供の頃から、たくさん「恋」や「憧れ」を体験し、胸をときめかせてきたのではないだろうか。恋多き少女だったのかもしれない。

その甘酸っぱい経験が、歌声のなかに込められているのではないか、と僕は思う。いまでも、彼女が年齢不詳の華やかさを保っているのも、きっと、いつまでもその「恋心」を持ち続けているせいだろうと思う。

つまり、この歌にかぎらず、「渚のバル」でも「SWEET MEMORIES」でも、松田聖子さんの歌を歌おうと思うならば、失いかけた「恋心」を蘇らせて歌うと、上手に歌えるかもしれないということを付け加えておこう。

恋人よ

昭和
55

五輪真弓作詞・作曲 船山基紀編曲

五輪真弓歌 (CBSソニー)

やさしい日本語で綴られた五輪サウンド

この歌は、「昭和歌謡」の最終章に出てきたが、五輪真弓さん自身は、この本の第三章の昭和40年代のニューミュージック時代から活躍していた女性シンガーソングライターだ。

井上陽水、谷村新司、さだまさし、中島みゆき、荒井由実といった人たちと同時代だが、彼らと一線を画していると言えば、宮沢賢治が大好きだという彼女の作る歌詞の言葉のやさしさと、ポップスのメッカ、ロサンゼルスや芸術の都、パリに長期滞在し、外国のアーティストと仕事をしていたことかもしれない。

しかも、日本よりもアメリカやヨーロッパ、ひいてはアジア各国でも評価が高いのも彼女の才能がいかに世界的か証明している。



昭和55年8月

その彼女が、あえて、日本人にかぎらず、世界に通用する普遍的な「昭和歌謡」として作詞作曲し、歌ったのがこの「恋人よ」である。

だから、歌い方も正統派で、辛口の批評で有名な淡谷のり子先生も手放しで褒め、ご自分でもこの「恋人よ」を歌われたくらい、素晴らしい歌唱力で歌い上げた。

まさに、「昭和歌謡」の名曲だ。

ちなみに、この曲は、彼女の思い通り、中国、韓国、ベトナムほかアジア諸国で多くの人に歌われている。

審査員の気持ちを話しておこう

いい機会だから、ここで、歌の審査員の気持ちを述べておこう。

僕たち審査員は、まず、出場者が歌う歌でランクを決める。なぜなら、歌には難易度というものがあり、出場者が同じように完璧に歌ったとしたら、むずかしい歌を歌った人のほうが点数が高くなければいけないからだ。体操のウルトラCと同じ理屈だ。

もし、ひとり10点が満点という持ち点だったら、誰かがそれほどむずかしくない歌を完璧に歌ったとしても8点以上はつけない。

その意味では、出場者がよく歌う曲のなかで、この「恋人よ」は、石川さゆりさんの「天城越え」に匹敵する難易度が高い歌である。

では、具体的に「恋人よ」のどこが難易度が高いのか。

この歌がむずかしいのは、まず音域の広さだ。この歌の一番低い音と一番高い音の両方を地声で出せる女性は、素人の女性では、ほとんどいないのではないだろうか。それほど、音域が広い。そうすると、高い音を出すために、どうしても裏声を使わなければいけない。

実際に、裏声は出してみてもらえばわかるが、声をひっくり返すわけだから、正確な音がとれたとしても、出る音がどうしても弱くなってしまう。

これが弱くならない典型的な歌手が美空ひばりさんだった。実際、裏声で歌っているのだが、どこで裏声になったかわからないほどだったから。

まあ、それはともかく、普通、音域が足りないために裏声を使うのだが、それが僕ら審査員に苦しく聞こえないことが高得点をとれる秘訣だろう。なにしろ、最初から難易度の高い歌に挑戦していることは、こちらは十分にわかっていいるのだから。

僕らに「おっ、いいねえ」と思わせる自信のある方、どうぞ、この歌を歌って、のど

THESE RESULTS ARE IN ACCORD WITH THE FINDINGS OF OTHER STUDIES THAT HAVE SHOWN THAT THE USE OF A SINGLE-STEP PROCESS IS MORE EFFECTIVE THAN A TWO-STEP PROCESS IN IMPROVING STUDENT PERFORMANCE.

スビーの巻

子

2000年12月25日 星期三

行爲規範 (第1卷)

1) 之 爲 得 聖 人 止 二 爲 斷 斷 聖 人 之 爲 聖

僕が読む「昭和史観」には、このころの執筆をうけて、こころが
後世に残る名曲、その時代の美談となる曲、いろいろ、世間を「あつ」
と驚かす曲などをあげられてゐるが、その「まづ第一」の題を「美談」を説き
そのいは面影をあげた曲のちやうど、

[illegible]

寺尾聰さんと言えば、僕らの世代では、名優宇野重吉さんの息子の俳優で、昔は石原プロにいて、最近では時代劇にもよく出るいい役者というイメージで、この曲がヒットするまでは、まさか歌を歌っているとは知らなかったという人も多かったと思う。申し訳ないが、実は、僕もそのひとりだ。

ところが、昔からのファンに訊くと、彼の音楽ライフはかなり長いらしい。

調べてみて驚いた。あのGSブームが起るちよつと前の昭和41年、彼はザ・サベージの一員として、「いつまでもいつまでも」というヒット曲を出しているし、この「ルビーの指環」も彼の5枚目のシングルだというから驚いた。

この歌ができた時、寺尾さんが当時所属していた石原プロに発売許可を求めたら、専務に「こんなお経みたいな歌……」と言われ、しょげていた時、社長の裕次郎さんが「まあ、いいじゃない。出してあげれば」と笑って助け舟を出したという逸話も残っている。

僕は、この曲のメロディラインや曲の構成を聞いた時、「お経」のような、とは思わなかったが、外国の曲に日本語の訳詞をつけたカバー曲だとばかり思っていたから、寺尾さんが作曲したと聞いて驚いた覚えがある。僕のカンでは、「メロ先」、すなわち、メロディが先にできて、それに歌詞を後からつけたものではないかと思うが、もし、ちが

っていたら申し訳ない。曲の感じから、そんな印象を受ける。

もし、先に詞があったら、こういうメロディはつかないだろうというのが、その理由だ。それだけ、メロディに特徴があるということだ。この曲が異色なのは、途中での転調である。思い切り転調してる。

この転調は、普通行われない。なぜなら、転調があると、カラオケで歌う人が1番から2番に移る時、2番の出だしの音をまちがえやすいからだ。たとえば、1番の後半で、半音あがったりすると、その音で2番に入ってしまうことが多い。もちろん、曲としては、転調が途中であると変化が出てカッコいいのだが、人に歌われないことには、意味がない。

だが、この「お経のような」曲は、発売されるや、当時人気のあった音楽番組「ザ・ベストテン」で12週1位だったばかりか、この年のレコード大賞まで受賞している。

いまや、「お経」どころか、シティ・ポップスの代表曲となっている。あの頃、何気なくライブハウスをのぞいたりすると、コンボ・バンドが必ずこの曲を演奏し、歌っていた記憶がある。

彼は、俳優として映画「雨あがる」で日本アカデミー賞主演男優賞を受賞しているか

ら、日本レコード大賞と日本アカデミー賞の両方を受賞してる人は、彼だけである。

さて、歌い方だが、やはりまず歌う前に、状況把握をして、気分を高めてから歌うといい。

あなたは町の喫茶店で冷めた紅茶を飲みながら、くもりガラスの窓の向うの雑踏を見ている。ふと、人波のなかに、別れた女の^{おもかげ} 倂を見つめる。そして、思い出す。彼女と出会ったのは、真夏の暑い日だったこと。誕生石はルビーよ、と微笑んだ笑顔。そして、別れの晩、背中を丸めるようにして、そのルビーの指環を指から抜いた……。

この歌を歌うなら、イントロがはじまる前に、そんな気分には浸っていると、きつと、うまく歌い出すことができると思う。

ワインレッドの心

昭和
58

井上陽水作詞 玉置浩二作曲 安全地帯／星勝編曲

安全地帯歌（キティ）

北海道旭川の路面電車の電停から

安全地帯は、北海道旭川出身の玉置浩二さんを中心に作られたバンドで、最初はアマチュアだったそう。

バンド名をどうするか考えていたら、ちょうど旭川市内を走っていた路面電車の停留所の安全地帯に「V」というマークが出ていたのを見て、「これはVICTORYのV」だとこじつけ、以来、勝利を目指すバンドの象徴として「安全地帯」という名前にしたと言われている。

やがて、ヤマハのポプコンに出ていた頃、井上陽水さんに見出され、昭和56年上京。以来、井上陽水さんのバックバンドとして、全国ツアーを体験し、プロのバンドとしての勉強を続けた。その頃から、レコードデビュー。



昭和58年11月

そして、任天堂のファミコンがブームになった昭和58年、「ワインレッドの心」がサントリーの赤玉パンチのCMソングに起用され、大ヒット。一躍、有名になった。この曲の作詞が井上陽水さんなのも、そのせいだ。

この歌も、カラオケでよく歌われるが、かなり難易度が高い。

この曲を歌いこなそうとするのなら、中音から高音の声が地声であることがのぞましい。特に、高音が伸びやかに出る人なら、「今以上、それ以上、愛されるのに」という歌い手にとって、大変に「おいしい」メロディが待っていてくれる。

この部分のメロディの急坂を一気に上がりきれるかどうかで、この歌を歌いこなせるかどうかが決まると言っているだろう。

高音が出る30代から40代前半の方に、ぜひ、がんばってほしい。

クリスマス・イブ

昭和58

山下達郎作詞・作曲・編曲

山下達郎歌 (ムーン/ワナー・ミュージック・ジャパン)

いつ歌っても、クリスマスの気分になれる名曲

「昭和歌謡」も次第に終わりに近づくと、まるで、昭和の終わりを知っていたかのように、「これもどうだ」とばかり名曲ラッシュが続いた。

この「クリスマス・イブ」もそうだ。JR東海のCMで使われてから、多くの人に知れ渡ったが、僕はこの歌が大好きで、クリスマス近くにディナーショーがあれば、必ず、オープニングで、少しテンポを早めて歌わせてもらっている。

まず、この歌を歌って、会場の人たちにリズムに乗ってもらってから、「こんばんは。平尾昌晃です」で、ディナーショーがはじまるわけだ。

そんな関係もあって、山下達郎、竹内まりや夫妻とも親しくお付き合いをさせていた



昭和58年12月

だいているのだが、彼らは本当に心温かな素敵なお夫婦だと思う。山下さんのライブにも招待されてステージを見させてもらっているが、この曲のイントロが会場に流れると、会場は一気に盛り上がる。

もちろん、山下さんにはヒット曲はたくさんあるのだが、いまや、この曲が山下さんを代表している曲なのかもしれない。

思えば、多くの歌手の冬のコンサートやディナーショーで、クリスマス・ソングと言えば、長い間「ホワイト・クリスマス」が定番だったが、山下さんのこの曲が生まれてから、僕にかぎらず、みんなこの歌を歌うようになったし、お客さんのリクエストも多い。

いや、いまや、クリスマス・シーズンにかぎらない。逆に言えば、この歌を夏、会場で歌っても、会場が一瞬で冬になり、クリスマスの夜になってしまうのだからすごい。まさに、歌の力だと言えよう。

山下さんご自身も「何度聞いても飽きのこない、普遍的な曲作りをしたい」と言っていたが、まさにこの名曲でその夢を実現した。

山下さんという人は、実に多彩な人で、作詞、作曲、編曲はもちろんのこと、レコー

デイングでは、ボーカル、ギター、コンピューターのブロードグラミング、パーカッション、シンセサイザー、キーボード、ドラムス、ピアノ、ハモンドオルガン、ベースまですべてひとりで手がけるといふのだから、すごい。それも、すべて、独学で学んだといふのだから、天才だ。

そんな天才がクリスマス・ソングの常識を変えた名曲「クリスマス・イブ」。歌ったことのない人がいたら、ぜひ、挑戦してほしい。

ちなみに、竹内まりやさんには木の実ナナさんと僕のデュエット曲『星空デート』を作詞していただいた。

北ウイング

昭和
59

康珍化作詞 林哲司作曲・編曲

中森明菜歌 (ワーナー・パイオニア)

一本芯が通ったアイドル登場

いまから思うと、昭和が終わりに近づくと、最後のアイドルたち



昭和59年1月

が腰を切って芸能界に流れ込んできたような気がする。

「花の57年組」というアイドル集団があったことを覚えているだろうか。

昭和57年に各レコード会社、プロダクションから最後の波に乗り遅れまいと、駆け込んできたアイドルたちだ。名前をあげてみよう。

石川秀美、小泉今日子、シブがき隊、早見優、堀ちえみ、松本伊代、三田寛子、そして、この中森明菜である。

これらのアイドルのなかで、僕が音楽的に一番優れていると思ったのは、中森明菜さんだ。

彼女は、16歳で「スター誕生」で合格し、デビュー2枚目の「少女A」がヒット。そして、7枚目のシングルがこの「北ウイング」である。そして、同じ年に井上陽水さんの曲「飾りじゃないのよ涙は」を歌い、さらにその2年後の昭和61年、「DESIRE」を発表。

正直言って、この「北ウイング」、「飾りじゃないのよ涙は」、「DESIRE」の3曲を聞いた時、明菜さんは、第二の山口百恵さんになれる逸材、つまり、その世代を代表する歌手になれると思ったほど、抜群の歌唱力だった。

しかし、残念ながら、明菜さんには時間がなすぎた。百恵さんの時代は、「昭和歌謡」の黄金時代だった。だから、ファンもマスコミも丸ごと味方につけることができた。

雑誌もテレビも、みんな、百恵さん、百恵さんだった。

だが、昭和の終わりに登場した明菜さんを待っていたのは、個人主義と多種多様な趣味の乱立時代。雑誌の休刊や廃刊が相次ぎ、若者たちは「スーパー・マリオ」などのファミコンのゲームに夢中になっていった。

芸能マスコミも以前のような力を失い、明菜さんは、抜群の歌唱力とアイドルにしてはかなり芯の強い性格を持ち合わせながら、時代が邪魔をして、百恵さんのような国民的なアイドルになれなかったのである。

しかし、僕はこの「昭和歌謡」のなかに、彼女の「北ウイング」だけはどうしても入れておきたかった。これは、本当にいい歌である。もちろん、僕が海外旅行や飛行機好きだということもあるけれど、この「北ウイング」が出た時に、「ああ、いい歌だなあ」と思ったし、この歌が聞きたいために、明菜さんのステージにも出かけたほどだった。

この歌も最初の4行、これが大事だ。ここをダラダラ歌わないこと。ここで、一気に聞いている人を惹きつける。そんな気概を持って歌い出すことが大切だ。

とは、度田神社の北ウイメンから、いま、彼が待つてゐる舞臺にひびくところを聴びたい
ていく、そのときめき、揺れ動く文心を心に秘めて歌をばし。

明葉さんは、ある意味、ミステリヤスな女性だったから、こころが似合ったのだから、この歌を歌うならば、自然にミステリヤスな女性になった気分で歌うといいかも知れない。

59

醫治之良方 巧醫之良方 醫治之良方

（タカハ・ヤナギノ）

「核心」の語は、この本で初めて

機は高倍率製士といふデプロをカブリシヤスの時代から聞いているが、カッパス系の歌を歌ひたつて、彼等は煙の深さでいふか、実に、素直にして、その時を待つてゐる。



1992年

彼女のそうした才能のなかで、僕が一番強く思うのは、彼女が女性の「恋心」を表現する能力の高さだ。

もう少し、具体的に言えば、言葉の使い方がとても上手だということかもしれない。

高橋さんは、その華やかなステージの影で、これまで大変な苦労を味わってきた女性だ。僕が知っているかぎりで言えば、彼女の両親は広島で被爆し、お父さんはそれともとで39歳で亡くなっている。このお父さんが、ジャズプレイヤーだったことから、芸能界に憧れ、16歳の時にお母さんと住んでいた博多から上京。渡辺プロで歌の勉強をしていた。

一時は「スクール・メイツ」にも在籍していたのだが、自分の求めている路線とちがうので脱退し、博多に帰って、ディスコやクラブで歌っていたところを、ペドロ&カプリシヤスに誘われて、二代目のボーカルになった。それが、昭和47年だから、ずいぶん昔の話になってしまう。

そして、あの懐かしい「ジョニィへの伝言」、「五番街のマリーへ」がヒットして、昭和53年、ソロになった。そして、昭和59年のこの「桃色吐息」で今日の地位を築いたのだ。

この「桃色吐息」という曲もまた、独特の歌だ。珍しい、と言っているかもしれない。僕は、以前から彼女の歌を聴いていたから、この歌を聴いた時、「ああ、彼女は試行錯誤のなかで、きつとこういう歌を歌いたかったんじゃないかな」と直感で思った。

「桃色吐息」を上手に歌うには

もともと彼女の歌は、むずかしいので有名だ。並みの人では歌えない。声も張り上げないと音域的に苦しかったりするからである。

僕もテレビ番組などで審査をやっていて、高橋真梨子の歌を歌う女性が出てくると、「へえ、かなり自信があるんだな。じゃあ、きちんと聞こう」と構えてしまうくらい、

彼女の歌は難易度が高い。

しかし、この「桃色吐息」は、彼女のレパトリーのなかでは比較的やさしい歌である。僕が「珍しい」と言ったのは、そういう意味でもある。でも、むずかしいことはむずかしい。何がむずかしいのか。それは、この歌の持つ独特の雰囲気を出すことである。いかに、女性の恋心を聴く人に伝えるか。

はつきり言っておこう。この歌は、まず、はじめの4行で聴く人すべてを自分の世界

に引っ張り込まないといけない。それは、わかると思う。僕も審査員をやっていて、この4行で、ほとんどその人の実力がわかる。

その上、問題は次の展開だ。

引き込んだところで、次の歌詞の世界を見せる。まるで目の前に、歌詞の映像が、聞く人の脳裏に浮かんで見えなければいけない。

特に、この詞は独特の世界を描いているから、普通に歌詞の通りに歌っていたのでは、何を歌っているのかさっぱりわからない。言葉を理解し、メリハリを利かせてわかるように歌わなければいけないのだから、むずかしいのだ。

これで、メロデイまでがむずかしかったら、人は誰も歌わないのだが、メロデイがそれほどでもないで、歌いたいと思う人も多い。そこに大きな罫があるのだ。

僕はあえて言うが、この「桃色吐息」の歌詞が理解できる女性は、しびれるような素敵な恋の経験者か、いま、進行中の人ではないかと思う。歌詞をもう一度、よく読めば、僕の気持ちがいきつとわかってくれるだろうと思う。

それがわかると、高橋真梨子さんの「恋心」を歌う歌唱力の素晴らしさに、改めて気がつくのではないだろうか。

時の流れに身をまかせ

昭和
61

荒木とよひさ作詞 三木たかし作曲 川口真編曲

テレサ・テン 歌 (トールス)

コブシもヴィブラートもない、ナチュラルな歌声

「アジアの歌姫」と呼ばれて、出身地の台湾はもちろん、日本をはじめ、中国、韓国、香港、東南アジアで愛された歌手、テレサ・テンが亡くなったのが平成7年、彼女がまだ42歳の時のことだ。

テレサ・テンは香港で歌手として活躍していたのをスカウトされ、昭和49年3月に「今夜かしら明日かしら」で日本デビュー。この歌はそれほどヒットしなかったが、2枚目の「空港」で、ようやく彼女の存在に気づいたファンもいただろう。

この僕も「空港をテーマにする歌ってめずらしいな」という程度でしか、彼女に関しての関心は薄かったように思う。

いま思うと、昭和49年と言えば、まだ演歌ががんばっていて、さくらと一郎の「昭和



昭和61年2月

枯れすすき」が、また昭和50年には細川たかし君の「心のこり」、そして、昭和51年には都はるみさんの「北の宿から」などがヒットしていたので、彼女の存在はそれほど目立たなかったのである。

そんなこともあつてか、彼女は昭和53年にいったん香港に戻っている。

そんな彼女が満を持して再来日したのは、それから数年後の昭和59年である。

そして、その第1作が「つぐない」である。これが、40万枚を超す大ヒットとなった。そして、まるで陸上競技の三段跳びのように、次の年の「愛人」そして、そのまた翌年の「時の流れに身をまかせ」とヒットを連発、3年連続有線大賞を受賞した。

この3連続ヒットは、荒木とよひささんの詞、三木たかしの作曲、そして、川口真さんの編曲というAKKトリオの功績が大きい。

僕は、彼女の歌のなかでは、この「時の流れに身をまかせ」が大好きだ。

どこが好きかと言えば、荒木さんの詞だ。特に3行目から4行目にかけて、「平凡だけれど誰かを愛し、普通の暮らししてたでしようか」には、正直驚いた。「こんなことを言う女って、何者？」ローマの休日「の王女様？」と思った。テレサ・テンが歌ったからいいようなものだが、僕はよくこんな詞を書けるなと思ったのが、この曲の第一印象だっ

た。

だから、僕はこの歌を歌う人の審査をする時に、この人はこの部分をどう解釈して歌っているのかな、とつい考えてしまう。まして、いま、平凡にどなたかを愛して、現実に普通の暮らしをしている女性が、この部分を歌うには、「恋に恋する」気持ちで歌うしかないのではないか、と思うのだ。

テレサ・テンの歌い方を音楽的にみると、非常に透き通った声質で、コブシもヴィブラートもないナチュラルな歌唱法だ。

したがって、この「時の流れに身をまかせ」は、一見、誰でも歌えそうだが、意外にも難易度は高い。あえて、カラオケで上手に聞こえるワンポイントを教えると、歌い出しの「もしもあなたと」、「逢えずにいたら」の「と」と「ら」は、「と」とか「ら」のように伸ばさないこと。「私は何をしてたでしょうか」の「か」も、「平凡だけど」の「ど」も、「普通の暮らし」の「し」も同じ。

そして、二度目の「してたでしょうか」の「か」は、逆に、「か〜〜」と、息が続くかぎり伸ばす。

次の「時の流れに」ではじまるサビの部分は、ゆったりと、まさに身をまかせる感覚

で、この歌で一番大事な部分は、「だからお願い、そばにいてね」という部分。そばにいてね、という部分。この音が出なければ、上手に裏声を出すことも、それと、「いまはあなたしか」の部分。分の音を正確に、ゆっくりとリズムに乗せること。

もう一度言う。「だからお願い、そばにいてね」と「いまはあなたしか」の2箇所。ここがうまく歌えれば、この歌はマスターしたと言ってもいいだろう。

天城越え

昭和
61

吉岡治作詞 弦哲也作曲 桜庭伸幸編曲

石川さゆり歌 (日本コロムビア)

カラオケで素人が絶対歌えない歌を作ろう！

カラオケが定着し、いわゆる自称「歌に自信がある人」が増えてくると、その人たちは、より難易度の高い歌に挑戦したくなる。

特に、演歌ファンにその傾向があつて、カラオケ教室などで歌を習っている人や、のど自慢のコンテストに参加するような人たちは、次々とむずかしい



昭和61年7月

歌を歌おうとする。そんな演歌ファンの気持ちを逆手にとったと思われるのが、この石川さゆりさんの「天城越え」だ。

この歌は、調べたところ、こんな経緯で作られた。

昭和60年のことだ。作詞家の吉岡治さん、作曲家の弦哲也さん、それにアレンジャーの桜庭伸幸さんの3人が、天城湯ヶ島の温泉旅館に二泊三日の予定で籠もり、食事も酒もそこそこに、この歌を制作したという。

なぜ、3人がいっしょに籠もったのか。それは、大変な難題を抱えていたからである。その難題とは、カラオケブームの最中に、「カラオケで素人が絶対に歌えない歌」を作ることだった。ということは、わかりやすく言えば、たとえ、プロの歌手でも「石川さゆりしか歌えない歌」を作るということである。

そして、作詞家は、これまでの演歌にない、練りに練った歌詞を次々と並べる。

たとえば、阿久さんは「北の宿から」で、「あなた死んでもいいですか」と書いて衝撃を与えたが、吉岡さんはもっとすごい。「誰かに盗られるくらいなら あなたを殺していいですか」と書いた。男に惚れて狂ったような女の心情を激しくぶつけながら、女にとっての「天城越え」とは何かをこれでもかと訴える。まさに、恐ろしい女の情念を

詞に託した。

それを作曲の弦さんが引き受ける。ドロドロとした女心の恐ろしさを見事に譜面に写しとった。弦さんも元歌手だったから、「むずかしい歌」をわかっているのだろう。

さて、この歌は本当に「素人が歌えない」歌なのだろうか。

僕も、この歌は「昭和歌謡」のなかで、最も難易度の高い歌のひとつだと思う。だが、決して、「素人が歌えない」歌ではない。どうしたら、上手に歌えるか。それは練習である。石川さゆりさんの歌をよく聞いて、一小節一小節ずつ、ていねいに真似ることだ。ぜひ、挑戦してほしい。

乾杯

昭和
63

長渕剛作詞・作曲 長渕剛／瀬尾一三編曲

長渕剛歌 (東芝EMI)

人生の大事な場面で歌われることの素晴らしさ

こうして「昭和歌謡」をていねいに見ていくと、いつまでも残っていく「歌」もあれ

実際、この「乾杯」は、地元鹿児島県の友人が結婚すると聞いた長瀬さんが、親友へ

福の気持ちを伝えるために作詞作曲した歌だそう。

まさに、人生の節目にふさわしい名曲である。

長瀬さんは、高校時代からフォークバンドを作り、学園祭などで歌っていたのが、今日の芸能活動のはじまりだ。やがて、大学に入学すると、博多のライブハウスにも出演し、腕を磨いていた。

そして、当時、フォークシンガーの登竜門と言われたポプコンで入賞し、レコードデビューをしたがまったく売れなかったものの、吉田拓郎、南こうせつらの大物シンガーに支持されて、次第に頭角を現した。そして、「順子」でとうとうオリコンのチャート一位となり、人気シンガーとなり、この「乾杯」をはじめ、「とんぼ」などでシンガーソングライターの地位を固めた。

「乾杯」とは、いままさかなが、いいタイトルをつけたと思う。まさに、卒業式、入学式、結婚式……人生の節目に、これからもたくさんの人に歌い継がれる「昭和歌謡」の名曲である。

川の流れるように

昭和64

秋元康作詞 見岳章作曲 竜崎孝路編曲

美空ひばり歌 (日本コロムビア)

ひばりさんは自らの人生をこの歌に

「昭和歌謡」を綴るにあたり、僕は最後に気になっていた「川の流れるように」が生まれた経緯をつぶさに調べてみた。

この歌は、いまやAKB48の仕掛け人として有名な秋元康さんをプロデューサーに起用して、美空ひばり「不死鳥パートⅡ」というアルバムを制作した時の10曲のなかの1曲だった。

10曲とも、作詞はすべて秋元さん、作曲は林哲司、後藤次利、中崎英也、高橋研、見岳章の5人が担当し、基本コンセプトは、「いままち美空ひばりがデビューするとしたら、どんな曲がいいか」という大膽な企画だったという。

また、僕が知る限り「唯一の題名を『』の企画だった」とレコード会社のディレ



昭和64年1月

クターも若かったのだろう。しかし、美空ひばりさんは、時代を敏感に感じる人だったし、かつて、「真赤な太陽」をミニスカートで歌った人だ。どこかで、若い人の企画を期待し、喜んでいたにちがいない。

そして、出来上がった曲をレコーディングし、そのなかの1曲をシングルカットすることになった時、秋元さんは「ハハハ」という曲を選んだそうだ。

すると、ひばりさんが、まったく躊躇することなく、「私は『川の流れのように』にしていたきたい！」と断言したという。

僕はこの話を聞いて、ひばりさんが退院した時に、僕に「声が出るようになったのよ」とうれしそうに語りかけてくれた時の笑顔が浮かんだ。

きつと、ひばりさんは、あと何曲しか歌えない。だとしたら、ポップス系の「ハハハ」もいいけれど、自分の人生を歌ったような、この「川の流れのように」を歌いたかったのではないだろうか。

音楽的に言えば、この曲は、ひばりさんの音域より低い部分が多い。ということは、ひばりさんにとっては歌いにくいということだ。だが、それでもこの歌をあえて選んだのは、きつと秋元さんの歌詞に惹かれたのではないかと思う。

ひばりさんの歌唱法を参考に、この曲の歌い方を書いておこう。

まず、歌い出しだ。「知らず知らず歩いてきた 細く長いこの道」。この語尾は、決して伸ばしてはいけない。「振り返れば遥か遠く 故郷が見える」。ここも同じだ。歌わずに、語るのだ。実は、「知らず知らず」という部分が、この曲のなかで一番低い音だ。

だから、もし、キーを換えるなら、この「知らず知らず」の声が出るキーにしておかないと、この「語り」の意味がなくなる。この歌は、メロディよりも歌詞をしつかりと伝えることが大切だからである。

「でこぼこ道や曲がりくねった道」というところは、昔、自分が苦勞したこと、病氣になったこと、挫折したことなどを思い出しながら、なつかしいイメージで歌い、「地図さえない それもまた人生」で納得する。

サビの「ああ 川の流れのように」は大らかに、空から川全体を見ているように歌うといい。そして、「空が黄昏に染まるだけ」という希望で締める。

「人は物語を生きている」と言う。また、「人は誰でも一冊は小説を書ける」とも言う。だから、この歌は、誰でも自分の人生を振り返りながら、歌える曲なのだ。

まして、美空さんの人生は、どれだけの悲しみと喜びが詰まっているのか。しかし、それも山の上から見れば、山間の一本の川。曲がつていたり、逆流したり、濁水して川底が見えたり、淀んで流れなかったり……。それでも流れている一本の川に、ひばりさんは自分の人生を見て、そして、この曲をどうしても歌いたかったのだと思う。

この歌は、大ヒットした。だが、発売して6カ月後、ひばりさんは亡くなられた。だから、僕は、戦後から昭和64年までの「昭和歌謡」の大トリは、どうしても、美空ひばりさんのこの「川の流れのように」で締めたかった。

そして、この昭和64年1月7日を最後に1月8日から平成元年となった。

昭和は、この歌、そして、美空ひばりさんとともに終わったような気がする。

だが、「歌」は終わらない。

「歌」はいまを生きている僕たちが、ともに歌い、ともに笑い、ともに楽しい人生を送るためにあるのだから。

歌よ、永遠にあれ！